

岳 山

年 八 十 第
號 三 第

山 岳

第十八年第三號 大正十四年四月發行

目 次

九重火山群と祖母山

苗場山 雜魚川 大沼池

レニア山に登る

針木岳冬季登山

圖 版

○星生山頂より久住山を望む ○九重硫黄鑛山

○祖母山頂附近北西側のアブリーチ ○合頭山腹より涌蓋山を望む

竹 内 亮	一頁
戸 澤 英	一・一二
國 府 精 一	三六
船 田 三 郎	五六

對頁
八

二四

○苗場山頂上○三國山より見たる苗場山と神樂峰 三二

○南方より見たるレニア山頂の雪田とニスクオリイ氷河 四八

○立山頂上より後立山山脈を望む 五六

○加々森山○信遠國境青崩峠 七二

雜 錄

○「多摩川相模川の分水山脈」について(武田久吉)○朝鮮金剛山の山火事について(太平晟)○遠山附近(冠松次郎)○遠山奇談に就て(吉岡八二郎)○三峠山の岩登りに就て(沼井鏡太郎)○雨雪の生成を何と見る(山本徳三郎)

雜 報

○富士登山鐵道○高山植物採取取締○淺間山活動を始む○淺間の大噴煙○第三回エガレスト山探檢概略

○山岳圖書紹介

○山のしづく○登高行第五年

○會員通信

會 報

○第二十六回小集會記事○退會者○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

九重火山群と祖母山

竹 内 亮

八月二十五日に友人F氏と博多驛を立つて、久留米から軌道で日田へゆき、徒歩約五里、大太郎峠をこえて玖珠郡の平川に至り一泊。翌二十六日は約一里半程の森町へ自働車で行き、小林區署に友人H氏を訪れ、署長M氏の好意で町の背後の角埋山頂へ案内してもらひ、附近の地形を概観し、午後はH氏と博多から同行した友人F氏との三人で、約二里の道を往復して新耶馬溪の勝を訪れ、二十七日又三人づれて九重山麓中の筋湯温泉へ行き、翌日から三十日迄そこに滞在して、九重火山群中涌蓋山及び涌蓋山と一目山との尾根、合頭山より立岩・星生山一帯を跋渉し、三十一日F氏と筋湯を發して黒岩山を極め、中野温泉・寒之地獄・硫黃山等を經て、三俣山の一支峯に攀ち、轉じて千里濱から久住山頂を極めたが、山頂で大風雨に會つて、ホーホーの體で危険な千里濱火口瀨の轉石を傳つて下り、法華院温泉に一泊。九月一日は法華院温泉を發し、久住町に下り、自働車で竹田町に至り、博多へ歸る。F氏と別れ、翌九月二日はこの小林區署を訪れて種々得る處があり、午後四里の道を祖母山麓の神原へ至り一泊。九月三日祖母山頂を極め、尾平嶺山へ下り一泊。九月四日大雨中を尾平より竹田に至り一泊。翌五日博多へ歸つてこの行を終えた。旅行中の見聞を一括してここに少しばかり誌上をけがして見たいと思ふ。

一、九重火山群

九州本島の略中央部で緑川と大野川とを結ぶ線と、山國川と筑後川上流とを結ぶ線との間の地形は、標式的な種々の火山地形を含んで居るが、特に標式的な美しい熔岩臺地の廣いひろがり、それを基盤にした數個の成層火山群、森林の極めて貧弱な大きな草原地帯のひろがりなど、すべてが單調と壯大と秀麗と、そのすべてを貫らぬ高原特有な涙ぐましい寂寥とがある。そしてこの景觀に對して南方の祖母山塊、國見山一帯より市房山を中心とする山地の飽く迄威壓的な立體的な山地、それを被ふ鬱蒼たる大森林との對照は眞にむしろ奇蹟的と云ひ度い程劃然たるものがある。

そしてこの高原のさびしいしかし開闊な氣分の中心は自分がここに云ふ九重火山群一帯である。自分がここで九重火山群といふのは、大阿蘇の外側の高原と由布鶴見火山群の山々との間にはさまれた一帯の高原と、その中心に群がる美しい緑の草原に被はれた一團の火山群であつて、その火山群は略次の様な小群に分けることが出来る。

(一)大船山群。(二)久住山群。(三)三俣山。(四)黒岩山群。(五)西部山群。

大船山群と云ふのは最東部の一群で、三つの獨立した火山が相接觸して、鼎足狀に聳立して居る。黒嶽は東部にあつて全山樹林に被はれ、眞に黒岳の名にそむかないものがある。標高一五五六米、頂上には地圖で見ると凹處がある。全體の地形が岩石露出して居て、非常に峻峻であるといふ。この西に接して平治岳は北に、大船山は南に相並んで居る。平治岳は全山草原に被はれた美しい缺頂圓錐形の小さな山で、標高一六四三米。大船山の頂から見ると頂上に草原に被はれた浅い凹處があつて舊火口趾を保存して居る。大船山は九重火山群中の一偉觀であつて、山容の雄偉な點は三俣山と共に著しく人目を引く。標高一七八七米、最高點の久住山と大差がない。山の南半部は岩石露出して地形が非常に荒々しく且つ厚く樹林に被はれて、その高處は一大岩柱をなして、この山の最高點をなして居るが、北半部は草原性の優雅な地形を呈して居る。頂上には最高點の岩柱を南壁とする一大火口があつて、圓い原形は完全に保存されて居る。この大火口の外に小火口が二三あつて、ある者は水を湛えて居る。

久住山群は大船山群と法華院の盆地をはさんで西に位置して居る。九重火山群の主要部で最高點の久住山は一七八八米の高度を以て聳えて居て、九州本島の最高點をなして居る。

この一群はこの久住山としばしば九重山の名で呼ばれる星生山(一七六四米)とが人々に注意されて居るけれども、その外に殆んど同高度の峯が相近接して群立し、其間は舊火口や山體間の凹地形な

どが存在し、大變複雑な地形を呈して居る。それ等の峯々の多くは充分顯著な峯であるにかかはらず無名のものが多い。今度の旅行でそれ等の峯々を一々踏査したいと思つて居たが、天候の都合で不成功に終つた。舊火口や凹地形には處々水を湛えて居て、特異の植物景觀を呈する處が多く、純粹な高層沼野の相を具して居るものも少くない。又イカラジの池は古來雨乞の迷信などと結びついて可成知られた小火口湖である。

久住山はこの群の南縁に瘤の様に聳えた小さな峯で、北東部の地形は單調であるが、南西側は非常に峻急で山骨裸出して居る。頂上には一等三角點の石標があるさう他に何も無い。

星生山は久住山の北西に近く聳ゆる峯で、その南側は急斜して舊火口趾らしい凹湿地に臨んで居るが、北側は大きな傾斜で寒之地獄一帶の高臺に及んで居る。山頂の東部は岩石點々たる地形をしてゐるが、西部は高山性の小灌木の褥に被はれた美しい斜面をなしてゐて、コケモモの小果が美しかつた。山頂には大石が神祠狀に積み重ねてある以外に何も目星しいものはない。九重硫黃礦山はこの東北側の爆裂火口にあつて天然瓦斯から硫黃を昇華採取して居る。

今度の旅行で濃霧のため偶然この一群中の瀬ノ本村に最も近い一峯に登つた。星生山の南西部は一帯の高原狀地形で、その地形の南西部は東西に延びた穏やかな馬背狀の峯となつて居る。一面に高小灌木と草原とに被はれて、山頂部に僅かに岩塊が露出するにすぎない。地圖によると高度は一七二〇米内外であるらしい。

三俣山は星生山の東部にある千里ノ濱大火口趾の谷をはさんで、久住山群の北部に聳ゆる堂々たる一箇の火山であるが、山體は可成解析されて居る。寒之地獄から硫黃礦山へ登る途中左側の山側を知らんで登ると間もなく千里之濱を直下に見る峠に出る。三俣山はこの左の山側を登るのである。今度の旅行ではこの山側を登り切つた一峯で又引きかへしたが、三俣山の主要部はそこから少し下

つて更に大きく登るのである。最高點は東部にあつて一七四五米を算する。全山コケモモやツツチの櫛に被はれた美しい山で、登路はないけれどもどこからでも登ることが出来るが、自分達の登つた路を尾根傳ひに延長するのが一番樂であらうと思ふ。

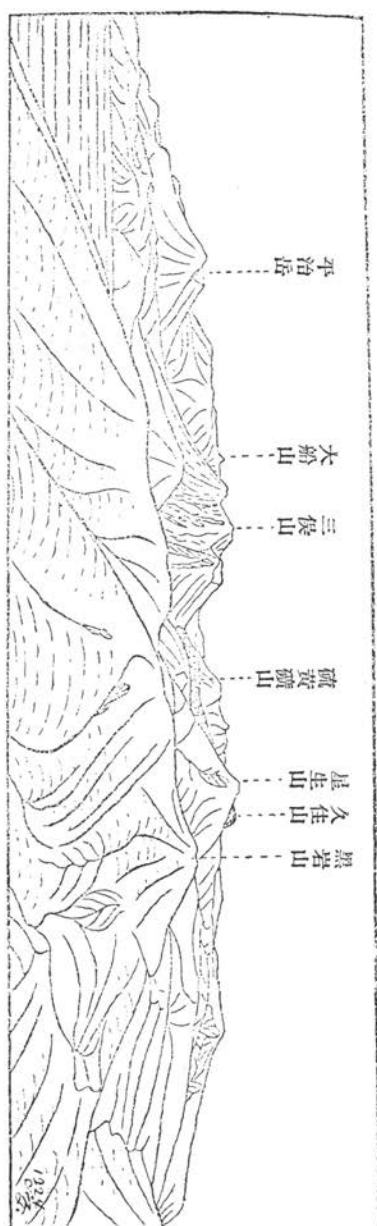
三俣山は大船山と共に山群中最も目立つ山で、元形は複式の火山であつたらうと思はれる。この北方は一五〇〇米内外の臺狀地形が短かく延びて居て、その頂面には處々に濕地がある。

黒岩山群は黒岩山と泉水山一帯の山地で、北側は飯田村の高原に終つて居るが、南方は約一三〇〇米の瀬ノ本への峠へ續いて居る。黒岩山は標高一五六三米に及び、峠のすぐ北方に續いて居て一寸人目を引く堂々たる山容をして居る。東側は緩やかな草原であるが、西側は急峻で、上部は岩石と樹林とで山容を引き立たせて居る。登る路は峠からでもいゝけれども、自分は筋湯から山の北側の鞍部に出て、その方面からなだらかな草原を登つた。最高點は岩石で、北側は石楠などの密な灌木林をなして居るが、頂面は概して美しい草原である。黒岩山へ登る前にこの北西の一峯に登つた。一四〇〇米内外の圓頂の峯で、頂面にはコケモモの櫛が美しかつた。この一帯には一四〇〇米内外の峯はいくつもあるが、殆んどすべて黒岩山へ吸收されて居て、遠望ではこれと云ふ峯がない。泉水山といふのは黒岩山の北端の飯田の高原に臨む一二〇〇餘米の峯を呼ぶものである。

この黒岩山群と西部の山群とは到る處クロマツ・ヒノキ等の若い造林地が分布して居て、路なども縦横に通じて居るのでかへつてまぎららしい位である。

西部山群は南獵師山（一四二三米）から一目山（一二八七米）を経て涌蓋山（一五〇〇米）に至る。一帯の美しい草原性の山地であつて、獵師山の北東部に合頭山の二三五〇米位の一脈が斗出して居る。

獵師山は圓味のある大きな頂をもつた草原に被はれた山で、瀬ノ本方面からでは可成目立つ山である。一目山は獵師山と瀬ノ本から湯坪村へ通ずる路のある八丁原の高原をはさんで聳ゆる三角錐狀の



イバノワの群山火重九るた見りよ頂山蓋頭

山で、低い割合に目につく美しい草原の山である。この北は高原状の山稜がゆるやかに續いて、中央に一二九七米の隆起があるけれども一目山程にも目立たない。しかし北端の涌蓋山は九重山群中に於ける最も優美な山として、私共の印象からはなれない対象である。洋鐘形にスキリした山容はやはらかな草原の緑に包まれて、美と優雅そのものとして、つゝしまやかに床置物の様に高原上に聳えて居る。春早くこの山は北側の人々から綿帽子山と云はれて居るさうであるが、あの優雅な山の頂に薄く雪を置いた姿は、たまらなく美しく又可憐なものだらうと思ふ。春の巡り来る毎に綿帽子を永久に繰り返す可憐な乙女の姿は、どんなにか人々の心をうるほすものだらう。

この山は一箇のコーニデで南東側の幾分馬蹄形をなした急な谷は舊火口の殘缺の様に思はれる。山頂はやゝ東西に延びた平たい草原で、東部に小さな石祠が二つと西部に小さな一箇の石祠と三等三角

點とがある。頂上に立つた日は天氣がよくつて眺望が大變よかつた。九重山群の主要部を見るのは申し分のない觀望臺である。

一帶の地形が單調でかつ草原性であるので、どこからでも登ることが出来る。自分達は筋湯を朝立つて、疥癬湯の裏から山にかゝり、尾根の高原をブラブラ遊びながら歩き、浅い谷の樹林を抜けて涌蓋山の南東部のゆるやかな草原にかゝつた。小林區署で造つたデックザックの小徑にかゝる頃から傾斜がやゝ加はり、三十分許りも急斜を登ると東側が急斜した一支峯に出た。こゝ迄約三時間を費やしたが、二時間未滿で來れる地點である。こゝから頂迄は急斜を約二十分も登ればよい。

九重山群の北麓の高原は八〇〇米乃至一〇〇〇米で、僅かに北に傾斜して居る。一帶に原始的な草原地帯で、耕地は點々存在する小部落の附近に少し許かり見られる許りである。悠々迫らざる趣きは何とも云へない情緒をそゝり、眞に大陸的な面影がある。玖珠郡は九州の北海道であるとはしばしば耳にすることであるが、この一帶の氣分は眞に北海道の十勝の高原に似た或者を有つて居る。そして處々に廣大な濕原があつて、寒地の泥炭原野に髣髴たる植物景觀の發達するのを見る。果して眞の泥炭層が發達して居るか否かを檢するの暇はなかつたけれど、水温の非常に低いこと、弱酸性であることなど特異の植物群落を發達せしめた重要な條件であらう。

南麓は開闊な大きな裾野原で、北麓に見る様な濕原の發達が餘りない。一面の乾性草原で、その雄大な緑の斜面と遠景をなす阿蘇山群や祖母山塊との對照はシッキリ調和して眞に壯觀である。

九重山群は山が高い許りでなくその植物景觀は最も高山的で、九州のいづれにも見ることの出来ない高地性矮小灌木の廣大な櫛があり、高層沼野の發達があり、岩石地あり、花美しい草原あり、森林ありて、實に景趣の盡さざるものがある。しかも到る處に溫泉地があつて宿泊に便利であることなど實に理想的な高山逍遙地である。それ等の溫泉は主として北麓にあるものが最も山に近く、かつ設備

の整つたものがある。

その内湯坪村の筋湯にある白瀧温泉は、泉質が鹽類泉で、清冽でかつ湯量が豊富であり、旅館の設備も非常にいゝ。唯交通がやゝ不便で、森方面からでは行程七里に餘り、且つ可成な登り路である。宮地又は内ノ牧方面から大阿蘇の高原を通ずる路は六里乃至七里であるが、阿蘇の大カルデラ壁を登れば路は極く樂である。いづれの路も馬は通ずるので、馬背によつて來るのも一興であらうと思ふ。筋湯を根據にして登り得る山は西部山群及黒岩山群で、久住山群も久住山頂迄約二里餘であるから、久住山又は星生山丈ならば充分一日に往復出来る。

筋湯の下流に猶數個處の温泉があるけれども、旅館の設備など到底比較にならぬ。

黒岩山群の東側の谷には中野温泉と寒之地獄とがある。中野温泉は温泉としては湯量も少なく不潔であるが、眺望のいゝことは他に比類がない。旅舎は唯一軒きりで、夏は可成雑沓するらしいが客の少ない時ならば滞在してもいゝと思つた。寒之地獄は冷鉱泉で醫治的の効は顯著なものであるので、夏は浴客が非常に混雜する。旅舎は純粹の木賃宿で浴客の多い時はとても泊る氣にはなれぬ。しかしこの二つの旅舎ともに久住山群・黒岩山群・三俣山への理想的な根據地であることは特記すべきことである。星生山の山腹に星生温泉があるけれども可成不潔な木賃宿らしく、かつ温泉はそこから數町の急坂を登つた星生山の上部にあると云ふ風なので、こゝに來る浴客は随分眞剣な湯治客丈らしい。その温泉は明礬泉ださうで砂糖を加へると大變結構な飲料であると云ふ話を聞いた。

久住山群と大船山群との間の盆地を前に控えて、千里濱火口瀬の下に法華院温泉がある。硫黄泉で白濁して居るので餘りいゝ氣持がしない。旅舎は一軒で純粹な木賃宿である。泊つた日は一晩蚤に悩まされてマンジリとも出来なかつた。三俣山・久住山群・大船山群への絶好な根據地であるが、とても二日と滞在する氣にはなれない。こゝには元山伏の坊があつて明治初年頃迄可成榮えたものであつた。

といふが、今は唯一軒の旅舎丈で、附近の草原には古い墓石が顧るものもなく黒雨にさらされて居るのも一種深い感慨に打たれざるを得ない。

大船山群中の黒岳は法華院温泉から登ることも出来るさうだが、この方面にはむしろ東南麓の湯原温泉又は七里田温泉から上峠に登つて、そこから登る方がイ、といふことである。湯原温泉は竹田町から自働車の便もある可成大きな温泉地であるといふが、七里田温泉は唯木賃窓が一軒きりな不便な處ださうである。

二、祖母山

久住山群から南に望む屏風の様な藍色の祖母山塊は實に雄偉そのものの感がある。祖母山・尾平山（假稱・本谷山・傾山等の一六〇〇米以上の連嶺は、北側が非常な急斜をなして登えて居るので、この方面からの立體観は實に壯觀である。かつ全山鬱蒼たる樹林に被はるゝ景觀は、九重火山群の樹林の少ない開闊な景觀に比して深さと神秘とが全山地を支配して居る。熊本大林區署では、祖母山の東側で頂上を含めた六七六町歩を原生狀態保護林として、特別な注意の下に保育することにして居るのは眞に適當な考慮である。

祖母山は標高一七五八米を算し、附近群山中の雄であるが、山容の特異な點はむしろ傾山（一六〇五米）であつて、遠望に於ては傾山が祖母山と同じ程度に觀者を引つける。

祖母山の西側は比較的緩斜で谷も多くの系統に分かれて居るが、東側の上部は殆んど懸崖狀をなして深い大きな谷に及んで居る。従つて尾平鑛山から見た山容は實に雄偉奇拔を極めてゐる。

この懸崖狀の地形は祖母山頂から約一里南東の尾平山（假稱一六三三米）の一角に及び、一六〇〇米以上の高度で連つて居るが、祖母山頂に於て急に一七〇〇米を超える迄に高まつてゐる。



右下

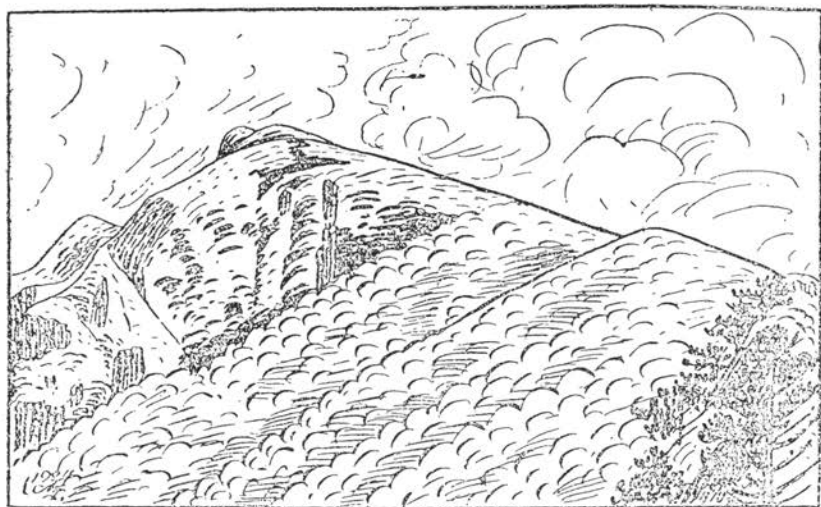
九重硫黄嶺山

深野五郎氏撮影

左上

星生山頂より久住山を望む





尾平路の上の部より見たる祖母山頂

祖母山への登路は今の處三道ある。一は西側からするもので、田原村五ヶ所から祖母山頂より西に出た尾根に登り、尾根傳ひに頂上に行くものである。八代華氏はやはりこの方面から津留・神原コナハを経て尾根路に出て居られる。二は樞岳村神原コナハから急峻な登りを前記尾根路の上部に出で山頂に至るもので、竹田町方面の登山者は主としてこれによつて居る。三は尾平嶺山からその少し上流の左側の尾根傳ひに登るもので、上部の尾根に出る迄は可成グングン急に登つて居る。

自分は竹田町から神原に行き一泊して翌日山頂を極め、尾平に降りた。山頂はよく晴れて居たが附近の山々は白雲去來して、刻々に山容を變化させてゐた。東方に懸崖で鎧はれた傾山の勇姿を望んだ印象は忘られないものの一つであつた。尾平嶺山は眼下に呼べば答へん許りに見えて居たが、降つて見ると中々路程があつたのにはガツカリした。山頂に四箇の石祠が西面して安置されてある。一寸とした平地をして居て、小灌木の叢と美しく咲いた草花の團叢とがあつた。直ぐ下の懸崖にはいくつも小さな路があつて可成下迄降ることが出来る。懸崖には種々な高地性の灌木や草本が密

生して居て、絶好の採集地である。

頂上から尾平山方面の縦走は困難ではあらうけれども出来ないことはなからうと思ふ。

自分は登りに四時間半を費やし、尾平への降路に三時間餘を費やした。尾平路は頂上から少し下つた處に指導標があつて、そこから右の尾根を傳つて居る。岩の露出地が多くて、五葉松が多く生じてゐる。原生保護林はこの路から一目に見渡すことが出来る。かつ懸崖を露出した山頂附近の壯觀は終始上方を壓して居るので、他の方面の登路に比して非常に愉快である。

祖母山一帯でその上部の尾根に出ると西側になつた處に處々草原性な植物景觀を見るが、その起原は植物景觀の成立を考察するものには興味のあるものである。

三、森町と竹田町

森町は玖珠郡の中心地である可成交通の不便な沈滞して見える小さな町であるが、背後に角埋山（五六八米）を負ひ、附近に岩扇山・萬年山等の標式的火山臺地を望むのは眞に雄大な景觀である。角埋山の南麓の丘上は舊藩主が居城として設計造営中その工事を差止められた處で、今は公園となつて居るが、その雄大な設計は古人の意氣をしのぶに充分である。殊に山上に掘つた井戸の如きは先年の大雨で惜しくも崩壊したとは云ふものゝ、山上から水の出る迄深く下に掘り下げて行つた努力は唯驚嘆するの外はない。しかし森町は高い山を求める旅人には餘り用のある地ではないのに反して、竹田町は登山者にとつては意義深い町で、宛然信州松本の趣さがある。

竹田町は直入郡の中心地であると同時に大分と熊本とを結ぶ交通線の要路であつて、鐵道の連絡が無い現時にあつては最も重要な自働車の伸張地となつて居る。しかし吾々に於ける價值はこの町が多くの九州の代表的高山へ登る中心地となり得るにある。實に竹田町は北に九重火山群を負ひ、南に祖

母山地を控え、そのいづれへも一日行程で達することが出来る。

連日山地を踏破して來た疲れた旅人にとつては深い緑の丘に包まれたこの町は、絶好の休養地であると同時に、山へあこがれてさまよひ來れる旅人には高い山々の近い眺めは、どんなにか希望を大きくすることだらう。

四、剩 筆

九重火山群は九州に於ては寧ろ奇蹟的存在である。同じ火山でこの南に近く存在する阿蘇の火山群の氣分も或る特色がある。しかしそれは高度に於て比較にならないのみならず、どこか物足りない或物が残されてゐる。草原もいゝ、高岳の露はな岩の膚もいゝ、根子岳の峻峭もいゝ、しかしその草原はさみしい、露出した岩にはサビがない、峻峭は土柱のその様だ。

しかし九重火山群の自然はすべてが既に完成された自然である。高原・穏やかな山・峻峭な山・明るい美しい草原・黒い森、それ等のいづれもシツクリ調和しあつて、すべてが登山者の心をシツカリとらへずは置かない。

殊に高處の特異な高山型な植物景觀は、西部日本のいづれの高山にも見ることの出来ない一大偉觀である。即ち久住山群から三俣山に亘るコケモ、とツ、ジの大群落は、他にその類例を求むることが出来ないものである。又イハカミの豊富なことも九州のいづれの高山にも見ることの出来ない壯觀であらう。勿論ツ、ジの大群落は西霧島山群や温泉岳は既に代表的名所として人々に知られて居るけれど、この群落の壯觀には或は一步をゆづるであらう。自分は未だ花時の美觀に接したことがないけれど、疊を敷いた様な美しい褥の上に寝ころんだ丈でも、その美觀は想像するに餘りがある。更に北半球全體に亘る代表的な高山植物因子であるコケモ、が西部日本に於て唯一の過去を紀念して居る

○苗場山、雜魚川 大沼池 戸澤

ことは、どう感謝していかんに苦しいものである。

自分達の登つた時はあの小さな紅玉の様な果實は一面に斜面を彩つて居た。星生山頂の一時間はコケモモの櫛の上に横になつて、その紅果をむさぼるのに費やされた。

高地の凹處に點在する濕地は又標式的な高層沼野として、西部日本にあつては實に稀な存在である。是等高地植物景觀の保護は實に最も重要な事項であつて、天然紀念物保護の主旨に最もよく副ふべき對象である。

かつ高地景觀の保護と共に山麓の高原地の情緒は永久に保存さるべきものである。殊に泥炭原野狀態植物景觀の廣大な存在は現今九州のいづれにも求むべき處がない。

しかもこの山地が高山逍遙地として、極めて容易に踏査し得ることや、溫泉を有する旅舎の豊富なことなどは特記さるべきことである。

重ねて云ふ。九重火山群は九州に於ける否西部日本に於ける奇蹟的存在である。(一九二四・九・二四稿)

苗場山 雜魚川 大沼池

戸澤 英 一

大正十三年七月十四日 午後八時十六分松本發、十五日 午前十時四十分鹽澤着、十一時半湯澤町着、午後十二時十分發、午後二時三十分村八木澤、四時半東電小屋。十六日 午前七時小屋發、午後一時半苗場山頂、同二時十五分下山、午後九時小赤澤秋山旅舎。十七日 午前十時十分小赤澤出發、午後三時切明小西倉庫跡發、清水小屋着七時半。十八日 午前六時四十分出發、發咄天狗湯着午後零時半。十九日 熊ノ湯往復。二十日 午前七時半出發、大沼池十時着。十一時同所出發、午後二時二十分湯溫泉着。

一、苗場山

「あそこに乗鞍が見えるよ」と指さした七月の青空にまばゆくわきかへつた亂雲の間に、雪を置いたその雄姿が肩をいからしてゐる。木曾駒の登攀を企てた會原喜久藏君は夕方までとう／＼やつて來ない。今夜愈三人してあの異様に龐大な風貌の持主苗場山へ向つて旅立たうと、私は在松本の藤島敏男君の寓居に朝から山話をやつてゐた。

寢巻姿の會原を直江津で呼びとめてから三人は膝を突きあはせることができた。日本海の潮音をきくと何だか遠方の國へやつてきたやうな氣がしてならない。「猛烈な計畫をたててゐるんだよ」と藤島が笑ふ。「さうか、戸澤と二人ぢやなあ」と泰然としてゐる。

長岡から上越北線に乗換へる。車窓に近い八海、魚沼駒には雪は跡方もなく、一面になすりつけられた翠緑の塊がいかにも耐えがたい暑さを語つてゐる。山は少しおそい。「暑いなあ」と嘆聲を洩らしながら三人は木曾駒の話に耽る。五月十一日空山を埋むる雪を踏んで辛くも登りつめた時の駒のこれでも駒かと疑はるゝ白皚々たる岩峯のすばらしい寫眞を藤島にみせて貰つて驚異の心に躍つたのが昨日の午だつた。十三四年前の八月、露天のもと満月の光にぬれて、農ヶ池の畔に炎々と燃えあがつた假松の焚火に寒さをさけつつ、闐寂として更けゆく夜の山を淋しい迄にしみじみと味つた自分の最初の山旅が幻の様に回想される。雲を冠つた三國越の山巒が迫つてくる。

大正十三年七月十五日午前十一時五十分。湯澤行の乗合自動車は自分達三人を乗せて、折からの祭禮で汗に白粉の流れた村娘を道端に押しやりながら鹽澤の町を後にした。湯澤へ四里といふまばゆい白路を迂餘して約四十分かゝる。上越線の工事が着々として進行してゐる。來年の夏には湯澤の町で汽笛をきくことができるといふ。やがて土樽から茂倉岳の山腹を湯檜曾へ通ずるやうになれば、こゝ

いらの山は東京から恰好な登山地帯となるべく、従つてまた山の俗化が始まるのを誰か杞人の憂といへやう。交通機關の發達はありがたいが、その害毒も夥しい。わけて水力電氣事業の魔手に至つては誠に痛嘆の極みである。

東京をたつてたゞ漠然と苗場山をすました上は上越境の山旅といふ位の意圖しか持つてゐないので、何處から何處へ、どう歩くかといふ様な、具體的の計畫をたてゝゐなかつたのが曾原と私とであつて、きまつたプログラムを作り、夫を遂行するだけの氣持にどうしてもなれなかつた。その時々足と氣分とで動くのだ。登山といはんより、寧ろ谷を下り山に上る漂泊放浪である。兎に角三俣村から苗場の峯をきはめた上で、赤湯へ下つて佐武流へ行くなり、仙倉山を探るなり、或は稻包山を越えて野反池へ遊ぶなり、清水越にでるなり、その場にぶつかつてからといふ豫定でない豫定をたてた。ところが藤島の同行によつて、苗場を小赤澤に下り雜魚川を溯つて烏甲山を上下し、發哺へではどうかといふ話になつたが、之も大體の見當だけで、うまくゆけば魚ノ川を野反池へでるか、或は十二澤あたりから岩菅山へかけあがらうといふ野心をさへ抱いてみた。然し實現されずに残されて仕舞つた。そしてそれが地理上からの不可能に由來するのではなくて、暑熱の爲からであるといつていゝ。後遊を秋に期し度いといふのが三人の念願であつた。

湯澤の町外れで道は兩岐する。三國越は右へ。呉服屋で蠟燭を買つたら糸芯である。一軒の蕎麥屋を見付けて二杯半食ふ。腹ごしらへも出來、草鞋も買ったので（山奥にもゴム足袋が侵入してゐるので仲々草鞋がない）地上に落ちる自分達の影がくつきりと黒く短くなつたとき、愈山登りらしく歩きた。

湯澤から三俣村迄芝原峠を越えて道程二里。真上から照りつけられては仲々ひどい。リュックサックの重さが丁度三貫。荷として重いといふのではないが、慣れないので地に引き締められるやうな氣持

だ。この位の荷を何とも思はない様にならなくては駄目なのだと考へるが矢張り重い。黒鳳蝶が眼の前を飛ぶのも暑苦しい。三人は何か彼が呑氣な話をつゞけてゐた筈だ。少し登るとやれ／＼と荷をおろして、汗ふきながら天鷲絨の様に滑かな斜面をみせてゐる飯士山を眺める。「あのスロープはスキ―にいいなあ」と曾原と藤島。仙倉山らしいマツシヅな山がみえるが、どの峯も頭を雲に包んでゐるのでどうにも仕様がなない。「あそこにみえるのが割引山や牛ヶ岳らしい」と藤島が説明してくれる。雪深いこの魚沼地方も今は流石に雪條は稀であつた。「五月下旬か六月上旬雪の消えない時分やつてきたら素敵だ」と木暮氏が赤湯から苗場へ行かれた時の美しさを想像して見た。風は吹いても流るゝ汗にはかゝりもなく、まだ可なり高い處を電線が走つてゐる。近道を見つけて上りだしたとき、苗場へ水貫ひに行く青年の一團に追ひ越されたのが抑々、よくない結果を齎らしてしまつた。僅かな峠だつたが、へとへとになつて風をいれてゐると、上州の空からかぶさる様に圖々たる雲がひろがつてくる。然し誰もそれを氣にかけやうとしない程の天氣がつづいてゐたのだつた。峠を越えて苗場をみたいと思つて來たのだが鼠色に鎖された空があるばかり。

午後二時やつと三俣村の入口の八木澤の部落に着いて、左側の荒物屋で米と乾葡萄一匁を買足し、色々山模様を訊ねた。こゝばかりではないが、山麓の人は山について何物もしらない。小舎の有無さへはつきりしない。昔三國街道の道筋にあたつてゐた關係か、この僻陬の村のたたずまひも相當なものの様子。更に奥の二居には本陣をやつてゐた旅舎があり(富澤旅館といふ)、三國峠の附近にも昔の旅宿の廢屋が雨風にさらされて當年の面影を語つてゐるとかいふことだ。雨乞の一團は既に出發して、雲はひたすらに擴がつて行く。彼等にはこの灰色雲が目的であり、私達には敵である。

八木澤から直ぐに清津川を對岸の大島の部落に渡り少しく畑の間を行くと、右苗場山と赤湯道の標木がたつてゐる。川幅の廣い割に何處か幽邃の味のこもつた清津川を一寸ふりかへつて、急峻な坂路

を氣息奄々として登る。こゝみ勝ちなので、前者の踵が眼前に動くといひたい位であるが、しばらくすると緩かになり、そろそろ山毛櫨の木立に入りかける時、道が岐れる。試みに左をとつてみたがやがて草いされの烈しい草原にでた。多分此平坦地は向山と地圖にあるあたりのものらしく、又後戻りして右を行くと木の間をとほして澤の音が淙淙ときこえて來た。外の川まで下らずに南へと迫ることになる。道を挟んで鬱々と茂りあつた櫨の太木の梢の細かな葉の間に鑲められた紺青の空が爽かに光つてゐる。空に透かした樹々の葉の鮮かな緑、青白い幹、闊葉樹林のいかにもゆつたりとした軟い氣分を三人は飽く迄嘆賞した。傾斜もゆるやかになつたので、肩の痛さも忘れることが多い。青い鬱氣に包まれて晚鶯もなかず、郭公もこえず、只幽寂の限りをつくして私達の聲のみが空氣を震はしてゐる。花も稀に、僅かにゴゼンタチバナの白いのが道端に咲いてゐるばかり。玄土の軟い道は雨降り揚句の泥濘をおもはせた。昨夏月山登山のときかうした道に尠からず惱まされたのを覚えてゐる。「素張らしい樺の森林ぢやないか。山の調子が月山に似てゐる」と私。まだ緑も若い七葉樹や朴がまじつてゐた。路傍にひねくれた杉を見掛けるので不思議に思つてゐたが、段々登るにつれて——どうしても杉などのあるべきではない所にさへいぢけながら生えてゐる——それは河原に積み重ねられた小石の様にひとつの道標ぢやないかと考へるやうになつた。しきりに歩いてゐる筈なのに、一向にはかどらず、時計が早くすすみすぎる位だ。曾原はこの樹林の美しさに心ひかれて寫眞をとりたがつてゐる。休んでゐるとき眼の前の瘤だらけな山毛櫨の太さを計つたところ、目通り十三尺餘あつた。

八木澤での話に二里程した所に東京電燈のコンクリート造の家屋があるといふことだつたが、それらしいものにぶつからず、漸く湯澤圖幅から苗場山圖幅に移つて間もなく二階建の巨屋が人の手によつて荒された林の中にあつた。「これこれ」と軽い喜びに破れた硝子戸を明けて、聲をかけたが何の答もない。かはるがはる段々聲を大きくして呼んでみるが、ゴトンとも音せず、馬鹿げて高い天井の下に

雜然として器具家財が置かれ、正面には据風呂がみつかった。皆仕事にでもでてゐるのかとやゝ失望してゐると、二階から婆さんが下りて來たので、兎も角も苗場の山頂の有様を尋ねてみたが、どうしても駄目だ。誰さんがゐれば判るが、然し此の下の澤を渡つて一本道を上ればわけはない、ここにいる衆は半日で往復する、今から行つても大丈夫だと劍を含んだ返事だ。苗場の頂上とおぼしきあたりは雲が千切れ飛んでいつか霧小便になつてしまつた。高石山へ續く尾根の空も怪しい兆をみせてゐる。「どうしやう」と一人が云ふ。「どうしやう」と鸚鵡返しをする程どうしていいか判斷に苦しむコンデションにある。時計をだすと四時を過ぎてゐる。頂上迄どの位かときくと、二里あるといふ。三時間として七時になる。小屋があれば泊つてもいいが、この雨ぢやとても寒くて仕方あるまいし、どうせ雨ならこゝで泊つて明日は二時頃出發した方が宜からうと決つて、爐邊を借りやうとする少し前に、若いかみさんが泊つて行つてはどうかと云ふので、莫座を敷いた入口にリュックサックを置き、飯盒をさげて米をとぎにでる。意地悪くも北の空が時々青くなつて薄陽がさしてくる。以前水力事業に使つたケーブルが無慘に破壊されたまゝ残り、香もなくなつた木片が狼藉としてゐる間に拓かれた青菜畑があり、その傍に岩清水がちよろ／＼と音をたてゝゐる。四合の米をといでゐるに耐へられない程の寒列である。この雪ふかい山中も打續く日照りの爲に水が涸れて、小屋の人達もこゝ迄來なくてはならず、風呂も沸かせぬ始末である。

黄昏が刻々に迫る。依然として雲は亂舞をつゞけて霧雨をふらし、皮肉にも青空を覗かせてゐる。三人は山蓬の露にぬれたまゝ、西の山空がそれはそれは紅に、天を焼く炎ではないかと思はれる迄になつた夕映の美しさに恍惚としてたつてゐた。一瞬にして蒼茫たる世界に變り樹々のけじめも模糊としてくる。君汲川流我拾薪とかいふ詩句がふと胸に浮んできた。

飯盒のできるのを待ちながら、丁度歸つてきた小屋の男に山の様子をたゞした處、頂上には泊れる

小屋がある。元は板葺だつたが昨年小赤澤で亞鉛屋根になつたとかいふ話だと云ふ。(翌日みたら戸もたゞぬ隙間だらけの小屋であり、亞鉛屋根になつたのは伊米^{イミ}神祠の方らしい、尤もこの外に小屋があるのかもしれないが。)自分だけ呑み込んだ話の仕方なので結局あの廣漠たる山頂に来ては、晴天でもない限り、何の役にもたゞない、なにしろ霧がまけば今迄自分の踏んできた道さへ失はうとするほど道らしいものが縦横に走り、同じ様な風物である。月しろがほのか。どうかと思つて外にでてみると冷い霧雨が音もなく降つてゐる。腹がふくれる、皆用なしなので頭の上へ足をのせたり、鼻の先を足指につけたり、指を變な風に動かしたりする競技(?)に腹を抱えて笑ひこける。曾原は覺えたての縁日の墓の油賣の假聲をやる。呑氣さ加減を盡くしてリュックサックを枕に雨外套をかけてそれでも九時には三人竝んでねむりについた。

二階へあがれと云はれたのを斷つた御蔭か、暖い爐邊には犬や雞までが集つてゐたのであつた。時々寒さに覺める。三時出發と昨夜は米の用意も整へておいたのだが、あやしい空模様で曉方まで起きやうともしない。天氣が駄目だとなると一向に張合がなく、七時出發とさめたところまだ十分あるかと、山らしい文句をつけて出發を見合せたりする。雨といふものは落ちてこないが雲の破れ目はない。山頂の大觀は全然絶望と知りつゝも空しく此處で一日を滞在することは氣分が許さぬばかりか、時間の制約がある。どうにかなる位に考へて――無理にさう思つて兎に角頂へと痛い肩に重い登山囊をかついでまた山毛櫨林を徐々にのぼる。

昨日にかはらね深林がつづく。森閑とした空氣がどんなにか都會の喧騒と腐敗とにいら／＼した神經を慰さめてくれたとか、黙々として左右の足を交互に動かしてゐる時は様々な想念が去來する。空想があつた。幻想を走せてみる。不平が顔をだす。望むべからざること、許されない事、不可能の

事とあとから／＼自分だけの思想が旋回する。都會の妖氣がこゝまで纏つてくるのは困つたことである。枝から枝へ張り渡された蜘蛛の糸に水滴がきら／＼と光る。もくもくと今にも動きさうに盛りあがつた尾根の闊葉樹の綠塊——それは今度の旅行で三人を終始悦ばしてくれた——も雲霧の爲にかくされて仕舞つた。小舎から澤を渡つてやがて道が二岐し、左をとつてまたしばらくすると左へ赤湯道が岐れる。地圖に山腹を縫つて中斷されてゐるあの林道につゞくものかと思はれる。昨日登つた雨乞の一團の下るのにあつたので昨夜の山の模様をさくと、途中に十丁もあるガレが出来てゐて登ることが出来ずに歸つてきたと云ふ。變なことをさくものかなと、意にも介さないでゐると、又一團に會ふ。雨で寒かつたと一語を残してどしどし下つて行つた。降る雨に雨乞の目的を達したと欣然としてゐたかどうか知らない。三俣の村で烈日に照らされたときはどんな顔をしたことであらう。苗場の山を包む雨雲にせめてもの望をかけたことであらうか。前の一隊と此の一隊と話が矛盾してゐるので迷ふ路もあるまいと思ふのに可笑しなことである。然し兩者とも正しいのだつた。下界は降れ。山は晴れよ。

濛々たる霧は凝つて覆いかぶさる葉末にたへかねて落つるほどの雨となつてしまつた。水晶蘭を折りとつてみたりして、ひたすらに鬱陶しい前進をつづける。面倒になつて地圖も見ず、漫談雜談の花も散つてしまつた。徑をのぼり詰めてやつと尾根へでやうとして黒木の木立がまじりだし、谷をへだて、山がみえた。それもどこと見當つける暇もなくまた元の天地に還へる。垣間みた麓は濃藍色に輝いてゐた。針葉樹がみえたら神樂ヶ峰も間近いのだ。しばらく急な登りをつづけると、一六八〇米の平坦地になる。針葉樹も矮少となり人工を加へたかのやうな草原に交つて、スッメノケヤリの花穂が點々と白く、若い軟かな葉を舒べたバイケイサウがもう實を結びはじめた水芭蕉と一緒に群落をなしてゐる。愈々苗場一流の筆法が始まつたのだ。三人は雨の不快をも忘れて喜んだ、道は陥ち込んで石

が重りあひ水が流れる。また草原にでる。雨と汗とにぬれて莫大小の襯衣はべつとりと肌にくつついて冷くも心持悪い。帽子の鍔に溜つた雨が流れおち、眼鏡は曇つて役にたかない。颱風でも日本海へ抜けるのか、東から横なぐりに吹きつける雨の冷たさ、頸がおのづと雨の方向へ傾いてくる。神樂ヶ峰の北方二千米突の隆起を越えるのであるう、道はすつかり尾根通しをゆき一雨晴れわたつたなら上越國境に蜿蜒たる連嶂を睥睨して、その壯觀に恍惚とするに充分の地點の様に思へる、が徒に雲霧の徂徠に任せては長嘆の外はない。神樂ヶ峰二〇三〇米突の三角點をいつのまにか過ぎたのであるう、下り氣味になつて右をからみだした。(後で思へば或はこの時に道を間違へたのかも判らぬ)風を避けたので少しく暖い。専念に前進を續ける丈で自分の曾中はたゞ頂上があるばかりだ。頂上と云はんより寧ろ小屋があるばかりだ。觀賞の餘裕等とはうになくやつてしまつた。どうにでもなれといふ氣持になりかけてきた。硫黄川の谷らしいのが右手に深く切れ込んでゐるだけで依然として何物も網膜に映じてこない。かうして尾根をからんでゐるうち、新しい焚火の跡を見付けた。昨日雨乞の連中の夜を明かした所らしいと話してゐると、果然この春の雪崩にでも出來たらしい可なり幅のあるガレにつき當つた。上が少しも固まつてゐないので、一步毎にざら／＼と崩れ落ちて頗る足場が悪い。頭をだした石などを頼りにしてどうやら横切つてほつとすると、また始末の悪いやつがでてくる。地圖に示されてゐるのらしいのが、幾つにも岐れて然かも下が見えない程長く、剩へ勾配がはげしい。向うをみると道らしいのがあいてゐるので籤を搔き分け、岳樺の幹をのり越え迂回してみるとまた一つ。その向うは大虎杖が繁り合つて道の行衛を失つてしまつた。一應さがさうと藤島はしきりと奮闘したがどうも駄目らしい。降りしきる雨は愈々冷く全身悉く濡れて指の感覚が失ひかけてきた。眼前僅かの區域のみみえて風を孕んだ雲は荒れ狂つてゐる。薙を挟んで三人が呼び交はす聲は如何にも沈痛を極めてゐる。「オイどうしやう。確かに此の澤の上が神樂ヶ峰らしく直覺されるがなあ。どう考へても道を

間違へたと思へないが」と藤島が云ふ。曾原が珍らしく磁石を出して「針が黒い方が南だなあ」と今にして思へば猛烈に醜體な質問を發する。「さうだらう」と力のない返事をするのは更に醜體である。敢へて誰も否と云はない。がどうも方角が可笑しい。今迄歩いてきた方向から推してこのガレの澤が南から北へ落ちてゐる筈がないのだ。自分の磁石に對する解釋の誤を棚にあげて、罪を磁針にきせ別のを出してみると、矢張り黒い針は同じ方にくると向き直るではないか。科學も何も超然として、直觀に従つて行動する事になつた。あまりの寒さに雨具をとり出して着けやうとした時、どうしたはづみかリニツクサツクが澤へ轉んで危くも全財産を奈落の底に落すところだつた。うまい鹽梅にとまつたのでそれを取りながら下を覗いたところ一枚岩の物凄いい澤になつて、その先は霧が蠢動してゐた。曾原も道臭いのがあつたといふので、左手の尾根へ上つてみやうと決る迄には、可なりの時が過ぎたのだ。藪を泳ぎ上へ上へとゆくと人の通つた様子。之に元氣を得て手を働かして岩角を登ること少時、「坦々」たる登路にでた。「道！ 道！」と先頭の者が叫んだのを聞いた瞬間は今迄の慘憺たる氣持に一道の光明がさした様だ。然しどう考へてもどこで道が岐れてゐたのか判らない。自分達の無理に迫つた道も所々道の跡はあつた。或はそれでいゝのかもしれないが、尾根につけられた道とどこで分れたのであらう、未だに釋然として來ない。雨風の爲に盲目的に歩いた結果であるかも知れないが。雨乞の連中が此處までやつてきて行詰つたのも無理ではない。自分達も昨日夕方こゝへきたとすれば随分と難儀したことであらう。「昨日東京電へ泊つてよかつたよ」

尾根へであれば吹きつける風にひよろ／＼とよろける。神樂ヶ峯はすぎてしまつた。僅かにしてあの苗場の頂上——二千米突のとてつもなく廣漠たる草原にでた。目ざした苗場の頂に今自分達はきたのだが渦巻く霧にいづれを頂上と定める術もない。剎那剎那に隱見する黒木の矮林と颯々と狂ひ叫ぶ嵐の音とが自分達三人をめぐる唯一の世界である。三角點をさがすこと等はかへりみもせず、道の誘ふ

まゝに小屋へと急ぐ、見渡す限りの草原には苗代のやうな池が無数だ。新雪のときまで残つて雲の影を涵すのもあらう、やがては涸るゝ運命のもあらう。この夥しい池の間を道らしいものが縫ふてゐる。南へ南へと。そして所々に何々大神と刻んだ碑が立つてゐた。正午はいつか過ぎて空腹を覺える。小舎はどうだらう。頂上とおもはれるものも見えやしない。高嶺の花はまだ早いのか、眼にとゞまらぬのか、御花畑の美観は之を恣まゝにすることを得なかつた。幻影の様に後から後からとかけり行く雲の中から右手の木立の傍にぼんやりと小舎がみえる。多分小赤澤のものだらう。一間半四方位の粗末な板小屋は戸もなくなり、隙間から吹込む風が寒い。泊るには相當入工を加へる必要がある。早速に焚火。風にかきまわされる煙にはほと／＼閉口して泣かされて仕舞つた。母の枯葉がバチバチと快い音をたて紅の炎をあげるのはたまらなく嬉しいものだ。着たものの乾いてゆくのもありがたい。時計は一時半。遅くも午迄にはと豫想してゐたのだつたが。湯が沸いた。紅茶がでさる。麵麴半斤。さて氣持だけはよくなつたが、この荒れではどうにもならぬので、長いこと望んでゐた苗場登山の思を今遂げたといふだけで、すべてを諦めて小赤澤へ下ることゝなつた。残念だが止むを得ない。時に二時十分。紅黄白紫が妍を競ふのをみないのも惜しいが、こゝから眺めた岩菅白砂乃至は仙倉から清水越の山々の容がどんなかと非常に心をひいてゐたのだが、すべてが霧の如く消えて只苗場のピークハンターとなつたに過ぎない。

小舎から五十間南すると小赤澤道は自ら判るときいてきたが、今はさう易々とみつかりさうもない。此の原の艸のないところは皆道のやうになつてゐるから、一寸脇道へ入つてまた元の道にでやうとするのさへ簡單には行かぬ事がある。見通しの利かぬときは注意を要する。池は連續する。回字形に岸も中心も深さに變りがく赤褐色の水草で覆はれてゐる。浅いが透明な水は雨を受けて小紋のあやを織つてゐる。植物を點檢するだけの餘裕がない。どこかで小赤澤道とクロスするだらうと思つてゐる。

ると、行手に大きな池が霧の間にみえる。近づくときそれは一面の雪田だった。また錯覺をやる。いつもながら雪上を歩くのはいいものだ。道が木立の中で消えて、右往左往した揚句、西へゆく道を得て少許、伊米神祠の前にでた。之だとなづいて針葉樹林を抜けると、またゆるやかな傾斜をした草原が廣々と展けて眼を悦ばせる。一文字に横斷すると、地圖に廿米突の圈の峯が金字塔形に仰がれて右左へ道が分れる。地圖をひろげる。右と判斷が下された。右は舊道で左は新道（地圖になし）らしく尾根通しに比較的樂に行かれるらしい事を後で知つた。

霧が切れて陽を受けた中津川のパレーが紺青にけむつてゐるのが瞰下される。何か山がみえてゐる。之でも道かと反問したくなる程のいやな道だ。急峻で藪がかぶさつてきてその上水が流れてゐる。兩手の厄介にならざるを得ない。谷を挟んだ尾根の針葉樹の黒いのが段々減るにつれて標高も低くなるのであらうが、下る道に一向變化がない。それでも随分歩いたと思ふ頃、暫らく澤から離れて樹林の中を行くと、狭いワタスゲの草原があつたので荷をゐろす。函の乾葡萄は雨にぬれ倍以上にふくれて却つて甘いのも面白い。顧ると山嶺の暗雲は到底晴れさうもなく、昨日の夜は山上にねて澄み冴えた満月を賞し、天上の圈に思をやる筈だったのに、やつと逃げ下るの餘儀なきに立至つたのは山のならひとはいへ、遺憾千萬といふ外はない。歩けばいつかは人里に近づくらしく、道が更に澤をはなれて尾根へあがる邊へきたとき、澤通しをとれば村へでると單純に考へたのがまた一つの不覺。思ひ設けぬ難儀に遭遇して後悔したのであつた。

澤は水量を増して巨岩磊々。右に飛び左へ移り崖をへづり、終には水中だろうが何だろうが一切おかまひなしになつたが、リュックサックが邪魔になる。谷は益深くなるばかり、人里らしい氣配は毫末もない。陽が傾くにつれて氣にかゝつてくる。兩岸迫つて五六十尺の瀑布になつたときは、水と諸共に岩面を下つた。疲れた足には谷歩るきは効率が悪く、曲りくねつた谷は依然として盡きさうもな

く、雨はまたしよぼ／＼と降りだした。すつかり閉口して六つの眼は無理矢理にも何處かに道を見出さうと努力したが岩魚釣の通ふ徑さへない。小さな瀑は次ぎ次ぎにあらはれてくる中に、陽は西に沈むらしく前途がはかられて聊か心細い。夜の帳に包まれてからの澤下りは危険なので、足元の見える間下つてどこかで泊るより方法はあるまい。然し濡れた身體で雨にふられ一夜を過すことを考へると、どうしても里にでたい。おそい足どりは一度の休みも許さない。向ふ岸の簑の少しすいた處を道ではないかと疑ひ、岩の上の石を道しるべかと心を躍らしてみたが、すべては空しく足下を流るゝ水の泡に等しい。「沈痛沈痛」とおくれた會原が聲を掛ける。蒼茫として愈々夜にならうとしてゐる。七時迄歩かうと元氣をつける。小赤澤あたりの山が高く遙かに仰がれるが谷は果つべしともみえない。

一縷の望がかなつて、やつと左岸の簑の中に徑をみいだして安心した、が足はもう大分重くなつてゐる。黄昏の林は暗く、笠にかくされた石や倒木に躓き時々悲鳴をあげる。所々に薪材を積み重ねたのを小舎かと誤る。笠がすい／＼と飛んでゐる。里は近いぞ。それでも半里位の距離はあつたらうか、長い思をして小赤澤の農家の赤い灯をみつけたときは雨は止んで暗い八時半だつた。蛙が長閑に鳴いてゐる。ある農家の戸をたゞいて宿屋をさいたところ、親切にも案内してくれる。しめ切つた秋山旅館の戸をあけさして豆でも出来たやうな肩胛骨から荷物をあろす。烈しい空腹。リニツクサツクの中味は殆どぬれてゐるのでとりだして火の上へ吊すのも憶効な位だ。特に沸かしてくれた湯に入つてやつと安易な氣分を回復する。明日はゆつくりすると慾も何もない。二階の部屋で困憊した身體を蒲團の上に横へたが、熟睡できるかどうか。

この六月初旬同じく苗場へ遊ばれた本暮理太郎氏の書信に「前略。赤湯から赤倉山を通りて苗場に登る立派な林道あることは知る人少なしと存候。小生も霧と雨とにて眺望皆無、絶頂のあたりより東南の沼の邊一面の大雪田にて頗る美景、八時に赤湯を出發午後一時頂上着、少し遊び荷持を歸し、午後

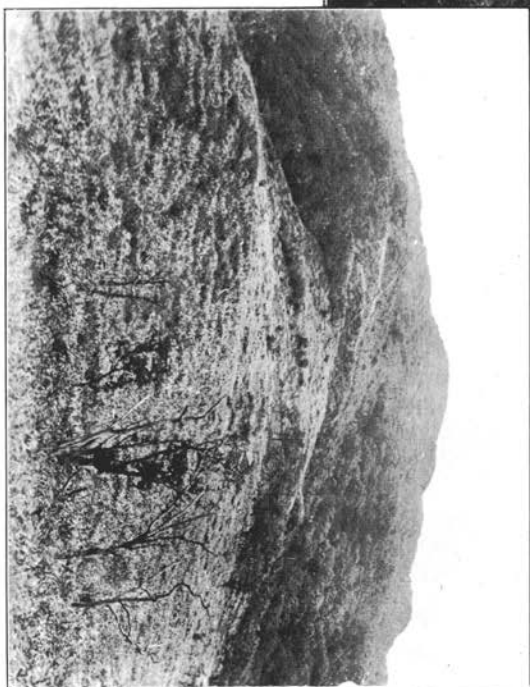


左 上

合頭山腹より涌露山を望む
深澤 五郎氏撮影

右 下

祖母山頂附近北西側の
アプローチ
竹内 亮氏撮影



二時小赤澤方面に下る、然るに北裏は一面の積雪にて三四尺より一丈餘、白檜の林立せる外は白皚々として何處が道やら藪張分らず、殊に霧にて前途不明、それかと思ふ邊を藝地に下ること一時間許、俄然として峭壁上に出で、如何ともする能はず、さりとてぐずぐずも出來ず、直に足跡を辿りて四時頂上にいで、七時赤湯に歸着致候。後略」傘をさして通れるといふ木暮さんのお話だから赤湯道が一番らしいが、そこ迄行くのに骨が折れる。三俣道が汽車の便はいゝが距離は一番長い様だ。從つて峻嶮の場所はない。小赤澤の新道も悪くないやうだから、發咄から雜魚川を下つて小赤澤に泊り、苗場へ登つて赤湯へでたら一番面白からうと思ふ。赤湯も一寸佳い所ださうで、五月末頃一面のウツの林？は仲々稀觀だといふ事である。(木暮氏の話)。

二、雜 魚 川

眼がさめても身體が痛い。街道筋にもあたつてゐないのにこの山奥の村に不似合な宿屋の厠から鳥甲山の尖峰が覗くみえる。布岩山の鍬には雪が三條入つてゐる。僅々千米突といふのに。

今日は一日ゆつくりと休養するといふのだがさうもならず、十時に出發しやうとしたら、丁度苗場の案内者が來合せたので鳥甲山の登路を訊ねる。徑とてはないが切明あたりから尾根を上るらしい。魚ノ川もなか／＼に難物で澤どほし溯つて野反へでるのは六ヶ敷いとか。今迄のやうに日照り續きの後は大雨がくるから鳥甲なんかに登らずにと宿の主婦さんは心配してくれたが、疲勞と暑熱とはさうした野望を斷念させて、今日はおとなしく雜魚川を溯つて發咄へでることにする。けさも苗場は雲がかゝつてゐる。中津川を屋敷へ渡る。魚ノ川が雜魚川をあつめて中津川となつたので立派な川だ。その清流に落ちる瀑布を寫さうとしてゐると、シャッターに故障ができて百五十分ノ一即四分ノ一となつて仕舞つた會原は切りと慨嘆してゐる。天竺牡丹の紅く咲いた人のけはいもない家を抜けると野反

池の水を落す爲か信越電力の工事用の軌道が切明迄敷設されてゐる。帽子の裏を清水でしめして被つてみるが效力忽ちに薄らぐ。昨日の強行に疲れ切つてゐる上、遠慮のない日光の直射は木蔭のない爲めに、少し位の風ではどうにもかなはない。上ノ原の家が對岸にみえる。巨鯨の様な苗場がその上へのしかゝつてゐる。中津川の溪谷は遙かに下の方に其片鱗をみせて燦として光つてゐる。緊張を缺いてゐるのか、疲勞のせいのか、香氣なのか、或は孰れもの合計の結果か又々矢筈を演じて軌道の上を隠道も何もかまはず歩いて行つて切明近く迄きたとき、工夫に聲をかけてみると。あの高い處を清水小屋へ行く道が通つてゐると云はれてがつかりしてしまふ。右の山の上―空線に近いところに道があるらしい。御苦勞にも迂回さへしてきたのだ。時計をみれば十二時はすぎでゐる。後戻りして、荒るゝに任せた飯場で飯とする。暑い。その上猛烈に蚤に攻められた。大分固くなつた麵麩半斤やつと喉を通る。紅茶が無性に甘い。地圖をだすとまだいくらもきてゐないのに、二時をまわつてゐるのにはあきれざるを得ない。結局今日は午前といふものが消失したのだ。豫定の發哺泊りは到底不可能なので、清水小屋迄と變更したがそれにしてもどうやら七時頃になりさうだ。夏は登山の期に非ずと言ひながら草いされに氣分をわるくして、小西の倉庫の廢屋を目當てに一直線に登るとそこを立派な林道が心持よく綠蔭をこしらへて通つてゐる。やつと正道を得られたわけで、中津川の河身などは見るべくもなく、なにしろ谷よりは百米突以上も高いのだ。相對する苗場の平な肩のスカイラインが廓然と浮きでゝ、大岩山の土耳古帽みたいの黒い頭の右手には佐武流とおぼしさが悠然としておさまるかへつてゐる。白砂山はみえないのだらうか。陽がかげつて鬱蒼と晝なほ暗い山毛櫸林の道は涼味豊かなものがある。剩へ歩くにも傾斜もゆるく平坦である。

雜魚川林道の美しさは之より始まる。夕暮どきにこゝを歩いて味つた山毛櫸林の静けさと美しさとは身を以て知る丈けである。凡百の形容詞をつくしても自分達が力強くうけた印象は説明することは

できないであらう。いかにも静寂である。いかにも優美である、然かも繊細の弊がない。四季の中最もコンデシヨンの悪い眞夏であつてさへさうだつたから、霜葉に彩られた十月であつたら、或は緑の様々な色をつくした新緑の候であつたら、恍惚として自我の存在をも忘れる事であらう。回想してみてもたゞ「いゝなあ」と云ふより仕様がなない。中津川が雑魚川となり道が西をさすに至つて、林は愈々幽寂を極め、人工の跡のまぎれ込んだことのないいかにも純一にして渾然と潤に充ちた姿となつた。耳をすますも水聲だに聞えない雑魚の深い深い露をへだてて、笠法師から烏帽子岳の明るい翠——之も驚くべき闊葉樹の密林が木立の切目からみられる。汗は流るゝに至らず、日を遮つて空氣は清涼である。慘として鳥もなかない。一莖の花もない。ひたすらなる静けさの中を上るともなく、下るともなく、坦道がつゞいてゐる。或る處は暗綠色にけむり、ある處は匂へるばかりに明るい。三人は幾度か歡びの聲をあげる。行けども行けども山毛櫨の美林は盡きやうとしない。見廻せば何處もその蘊々とした青白い幹だ。針葉樹の美が秩父にあるならば、雑魚川の林道は樹林の極致といつても敢へて過ぎたとは云へないであらう。たゞ恍然として清水小屋へ着いたのであつた。

烏甲の一支峰一九四四米の東南に岩の印がある、其處から南へ落ちる澤が二つ。東よりのを親ミズ、西寄りの大きいのを子ミズといふ。昔父が子の歸りのおそいのを心配してこゝ迄さがしにやつてくると、俄かに雪がなだれて死んで仕舞つたといふことに由來してゐるとか。澤の大小によつて名づけられたのでないか、子の運命がどうなつたか判然しない。見上げるやうな急峻な澤で流石に今でも残雪が道の脇迄やつてきてゐる。雪どけの氣が冷くたちまよつてゐる。滴々落つる水をコップにためて一氣にのみほすとあまり冷くて不安になる。烏甲をこの邊から登るのだとすると相當に厄介物である。外川小屋場（今は小屋はない由）へ分かれるらしい道がある。其西側の澤が鬼澤だ。又七山の眞平な長い山稜が一文字に空をかぎつてゐるのが望まれる。この林道で一番傾斜の強い所——丁度雑魚

川の岩壁が大きく北へ切れ込んでゐる——その頂上をテングヅカと呼ぶ。雜魚川は思つてゐたより遙かに深く、遙かに水量も豊かに、遙かに規模が雄大だ。秋のやうな雨がしとぼく降りだして、葉末の滴が冷い。少しおちれてゆくと、二人が「瀑、瀑」と騒いでゐる。すかさず様にして行手を見ると遙か上流に川全體が二段になつて横瀑をなして落下してゐる。はじめて四倍の双眼鏡がだされた。よくは判らないが第一段と第二段との間に釜の様なものがあるらしく、兎に角壯絶なものらしい。思ひ設けないこの收穫に喜んで、どこかに道があらうと前途を急ぐ。地圖をみれば成る程瀑の印はあるが、こんな素破らしいものとは思へない。日は可なり傾いたが林の中はほの暗い。しばらくすると左に道がある。瀑へ下るのであつた。瀑の上にてた。減水してゐるとはいへまだまだ水量は豊富、瀬波もたてずする／＼と岩の上を流れ來つてこゝに轟々と萬雷の如く落下し、そこに紺藍を湛へて釜をつくり、更に瀑をなして瀬をみせて第三瀑となつてゐる。三つを合せると随分の高さになる。川傳ひに第三瀑を木の根に縋つてのぞき込んだが空容を見ることができない。下にたつて仰いだら恐らく第一のはみえないだらうがその壯觀は匹儔なるものがある。日光の湯瀧遠く及はず。西澤の七ツ釜と比べてみたらと思ふ。それに四圍がいかにも幽邃だ。水と山とびつたりと合つて分裂してゐない。三嘆し四嘆し筋肉がブルブルとふるへる。明日都合をつけて引返へし寫眞を撮らうとまた前途をつゞける。清水小屋へ飛込みざまに名を尋ねたらオウゼンノ瀑又はマルゼンの瀑と教へられた。

此處からは小屋迄さう遠くはなかつた。密林はもう暗くなつて墓が足先を躍ぶ。一三八五米突の三角點のある西の澤を彦左衛門澤。更に澤を渡つて溝水川を迂回する。鰻でなでたやうに平に溢るゝばかりに漫々と流れてゐる。林をでると豁然として雜魚川の岸を山蓬を分けてゆく。平坦地である。亞鉛屋根が見える。忽ちにして夜。大きな倉庫を抜けると、數軒の家が並んでゐる。灯影が懐しい。七時半とおぼえてゐる。一夜の宿を乞ふと暫らく躊躇してゐたが、狭いがあがれといふ。信濃電氣(?)

の小屋で若い男が二人首をとつた赤むけの兎を焼いてゐる。爐の上に縄をわたして濡物の處理をやること昨日に同じ。いつか山の端に月がかゝつた。飯盒を洗ひに外にでみると山中の夜はいかにも清澄爽快だ。凝つと立つてゐると山の氣が肌へしみ込み全身の細胞が收縮するやうな氣がする。螢が飛ぶ。森寂は谿聲によつて深かめられてゐる。さつき岩清水にひたして置いたチーズが氷のやうになつたのをたべる。その美味激賞すべし。壘の上に蒲團を布いてゐると窓にさし込む月光が惜しまれたが、更けゆく夜はしん／＼と冷くなつたので障子をたてる。萬感胸に湧いたが晝の疲れの爲めそのまゝになつてしまふ。澤の名はこの小屋できいたのだが、必ずしも確かだとは云へないだらう。教へてくれた者が山の人間ではないから。

眼がさめると棚の上の乾葡萄の空箱(?) が眼についた。昨日で葡萄も盡きて甘いものは角砂糖だけしかない。谿を埋むる青葉の上に朝の光がさして大氣は水のやうに冴えてゐるが、きのふの日暮方ほど心をひかれる風物ではない。ぬれては乾かしぬれては乾かしたので着る物は皆煤のにほひがしてよくない。矢張疲れてゐる。發哺の湯が無性に戀ひしくて瀑まで引返へす氣持になれない。昨夜大體道もさいて置いたので發哺迄行程四里として午後には着く豫定で七時に立つた。

家のすぐ前で右岸に渡る。あれほど深かつた雜魚川の谷もすつかり淺露になつて、今迄に比べて凡山凡水の風を示してゐる。峯が退いて早くから日が谷にさし込む。カヤノ平の平べたい頭が青々としてゐる。中ノ澤、長澤、細澤と又七山の裾を徑に従つて徐々に上る。陽を沿びると暑い。薪材や炭焼等の小屋がある。瀧ノ澤(地圖に雜魚川の川の字のある一つおいて南の澤。川の字の處へ西から入つてゐるのは源助澤——或は餓鬼澤か)へきて今迄明かにふまれた道が川で消えてしまふ。小屋があるが人はゐない。東へ上る道を少し行つてみると又七山へつゞくものらしく材木が積み重ねられてあ

る。河原の石を傳ひながら道をさがしてゐると人夫が三人やつてきたので、訊ねたが何もしらない。笹の間を上ると炭焼が俵の目方を計つてゐる。前後矛盾した返事なので大いに困つたが教へられるまゝに、根曲竹の中をしばらく行く。川から大分離れてゐるらしく一寸とした森林だ。小舎の家根に暑さうに日が反射してゐるのがみえる。道をきいたら、道を問ふのに禮儀を知らぬ奴だと叱られる。磁石と參謀本部の地圖さへあれば發咄へ行れるとの返事。成る程紙上に臥遊すればそれでよいのだが。道はまた川へでた。察するにこゝらがカツギダシ（熟平小屋の對岸に道があるがその南の澤）らしい。この附近で左岸へ徒渉する筈なのだが一寸見當がつかぬ。三人はらく／＼になつて道をさがす。小屋の男が飛んできて大きな磁石をとりだしてあやしげな事を云ふ。曾原は彼は狂人に近いと断定する。丁度岩魚釣がやつてきたのでやつと判つた。大澤（夜間瀬村の瀬の字のところの川）の上だ。瀧ノ澤から直接に川原を傳つてきてもいいが左岸へ上る場所は見付けにくい。尤も左岸に渡つてしまつてさがせばさうでもあるまいが。一四三九米の獨立標高點の處で左の道をとると對岸の鯨城澤にでる。地圖通りに澤から峽越の様なのにでると鱒魚川は最後迄みることは出来ない。燒額山の廣い裾を一上一下、秋草に彩られて蠟蛇目蝶が飛ぶ高原も日中は汗がにじむ。眞黒な岩雪連嶺を指呼の裡に二ヶ月ぶりで見ると大きくがつしりと腰を据えてゐる。草原が次第に喬木を交へてくる。この附近の森林の具合も矢張り佳い。白樺のすらツとした幹が見え、根曲竹が道を挟み、笹小屋にでるまでは長い思ひがする。地圖の道を歩いてゐるのかどうか判然としない。光り輝く入道雲を背にした坊平山を懷しみながら、高天原を發咄天狗湯へと下る。二人はおくれてゐるらしい。湯では何時もながら雞が縁側にあがつて遊んでゐる。飲みたくて耐まらなかつたサイダーを一氣に傾けた時は、素敵といふも愚かなりけりとても書かうか。午後零時をすぎる卅分。

新館へとほされて浴槽へ。肌にふるゝ温泉に何も彼も忘れて爽かな氣持になる。岩管行も斷念して

流石の會原も軟化する。山よりも湯がいゝ事になるのではないか。山の湯に悠遊する事はありがたなことだ。岩魚の煮汁が膳にのぼる。旅も終つたか、窓によつて遠い山々をみてゐる氣持はたまらない。度を越さない瘦れも手傳つていかにもいゝ。小豆を煮て貰つて急に漫談がはづむ。まだ客も稀な山の湯は靜かに夕暮に向ふ。

三、大 沼 池

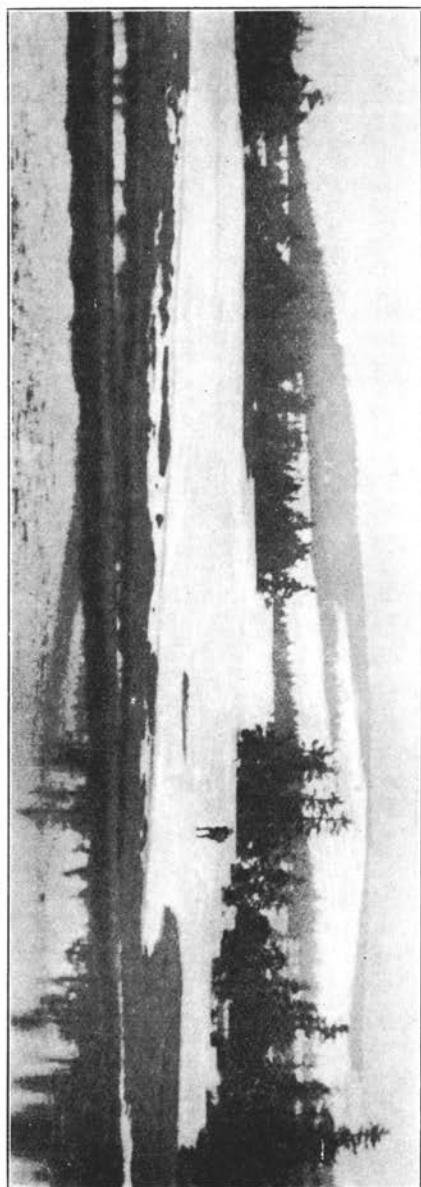
雨戸をさゝない部屋には夜明が早くやつてくる。薔薇色にわけゆく曉の空に雪膚斑々たる日本アルプスの連嶂の莊嚴な殿堂を見ることが出来る。いつみても素晴らしい展望である。窓によつた三人の手を双眼鏡が轉々とするうちに槍の穂が蒼空を突き破り、穂高岳の一部が黒く浮んでくる。湯槽の中で笠ヶ岳行が一決し、殆ど中空のリュックサックを容負つてみるといまさらのやうに軽い。赤埴路を下つて横湯川を渡ると右手の叢に岩菅大神と刻んだ小さな石の祠がある。其の前を左に簾を一直線に目茶苦茶に掻きわけて上ると、葉末の露に小倉の服はすっかり濡れてしまい、蜘蛛の巣がいやといふほど顔に粘りつく。どうやら堰道へでてほつとひと息ついてから、もう一度草の斜面を這ひあがり、汗を流すとだら／＼と白樺の矮林を抜けて遺池の縁に坐る。蒲酒としたあかるい池である。さら／＼と光るのは漣である。そのひとつひとつの反射が岸へよつてくる。空の青さを涵して寶玉のやうな水面にこれはまた濃綠色に光澤のある河骨の葉が光琳模様を置いて、處々にその黄色な圓い花が咲いてゐる。池の向う岸は段々に草原が隆起してその背後に坊平山が空をかぎつてゐるのをみては寫眞器を持つた者はその鞆の蓋をあけるのは無理もない。いゝ加減に見當をつけて雄齒衆のなか夏艸の茂りをわけて長池(?)とか、三角池(?)とかいふのらしいさゝやかな池沼を見ながら平床原の上へでる。これからその原へ下りやうとする小高い草山の岩の上で眞向ひに突兀とした笠ヶ岳の黒い姿がや

、左へ頭を傾けて聳えてゐるのが見られる。悠悠として白雲が徂來すれば峰頭が出たり入つたりする。驟雨沛然の氣配が横手山のあたりに動いてゐる。草津街道には平床原の白い標木が立つてゐた。野火に焦げた木立に一寸いやな氣持になりながら荷車をひいてきた男に硯川の茶屋の様子を訊ねるともう焼けて（或は焼いて）ない、何でも草津峠で人殺しのあつたとさだといふ。失望。

熊の湯は新館がまだ新しい色をしてゐる。ひっそり閑としてお婆さんの客がたつたひとり。ここで晝にする。自分達が持つてきた飯盒で飯を焚いて貰ひ、茄子のシギ焼を三人前注文して七十五錢たつた。有平糖みたいな菓子が菓子入から大分へつてゐた。雲からでた太陽はまばゆい光を庭先になげてゐる。その庭の一隅に湯がある。湯槽の表面には湯の花が鉛色に張り詰めて誰の惡戯かクマノエと書いてある。水上の文字も面白い。その湯花が破れてひらひらと沈みながら溶けると紺色の透明な湯はひたした身體の爪先を美しく見せてくれる。温泉の誘惑に笠ヶ岳登りもそろそろと面倒臭くなつてくる。登つてもこれでは眺望がないからと藤島と二人は理由をこしらへて墮落して仕舞ふ。曾原はどうしても山頂から山を見度いと、勇敢にも横手山へでかけることにしてひと足さきに出發した。

しばらくしてから吞氣さうに二人は幕岩の脇を歩いてゐた。その足下で溪水の音だけがなつてゐる。街道から右へそれてもう花のなくなつたアヤメをがさがさとかきわけて、さて琵琶池へとでる。水が減つて汚らしく緒い岩がでてゐる。その湖縁を傳つて發哺道へ。今日も蒼空にわき返つて白い雲の群が奇麗にひかり輝いてゐる。いかにも夏のさかりらしく。

汗を湯でながして心神頓に爽涼、また新しい氣分の主人となつて緑の山とそのスカイラインとを眺めながら、羊羹をたべる。沛然たる夕立が前の山をけむらして西發哺の山に日がさしてゐる。灯がともされて温泉宿らしい黄昏どき食事をのばして貰つたが曾原はかへつてこない。とうとう先に食べしまつたが心配する事はないからと、友達に宛てて葉書を數枚かいてゐると、濡鼠になつた曾原が元



影堀氏邸太理幕木

(右)峰々築神と(左)山場苗るた見りゝ山國三 下 上 頂 山 場 苗 上

氣よく縁側にリニツクサツクを投げ出した。

「オイどうだつた?」「峠でないうちにね、横手の頂上へかけあがつたら猛烈に這松にいちめられて頂上ぢやざあゝの夕立。仕方がないので偃松の下へもぐつた。白砂、仙ノ倉の方がよくみえて嬉しかつたが、いゝなあ、松川谷の瞰下も仲々よろしい。少しく疲れたよ」と目的到達の歡びに晴晴として前の湯殿へ消えてゆく。窓の外は星空。

今朝からはいよいよ二十日になつて、三人の旅もけふ限りとなつた。三人が別れるその日となつて、私の夏の山旅が終を告げる日である。昨日のやうにアルプスの一列が曉の空に象眼細工をしてゐる。茜雲の色があせる頃、二晩私達を悦ばしてくれたこの山懷の靈泉の名残を惜しみつつゆつくりと浴みする。この湯に入るためわざゝ苗場の雨に苦しみ難魚川を溯つてきたのではないかとさへ思はれる。

曾原は早く岩菅山へと草鞋をはいた。藤島は松本へ歸へればいいのでゆつくりする。私は大沼池をみてから河東線經由バラツクの帝都へ舞ひ戻るのである。

二人して朝飯を終へると「ぢや失敬」と藤島を残して、七時半に横湯川を渡ること昨日の如く、また岩菅大神の祠の前で笹にすつかりかくれてしまつた徑を探しあてゝ、堰へとのおぼろと草露に腰から下はしとゞと濡れたが藪の中を兎のやうにもぐる事はなかつた。堰道の叢には薄紫の山虎ノ尾が咲きつゞき、蜜を吸ふのに餘念なかつた豹紋蝶が蠅のやうに舞ひたつがすぐまた元の所へかへつて人を恐れぬ。赤い百合も交つてゐる。西館山が高く見えれば、天狗湯の建物も高い木立の中に見える。

所々水の溜つた堰を傳つて行くと、やがて急傾斜な暗い陰慘な澤に突當る。あたりの空氣が氷のやうに冷えてゐる。豊かな水が一二丈位の瀧をなして五つ六つ層をつくつて落ちてゐる。一寸稀觀であ

る。考へる迄もなく之が昨日發哺へかへる道すがら東館山の山腹に仰いだ白ケ淵である。引返へしてもう一つ上の堰へでて東へ。此の堰も涸れてゐる。横湯川の谷が深く陥込んでゐるのを覗きながらこゝも同じやうに山虎ノ尾の花を押しわけ蝶々を驚かす。

道が右手へ深く曲るとそこへ澤があらはれ、堰を離れて徑の導く儘に登る。日光にむされた草いきれが耐へがたく、洋服もすつかり乾いた。急な坂をひと登りすると、闊葉樹林になり、水の流などあり、莎草の類の水艸が茂つてゐた。次第に針葉樹の木立と變り、傾斜が緩かに倒木と石が多くなる。すべてのものに藓がまとい着いて濕っぽく、幽邃を通り越して妙に陰鬱で淋しい。黒木の幹の色も不吉を象徴してゐるやうだ。何處をどう歩いてゐるのか薩張り判然しないが、ひとつの與へられた道に盲従して冷冽な森林の中を奥へ奥へと吸ひこまれて行く。二度ばかり何處ともなく澤の音が淙々と聞えて來たので大沼池かと思つたが、それもいつのまにか聞えなくなつた。暗い木下道がしんと静もりかへつてゐる。立木の皮をはいで大沼池道と書いてあるから迷つてゐない事だけは確かである。樗鳥めがいやな叫びをやると、薄氣味悪い木魂を返へして愈々静けさが鉛のやうにかぶさつてくる。この密林からは勿論何の眺望もなく、白と黒とで立體派の繪のやうに彩られた幹が矗々として前後左右の空間を埋め、頭上はこの世の光明を洩らさじと青黒い葉がかぶさり合つて流石の眞夏の蒼空もみられない。右に曲り左へ折れ上つたり下つたり、兎に角前進を續けるが何だか不安で仕方ない。今迄三人だつた旅がひとりになつた勢であらう。大きな岩間を氷が埋めてゐる所も一二箇所ある。長い思をして軟かな落葉の上を踏んでくると、根曲竹が刈られた坂にでる。と大沼池の水光がびかりと眼を射る。嬉しかつた。一時に心胸がひらくやうだ。十時である。丹礬のやうな水をたたへて千古斧鉞の音をきかないこの山奥に、空の雲と山の木々と言葉を交へてゐる湖水の姿はまた格別である。横湯川への落口に大きな閘門が設けられて枯木が赤土にまみれてかゝつてゐる。こゝもいたく減水して湖汀の岩や

土が鐵錆色に染まつて草鞋の跡が深くつく。平常ならば枝さし交はした雑木のために湖周を歩くことは六ヶ敷いのであらうが、易々と志賀山と赤石山とを左右に仰望し得られる地點へきて休む。大沼池の美しさは此邊で始めてうなづかれるのである。微かに硫黄の香が漂ふ。温泉でも流れ込むのである。赤石山の澤が押し出した土で出来た段丘（ぶく／＼に軟かなので増水の場合には湖底となるのである）の外、湖水をめぐつて急傾斜な山が迫つてゐる。赤石山は一頂上の岩秀の尖つた具合などなか／＼の尤物である。黄色い土が粘りつくので坐れない。持つてきた鹽煎餅をたべながらドーム形をして森林の衣をまとふた志賀山を湖越しにみてゐると雲が動きだした。湖上に目を落すと白雲に包まれたその姿が漣のまに／＼八重折に折れる。周囲のたゞずまゐが直覺的に日光の湖水といった感じを起させる。發哺に遊んだ者は是非この明鏡に自分の姿をうつすべきである。本當にいゝ湖である。倒木に腰を下ろしてたつた一人、鉢ノ山の末の青い山肌と空を流るゝ白雲と段丘の上の枯木の影とを見るともなしにぼんやり眺めてゐると、いゝ氣持だが寂寥を覺えてくる。曾原は岩菅の頂上で越後界の連山に嬉しくなつてゐるであらう、藤島はもう瀝に着いたかしらと思ひだしたりする。十一時になつたら歸へることにさめる。丁度一時間休むわけだ。

地圖をひろげると大沼池は西洋梨の形をしてゐるが、私の眼には瓢箪形にうつた。ひとところできなり大きいくびれが出来てゐる。翌日曾原も歸へりがけに立寄つて湖を一匝したさうだが、その時私の草鞋の跡が赤い土砂の上に狼藉としてゐるのを認めて懷しくなつたといふ。またその時である。多勢の人夫がやつてきて湖をどうかするとこゝに人工を加へやうとしてゐるとか。

愈々十一時になつて、この神秘的な山湖に別を告げて再びあの暗い深林の道を歩いたが案外早く堰まで戻つた。道は自然と蓮池へ通じ、草を踏んで隆起を上下すると左手に池があらはれ右手に一池が見える。其處で草津街道の暑い白路を辿ることになるのだ。長野盆地にわきあがつた大きな積亂雲は瑪

瑠色に輝きわたり、近來にない美事さであつた。荷を下ろして眺める事暫時。かへりみると志賀山を呑んだ夕立雲が墨を流して雷鳴をしきりにやつてゐる。その餘波か、はら／＼と日照雨がやつてくる。岩菅で降られてゐる曾原も随分雨と仲がいい。

やがて沓打茶屋。餅。馬をすゝめられたが勿論乗らない。波坂を裸に近い風態をして下つて行くと、今朝早く發哺をたつた女が赤い顔をして汗まみれになつて上つてくるのに遭ふ。女は氣の毒だなどふと考へられた。妙高黒姫などの山々が高さをますともうおしまひである。浴衣摺の男女が通る。澁で自動車を待つ間に外湯にはいると日に焼けた兩腕と智とが馬鹿にしみる。屋根の隙間から覗く青空が眞夏らしくひかり輝き、湯の落つる音がこの數日の山旅を泌々と回想さしてくれた。山の旅は旅を終へて追憶の世界に入つたときの方が嬉しいとおもふやうになつて來た。僅かに二三日前に登つた苗場も雜魚川も何かなつかしい遠い過去の思ひ出のやうな氣がしてならない。(一九二四・八・二八)

レニア山 (Mount Rainier) に登る

國府 精 一

は し が ゐ

一九二〇年九月二日米國華州レニア山 (Mt. Rainier) に登る。同山は米國第二の高峯にて、標高壹萬四千四百八呎の休火山なり。其氷河の多數なると、森林の見事なると、高山植物の美しさと、手輕く到達し得ると (シアトル (Seattle) より三日あらば頂上を窺め得べく、氷河見物のみならば二日間

にて充分、急がば日歸にても可。等は、確かに會員諸君に紹介するの値ありと信じ、又同方面を通過せらるる機會ある人々には、是非一遊あらんことを勧め度く、此卑文を草す。

一

所在 レニア山は米國華州の西南隅レニア (Rainier) 國立公園の核心として聳ゆ。シアトルの南直徑五十七哩、タコマ (Tacoma) より四十二哩。其南中腹パラダイスイ (Paradise inn) 迄自働車を驅れば、タコマより四時間半。シアトルより五時間半にて達す。汽車の便もあれども、途中より自働車に依らざるべからず、寧ろシアトル (午前七時發) 又はタコマ (午前八時發) より乗合自働車によるを便とす。

二

山名起源 一七九二年英國軍艦長バンクーバー (Vancouver) 氏始めて此地方を探險し、其英領たるべきを宣言す。其際此靈峯に接し、其提督ピーターレニア (Peter Rainier) の名を以て此山に冠したり。其後此地方はオレゴン (Oregon) 州として米領に編入せらるるとなりしも。山名は其儘襲用せられ、一八八九年華府地理局は正式に此山名を認めたり。印度人は偉大なる靈峯を意味してタコマ、タホマ又はタホブと呼び、神聖人間の冒瀆を許さざるものとせり。されば一部の人々は此山はタコマ山 (Mount Tacoma) と稱すべしとなし、賛否の論争絶ゆる時なく、數年前も其山名改正の議案下院に提出せられしが、反對説勝を制し、依然レニア山と呼ぶこととなれり。蓋しタコマ市民は其市宣傳の方便として、山名の改正を主張し、其競争市たるシアトル市民は、常に之に反對する次第なり。在留日本人はタコマ富士と稱す。

二二

一般記述

當山は米國太平洋沿岸北部に連互せるカスケード (Cascade) 火山脈中の盟主にして、ホイットニー山 (Whitney 加州にあり、高一四、五〇二呎) に次ぎ、合衆國第二の高山なり。同火山脈は花崗岩を劈き聳立するものにして、其主峯は北より擧ぐればペーカー山 (Parker 一〇、七〇三呎) ニア山 (一四、四〇八呎) アダムス山 (Adams 一二、三〇七呎) セント・ヘレン山 (St. Helen 九、六九七呎、左程高しと云ひ得ざるも、見事なる圓錐形なり。以上は華州) フッド山 (Hood 一、一五三呎、山頭天を衝き、偉大なる槍形をなし、最も壯觀。) ゼファアソン山 (Jefferson 一〇、五二二呎、以上オレゴン州) シヤスタ山 (Shasta 一四、三八〇呎) ラッセン山 (Lassen 一〇、四三七呎、合衆國唯一の活火山。以上加州) にして、皆獨聳せる圓錐形の大火山なるが、各五十哩乃至百五十哩を距てつつ黒ずみたる原始林の上に白雪燦然たる姿を碧空に劃立せる大觀は、蓋し西北地方の特異なる景觀と稱す可し。當山の高さは一四、五二九呎。一四、四四四呎。一四、三六三呎等種々の測定ありしも、最近に一四、四〇八呎と確定せらる。然し氷河によりて削られたるラバ岩壁面の層線傾斜によりて測量すれば、舊山頂は更に二千呎の高所にありしと想るはれば、實に壹萬六千呎を算し、米國第一の高嶺にして當時の山容は秀麗正に我富士山に髣髴たるものありしならん。されど其頂は或時の噴火に吹き飛され (印度人の口碑に此噴火を物語るものと云ふ)、現今の龐大なる火口を形成したるものの如く、其火口壁の西南端は南峯 (South peak) 又は成功峯 (Success peak) と稱し、其西北端は北峯 (North peak) 又は自由帽峯 (Liberty cap) と云ふ。兩峯相去る約三哩、而して其火口丘として新に起りたるものは、即ち火口峯 (Crater peak) にして南北二峯より東二哩を距つ、是れ最高頂なり。されば當山は山頂稍廣き高原を形成し、其上に三突起あり、見所によりて三峯頂に畫かれたる富士其儘の形態なり。

火口峯は更に二火口の連絡より成り、併せて周圍一哩許、其一口の北端に今猶蒸氣を噴き、火山の俤を残せり。其二火口の連結點に一小雪峯を起す、之をコロンビヤ、クレスト (Columbia Crest) と稱す、一四、四〇八呎の標高は即ち此所なり。専門家の研究によれば此クレストは全く氷雪の大塊にして西方の氷谷 (南北兩峯の間) より吹き上ぐる渦卷風の爲めに作られたる氷雪に外ならざる由なり。シヤスタ山は此氷雪峯の高さ丈け此山より低しと傳へらる。

此山の頂は稍複雑なるが爲め、山に向つての眺は所によりて異なり、富士山の如く八面玲瓏と云ふ譯には參らず。其内シアトル方面よりの眺最も美事なり、殊にプゼット、サウンド (Pusset Sound) 入江又はワシントン湖 (Lake Washington) を超えての眺望一層佳なり、一萬四千餘呎正味の高さを仰ぎ味ふ次第にて、ノースピークの左手にコロンビヤ、クレストを明かに望み得べく、雄大にして整正なる雪のドームが長き白き裾を引きつゝ、水と森との彼方に朝暾夕陽に輝く姿は、實に壯觀無比と云ふの外なく、誠にシアトル市民の誇とする所なり。南に進むに従ひコロンビヤ、クレストは隠れ、ノース、ピークの尖端のみ顯著となり、タコマ以南より望めば頂上の三突起現はれ、山形大に變ず。西南より見る時はサウス、ピーク聳えて巍然たる圓錐形を示す。正南より望めばサウス、ピークの右手に火口峯を仰ぎ、山姿は寧ろ優雅なり、當山の寫眞は多くは此方面よりのものなり。東南乃至東より見る火口峯を中心としたる姿は、蓋し最も雄峻なるものならん。但し此方面は交通便ならず、之を見るもの稀なり。更に北東に進めばノース、ピークと火口峯との二峯大浪の如く高まり、山形は南北に長し。

四

氷 河 當山には命名されたる氷河實に二十八流あり、其外名のなきものは擧げて數ふべからず。

氷河の蔽ふ全面積四十八方哩、單一の峯にしてかく多くの氷河を懸くるもの他に其比なし、此山の別稱として『氷の章魚』と呼ばれる、も亦宜なりとす。天上より瞰下すれば正に二十八脚を有する氷章魚に見ゆる筈なり。蓋し北太平洋の濕風此巨峯に打當り、降雪量殊に夥しく諸溪の積雪十二呎乃至三十呎に達す。これが緯度と高さとの關係によりて萬年雪となり、ネベとなり、氷となりて流れ降り、壹萬呎前後の所にて偉大なるカールを穿ち、愈完全なる氷河を形成し、恐しきクレバスに裂かれ、又美しき氷波を起して、靜かに八方に降り行くなり。カールの大なるものはウィリス (Willis) 壁(直下三千五百呎、時々氷瀑落下し、悽壯を極むる由。)の下にあるものにして、半圓の長さ三哩に達す。又サンセット (Sunset) 圓戯場と稱せらるるものは一層美事なり。其他大小のカールは枚舉の暇なし。氷河中著名なるものはニスクオリイ (Nisqually)。カウリッツ (Cowitz) イングラハム (Ingraham) エモンス (Emmons)。ウインスラップ (Winthrop)。カーボン (Carbon)。南北モーウィッチ (Mowich) 南北タホマ (Tahoma) 等にして、幅二哩長さ五哩に達するものあり。深さは五十呎乃至五百呎。諸氷河中ニスクオリイ最も知らる。蓋し南腹に流れ、バラダイスインに近く、最も多くの人の探險する所なるを以てなり、タコマより四時間にて達し得。氷河の研究も多く此氷河に於て行はる。(一九〇五年の實査により、此氷河中流の流程は、盛夏一日拾六時二分なるを確定せられたり。)

五

森林 レニア國立公園の廣さは三二四方哩、猶園外數十哩に亙りて斧鉞入らざるの處女林密生す。専門家は當公園の植物帶を五帶に分つ。第一帶は海拔二千八百呎まで、第二帶は更に四千呎迄、第三帶は四千呎以上五千五百呎迄、第四帶は五千五百呎以上七千呎迄、第五帶は七千呎以上の所なり。而して樹木の生存するは第四帶迄にして、森林と云ふべきは第一帶及び第二帶なりとす。第一帶の至

要木は樅、梅、杉の類なり。就中樅の一種ドーグラスと稱せらるるもの最も多く、中には高貳百七十呎直徑八呎樹皮厚壹呎に達するあり、亭々直立する狀は實に一種の壯嚴味を有す。次で多きは梅の種類なり、白杉亦尠からず。ドーグラスに次ぐ貴重樹なりとす。(此等は盛んに日本に輸入せらる)。第二帯の主要樹は銀樅、高貴樅(ノーブル、フアー)アルプス梅、蝦夷松等なり。第一帯第二帯の巨木の枝には丈なすサルオガセ長く垂れ、水蒸氣充分なる密林の相を示す、森林の美は此兩帯にて遺憾なく味ふを得べし、猶ほ楓、ハンノ木、柳等兩帯に散見するも顯著ならず。第三帯、第四帯に入れば、アルプス樅、アルプス樺、アラスカ杉、白皮松等主要樹となる。其木の高さと密度とに於て大に前兩帯に劣る、但し此兩帯にありては、雪融を待つて咲き出る高山植物最も夥しく、氷河と雪峯と併せ見る壯麗の景觀は登山客の最も喜ぶ所にして、所謂 *Peak* の散在するは此部面なり。

六

高山植物(灌木を含む) 高山植物の多種潤澤なると、其發育の旺盛なると、其色彩の絢爛を極むること等に於て、當山は天下無比と稱せらる。所謂パークに一步足を入るれば、奇草珍花は腰を沒し、膝を埋め、到底摘み盡すべくもなし。或博物學者は其美事なるに驚嘆し、唯 *Wonderful* を連呼し、其研究に晝飯をも忘れたりとの一挿話あり。又加州の著名なる山嶽學者、ジョン・ミューア(*John Muir*)氏は次の如く此山を推稱せり。

森の上手に最も愛すべき花の一帶あり、周回五十哩幅約二哩なり。其數の饒多なると密生せる様とは、自然が森と氷との間にある貴重なる空地を最も經濟的に利用せんとし、又一の山の花環の中に其愛物(花)の如何に多くを一緒に置かんと試みたるが如し。雛菊、一華草、小田卷草、飛燕草、雪崩百合等擧げて數へ難し。此等の間を跋涉すれば、我膝を沒し我腰を埋め、千萬の花冠

は花瓣と花瓣と相接して輝きつゝあり、げに此山こそは我が知る限り最も豊富なる Subalpine の花園にして、申分なき花の極樂淨土なり。

今左に前記植物各帶につき參考の爲顯著なる高山植物數種を掲ぐ、但適譯を得難きを恐れ、英語又は學名を加ふ。(以下開花の季節を示さざるものは七、八月開くものと解さるべく呎、吋は草又は木の全長)

第一帶 (二、八〇〇呎迄)

1、Indian pipe 又は Ghost plant (*Monotropa uniflora*) 全體白色の寄生植物、花白、五吋—一呎、鹿蹄草科、日本のユウレイタケより更に美しく悽し、此種猶二三種あり。

2、Canada dogwood (*Cornus canadensis*) 花緑白、三一八吋、六月より十一月迄、白色四苞の中央に花あり、果實亦美、ゴゼンタチバナ屬なり。

3、Alpine beauty (*Colintonia uniflora*) 花白、六瓣、二—四吋、葉は長圓縦筋あり、根生の三葉あり、鈴蘭屬なり。

4、Forest Anemone (*Anemone deltoidea*) 花白、六—十四吋、葉は長菱鋸形三葉複式、イチゲ屬なり。

5、Western Anemone (*Anemone occidentalis*) 花赤筋ある青、葉は羽狀、八—十八吋、果實は毛帽狀、第四帶迄發育す、レニア山植物中、顯著なるもの。

6、Oregon Wood Sorrel (*Oxalis oregana*) 白又は淡紅白の花、葉はクロバ様三複葉、スイバ屬。

7、Bishops cup. 小、白花、葉に短毛あり、三複葉、ユキノシタ屬。

第二帶 (二、八〇〇—四、〇〇〇呎)

- 1、白石楠花 (*Rhododendron albiflorum*) 白又綠白花、四五呎、幹枝直立せり。
- 2、Twin flower (*Linnaea americana*) 淡紅花、蔓草、莖端二個鈴狀の花咲く、香高し、エゾアリドウシ屬。

3、Squaw grass (*Xerophyllum tenax*) 花は淡黃白、圓錐總狀をなす。葉は細長、三四呎、Squaw は印度人の妻の意、土人其纖維を以て籠を編む。山百合、麋草、熊草の名あり、香高し、當山にて顯著なる花の一なり。

- 4、Common Lousewort. (*Pedicularis racemosa*) 淡紅白花、鋸齒餘形葉、七八吋、シホガマ屬。
- 5、Pedicularis Contorta 淡黃花、豆花の如き花序をなす、七八吋。

其外 Mountain Ash (ナナカマド) *Gaultheria ovatifolia* Sweet after-death (*Achlys triphylla*) Bird's foot bramble (*Rubus petatus*) (キイチボ) *Pyrolas* (イチヤクソウ) あり。

第三帶 (四〇〇〇—五、五〇〇呎迄)

- 1、Red heather (*Phyllodoce empetrifolia*) 赤花、十一十八吋、ツガザクラ屬。
- 2、Yellow heather (*Phyllodoce glanduliflora*) 黃花、六—十吋、同上。
- 3、White heather (*Cassiope mertensiana*) 白花、六—十吋、デムカデ屬。
- 4、Shooting star (*Dodecatheon jeffreyi*) 淡紅花、六—十吋、倒披針形葉。
- 5、Purple Aster (*Eucephalus ledophyllus*) 淡紅紫色花、一二呎、紫菀屬。
- 6、Deer tongue (*Erythronium montanum*) 白又黃花、七—十五吋、鉾形双葉、殘雪を貫き咲き出づ、足の踏み所なき迄密生す、雪崩百合、蜆舌、犬齒蕪菜等の別名あり、最も美觀なり。
- 7、Saksdorf's butter cup (*Ranunculus Saksdorfii*) 黃花、五—十五吋、毛茛科、キンボーゲ屬。
- 8、*Potentilla flabellifolia* 黃花、八—十六吋、裂縁心臟形の葉、薔薇科に屬す。

9、Valerian (Valeriana Sitkensis) 聚繖狀淡紅白又は白花、二—四呎、羽狀葉、香高し、繡草(カンウ)屬。

10、Mertensia laevigata 青又は淡紅青の花、三呎、薄き橢圓葉、エイバブシ屬。

11、Polemonium pulchellum 薄青花、八—十二吋、羽狀葉、花葱屬。

12、Arctic lupine (Lupinus Subalpinus) 豆花狀の紫青花、十一—十八吋、掌狀葉、ハウチハマメ屬。

13、Wild Hellebore (Veratrum Viride) 綠白花、四五呎、ギボシ様の大葉、最も發育旺盛、バイケインウ屬。

14、Mountain dock (Polygonum bistortoides) 長橢圓形の白花、一二呎、鉋形葉、蓼科なり。

15、Mountain phlox (Phlox diffusa) 赤筋ある青藍色の花、漸次白に變ず、四吋、草夾竹桃屬。

16、Blue gentian (Gentiana Calycosa) 青色花、十一—十八吋、十月迄發育、往々尺雪を貫き咲く青龍膽なり。

17、Pentstemon 青色又薄黄花、三吋、タルマイ草屬。

18、Antennaria media 瑞西の Edelweiss の種屬なり。

19、Suksdorf's Silene (Silene Suksdorffii) 淡紅白花、六吋、石竹亞科、ムシトリナデシコなり。

20、Tolmie's Saxifraga (Saxifraga tolmie) 白花、三四吋、虎耳草屬。

21、Saxifraga bronchialis 白花、六七吋、シコタン草と同じ。

22、Alaska Spiraea (Lutkea pectinata) 小白花、六吋、掌形三裂葉、下毛屬。

其外 Potentilla (ラウゲ)、Epilobium (アカバナ) Erigeron (飛蓬)、Pale laurel, Spring beauty (Olaytonia lanceolata), Dog violet (Visla retoscabra), Early Violet (Visla Sempervirens), Gilia nuttallii, Speed well (イヌンゲツ), Arnica (チングル) Senecio (イヌンハム) Rosy Spiraea, Gr-

ass of Parnassus (ハネハナ草) Mountain dandelion, Monkey flower (ニホハネキ), Mountain Currant (クマハナ) Wild pansy, (クマハナ) Yellow fireweed, Indian paint brush, (Castilleja Oreopola) Elephant trunk (Pedicularis groenlandica) Cotton grass (Eriophorum polystachyon) 等あり。

第四帶 (五、五〇〇—七、〇〇〇呎迄)

1、Juniper バヤクシンなり。

2、Golden Aster (Erigeron aureus) 金色花、四吋。

3、Harrimanella Stelleriana (heather の一種)

4、Golden rod (Solidago Scouplarum) 黄花、一呎 (アキノキリン草)。

勿論第三帶の花にして此帶に咲くもの多し。

第五帶 (七、〇〇〇呎以上)

1、Lyal's Lupine (Lupinus lyalii) 總狀青紫花、七吋、銀色掌狀葉。

2、Pentstemon rupicola 薔薇様深紅花、莖は平臥す、又 Pentstemon menziesii は濃紫花なり。

3、Spraguea multiceps 淡紅褐花。

4、Eriogonum pyrolaeifolium coryphaeum. 繖形黄紫花、八吋、橢圓厚葉。

5、Cheilanthes Gracillima 小ちぢハース形の羊齒類。

6、Phacelia sericea 紫花、銀色羽狀細裂葉、追々減少しつつあり。

7、Polemonium elegans 青花、中央黄色房形花、香高し。

8、Erigeron compositum 淡紅花、小蝦夷菊なり。

9、Hulsea nana 大黄色花、六吋、羽狀尖裂の葉、追々減少しつつあり。

10、Draba aureola 黄花、葉莖皆軟毛に蔽はる。

11. Smelowskia Ovalis 總狀黃白花、羽狀尖裂葉、最も高き所迄生存す。

七

開山記録 印度人は當山を神聖視し、鬼神の棲む所とし、人間の冒すべからざるものとせり。神話的口碑に據れば、曾て勇敢にして慾深き男あり、山頂に財寶ありと聞き、險を冒して登頂せしが、果して貴寶の夥しく蓄積しあるを發見し、持てる丈多く持ち去らんとし、加之のみならず神に謝恩することを忘れし爲め、神怒に觸れ、山岳鳴動して雷雨至り且つ火を噴きしに驚き、悉く其財寶を捨て去りしも、猶神意を和ぐる能はず、谷底深く投げ飛ばされたりしも、漸く蘇生することを得たり。然るに其二日間は下界の數十年に當りしものか、身は既に白髮の老翁となり、家に歸れど妻も亦白髮の老婆となり居りたりとぞ。此の如く印度人は此山を畏敬すると甚だしく、敢へて登山を試みる者なかりしなり。一八三三年トルミー (Tolmie) 博士植物採集の爲め入山せしも、登頂を試みたるにあらずるが如し。一八五七年カウツ (Kawz) 中尉始めて南峯迄登攀し得たるに似たり。一八七〇年八月十七日ビー・ゴイ・バン・トランプ (P. B. Van Trump) 及 エチ・スチブンス (H. Stevens) 兩氏によりて始めて其山頂を極めらる。此兩氏は印度人の案内者によりてスルイスキン (Gluskin) 瀑(右案内者の名を冠す) 迄導かれしが、案内者は其所より一步も進むを肯んぜず、口を極めて登山の無謀なるを説き、或は幸にして頂に達するも、山上の鬼神は必ずや彼等を生還せしめざるべしとて、百方之を引留めしも、二氏顧みず、最後の天幕を發して山頂に向ひ、現今普通の登路なるジブラルター (Gibraltar) 巖經由の道を攀ち、十一時間の苦闘の末、午後五時南峯に達し、其成功を紀念すべく之を成功の峯と命名せり。しかも到底其日の内に下山し難きを知り、山頂に野宿と覺悟し、中央部に更に高所あるを見て、其火口壁を攀ち上りたるに、意外にも其北壁内側に盛に烟及蒸氣の噴出せるあり、此所に一面には高

熱一面には酷寒に接するの一夜を過し、幸に凍死を免れたりと云ふ。開山の榮冠はかくて此兩氏の戴く所となれり。其後各方面よりの登路探索せられたるも、今日迄未だ北側よりの途は發見せられず。婦人の初登山者はタコマ人ミス・エフ・フウラー (Miss F. Fuller) にして一八九〇年登頂せり、一九〇五年スチブンス (Stevens) 氏再登山す、時に六十三歳なりき。

八 登 山

シアトルよりパラダイス・イン迄

レニア山に登らん事は我年來の宿望なり、第一の機會を逸せずして望む所を試むるをモットウとせる予は、一九一八年七月北米シアトルに宿るの機ありしを幸に二日間を強ひて都合して此山に入りたり。但し季節稍早きに過ぎ、頂上を窮むる能はず、残念ながら約一萬呎のキャンプ・ミューア (Camp Muir) にて引返したりしが、積雪の豊富なりしと、雪遊びの面白かりしと、無數の高山植物が絢爛の美を極めしと、山容の壯嚴秀麗なりしこと等は、永く忘れ得ぬ思出となりて、再遊を想ふの情轉た切なるものありき。

一九二〇年九月復此山に入るの機會を得たり、今度こそはと友人 Y 君を唆かし、登頂斷行と決す、シアトルよりパラダイス・イン (Paradise inn) に電報し、九月二日の登山組に日本人二人參加し度さ旨申し込み、承諾の返電を得、二日午前七時シアトル第三街なるレニア・ナショナルパーク (Rainier National Park) 行の乗合自動車出發點に至り、七時半出發す。

シアトルを南郊に抜け、車は坦路を南に飛ぶ。狹霧籠めたるホワイト・リバー (White River) を右に左にしつゝ進む。此地方は日本人が野菜を栽培し、又牧牛事業を經營せる中心地にして、殊に牧牛は邦人事業中最も成功したるものとして矚目せらるゝ所なり。百頭以上を飼養する者尠からず。沿道多く放牛の長閑に起臥せるを見る。霧晴れて偉大なる雪のドーム・レニアの雄然として南東の中天に聳ゆ

るを望む、一時間程にしてタコマよりの道と合し愈南し、漸く丘陵地帯に入る。オレンゴン・バインの枝間時々仰ぎ見る山は、頂上三峯に別れ、山容稍變ず、間もなくニスクオイリ溪谷の北岸に沿ひ、道は東南に轉ず、アッシュランド(Ashland)邊より、追々處女林地帯に入る。一昨年此邊を通過せし際は、恰も山火事の最中にて、自然の降雨を待つか、河岸迄達するを待つか、全く手の付け様なき次第とて火は恰も無人の境を行き、怪焰高く十數丈に揚り、濛々として天日を蔽ひ、枝梢の燃ゆる音、巨幹の倒るる響、皆手に取る如く聞き得たりしが、今見れば見渡す限り焼野原にして、三又は五呎の焼殘株のみ林立せり、是れ皆心なき野營者又は旅人の火の不始末より起る慘害にして、爲に全米國の失ふ所年々數千萬弗なりと云ふ。大きな身代とは云へ勿體なきことの限なり。

間もなく公園の境内に入る、門より、旅客は皆下車して、一々記名登錄す、林容大に改まり、亭々たるドーグラス・ファールは往々道を遮りて立つ、(道は故らに巨樹を避け、之を保存する様にせり)數哩の間晝猶暗き感あり、森の香高し。

十一時ロングマイア・スプリング(Longmire Spring)着(鑛泉あり、大なるホテル及テント村あり)。中食の爲め三十分休憩。十一時半出發、路の屈曲漸く著し。ナハンタ・フォール(Nahant Falls)のテント村に至る、ニスクオイリ河に橋を架す、橋上門あり。此より上道狹くして自動車の擦れ違ひを許さず、約半時間毎に開門す。予等の登り自動車は皆停止して、降り自動車の打揃ふて降り終るを待つ。忙中の閑、皆止なく悠々左右の大量を賞玩す、左方數丁ニスクオイリ河の溪流盡くる所に黒山の如き異様の巨物が落ち掛かるを見る、是れ即ちニスクオイリ氷河の末端なり。氷壁直下五百尺、氷河も中流以上は美觀なれども、末端に至りて堆石塵埃に塗れ汚れ、之を仰げば壓し潰され相なる感じを受くるも、何等の美感なし、乳白の水(氷河が岩石を粉碎して生ずる濁流)其下より奔流し來り、正にニスクオイリ河の水源をなす。



河氷リオクスニと田雪の頂山アニレるた見りよ方南

此橋より、バラダイス・インに至るに一哩餘の小徑あり（自動車道は七八哩の迂路）、峻險なれども左にニスクオリイ氷河を見降しつ、疎生せる梅林の上にのし懸る様に聳えたる白峯を仰ぐ眺めは實に天下一品なり。一昨年登山の際は此小徑を探り、幾度か雪坂に轉びしが、樹下に雪消を待ち兼ねて啖き出る黄白のディア、タング（Deer tongue）の可憐なる姿に接したる時は其苦難を償ふて餘ありき。

程なく門開かれ、待合せたる十數輛の自動車は相尋でバラダイス溪に向ふ。一氣に千呎を登る、ナラダ、フオール（Narada Fall）迄三哩強、又自動車の待合所なり、更にデグザグの急坂を登り、バラダイス溪の左側を迂回し、午後一時半インに着す。一昨年の時は積雪軒を没し、雪なき所には高山植物満開の姿を誇りしが、今は既に九月、雪も花もなく、唯多數の旅客絡繹として五千五百呎の山上ホテルとも思はれず。インは宏壯なる木造家屋にして、テントを併せて三百人以上を收容し得べし。インの帳場に來着を通告すれば、登山組は二時出發の準備既に成れるを以て、急ぎ用意あるべしとの事に、予等二名及び同時に着せし一米人と大急ぎにて着換室に入る。同室には登山世話係あり、登山用服裝一式を賃貸す、帽子、下着、上着、ズボン、靴下靴に至る迄備はらざるものなし、各身に適へるものを採し出し、愈準備成る。

出發

午後二時出發、案内者はハンス、フュラー（Hans Fuhler）と云ふ瑞西人なり。兄弟ともガイドとして多年の經驗ありと。甲斐々々しく能く世話す、良案内者なり。唯奇とすべきは登山の道すがら時々一種の喊聲を發す。恰も鳥の鳴き聲に似、音調甚、朗かにして耳に快感あり、旅客の勇氣を鼓舞すると尠なからず。同行者七名（内三名は東部より來る）インの前庭に於てレニアを背景に紀念寫眞を撮り、山幸多かれとの祝福を受けつゝ愈出發す。

元來レニア登りは相當難行とせられ、其決行には豫め他の山に於て豫行演習をなし、十分確信を得

たる上ならでは企つべからざるものとせらる、然るに予等の如きは自動車に揺られたる後、着くと其儘出發せり、寧ろ無謀といふべきか、殊に我友Y君は元來マウンテンニアに非ず、唯吞氣と我慢にて大膽にも此一行に加はりしなり。さるにても無事に登山を遂行し得たるは不思議と稱して可ならんのみ。

出發と共にハンスは先づ第一に例の喊聲を發す、反響遠く氷谷の彼方より來る。一同勇氣大に揚り、ハンスを先登に單縱陣を作りて登り始む、步調頗る緩なり、Y君之をもどかしとし、大に登山の苦を輕んずるの風あり、凡そ經驗少なき登山客は出發の際無暗に急步調を採るの傾あり、頂に近づくに従ひ疲勞大に加はり、往々不成功に終る事あり、心すべき事なり、終始一貫步調は一にし、緩く且つ休み尠なく、案内者を先登とし一行中の最弱者を前にし、常に單縱陣を持續すべし、高山登攀の秘訣は實に此點にあり。

一時間計梅の疎林を過ぐ、一昨年時は此邊に無數のアネモネ(Anemone)を見しが、今は其毛帽狀の果實のみ風に靡くを見る。木は次第に疎らに又次第に小さくなり、ニスクオリイ及びバラダイス兩氷河を隔つる尾根の可成急峻なる石道を登る。愈チンバー、ライン(Timber line)に達すれば眼界頓に開け、主峯の山容並に氷河の大觀は遺憾なく眼前に展開せり。顧みればバラダイス溪を隔て、タチエューシエ(Tatoosh)の連山は次第に吾人の脚下に沈みつゝあり。遙かに一秀峯の雲烟を突破して聳え立つを見る、是アダムス(Adams)なり、追々雪坂となり稍急なり、一同雪眼鏡を用ゆ。左手は近くニスクオリイ氷河の中流に接す、同河は蜿蜒として溪谷を千仞の深さに削りつゝ、音もなく降り行けり、靜かなる大威力其者と云ふべし。下流は土砂に汚れ黒ずみ且つ無數の塊裂あり、恰も鱷の尾を見るの感あるも、中流以上にありては清淨無垢にして、白龍の銀鱗を逆立て、天に朝するが如し。河底に巨岩あれば恰も水の渦まき高まると同じく、ムク／＼と膨れ上り、其裂目よりは清き碧光を放

ち恰も白綸子の襷を見る心地す、懐しと云はんよりは寧ろ美しく又毫も冷き感なし。右手にアンヴィル (Anvil) 岩を見て進み、間もなく傾斜稍緩き雪田に出で、歩行大に捗取る、午後六時キャンプ・ミュー (Camp Muir) に達す。

キャンプ、ミューの一泊

キャンプ・ミューはジブラルター岩の下カウリツツ・クリーバー (Cawlitz Cleaver) の下端にあり、正に一萬呎、ジョン・ミュー氏の名を冠す。ミュー氏は夙に此地點を指して寒風を避くべき好個の宿營地なりとせり。曾ては露營者は岩間に寐床を造るの外術なかりしも、今は一間に二間半位の完全なる石室建設せられ、優に十數人を宿泊せしめ得べく、毛布さへも備え置かれあり。一昨年其年に於ける最初の登山者として此所迄來りし時、此石室にて前年の最後の登山者が残し置きたる罐入のビスケットを味ひたることを今ゆくりなくも想起せり。夕暮は流石に寒さ強く、ハンスがすゝむる熱き咖啡に溫まりつゝ夕飯を濟ます。下界は既に夕靄に包まれ始めたが、アダムスの巨頭及其氷河は猶夕陽に輝き、セント・ヘレンも圓頭を顯はし、フッド山も遙かに其銳峯を示せり、落日暮雲に入り、雲は漸を追ふて黄橙色琥珀色、淡紅深紅と變り、又逆に其變化を繰返し、西の光消ゆる時は天地は懷き程の靜寂の夜に包まれ終る。寒さに顫へつゝも此大自然の變化に眺め入りしが、終に堪えずして石室に入る。一枚の毛布を敷き、一枚を身に卷き付く、床ざりは甚だ快からず、且つ頭と脚と相接し、左右亦相觸るゝも塞さは身に泌みて到底安眠すべからず、半醒半睡の裏に夜は更け行けり。

キャンプ・ミューより山頂迄

九月三日、午前二時半、朝飯の用意成れりとハンスに呼び起さる。熱咖啡の味甚だ佳なり。天候も申分なく、星光鮮に手も届かんとす。頭上二千呎のジブラルター巖は、黒く山の如く聳えたり。太陽の高く登らざる前に此巖を越ゆるの必要あれば(日たけ氷雪の緩む時は、登攀一層危険なりといふ)簡易

なる朝飯を済まし、午前三時出發す。道はカウリツツ氷河の起點に位するサーク(Cirque)の一隅を斜に行く、傾斜稍急なり、幸此邊は雪の表面猶堅くハンスが打振るアルベン・ストックによりて作られたるステップは稍安全なり。單縦陣の一行は星明にすかしつゝ、前者の足跡を辿る。再びクリーバー(Creeper)・ニスクオリイ・カウリツツ兩氷河を裂き分つ岩塊の意に取付き磊々たる石塊を踏み行く、滑落の虞なきも、歩行は寧ろ困難なり。カウリツツ、チムニー(Cavilts Chimney)と稱せらる巖頭に達する頃、東天漸く紅を呈す。唯惜むらくはジブラルター及びキャセドラル(Cathedral)兩大巖に遮られ、旭光の壯麗を見る能はず。瞰下すればカウリツツ氷河は正に脚下に其源を發し、其カールには無數のクレバス恐ろしき口を開き、青光甚だ悽し、クリーバーを離るゝ時道盡きて一六餘の岩壁を降らざるべからず、注意深きハンスの手助を受けて一同無事に降り立ち、蜂巢と稱する圓錐直立の岩を過ぎ、ジブラルター岩の直下に達して小憩す。これより愈當山第一の難所たるジブラルター巖西側の登攀に取かゝる次第なるが、同岩は其偉大なる形態によりてかく命名せられしとぞ。直立二千呎、巨人の如くカウリツツ氷河の源頭に立ち、イングラハム(Ingraham)及びニスクオリイの兩氷河を分つ。岩は寧ろ脆弱といふべく風化氷蝕により小塊片常に落下し来る、又岩廂となれる所には三呎餘の氷柱を懸く。途は巖と氷河の境目を通じ雪軟き時は一層危険なり。これより更に輕装して、各ロープに繋がり、ハンスの例の叫聲と共に發足す。屢岩壁に身をもたせながら一步々々を用心して登る。絶えず小石片は頭上より落ち来る、脚下にはニスクオリイ氷河渦巻き流れ、數千呎の末をも見得べし。最後の五百呎計はシュート(Chute)と稱し雪坂甚だ峻險なり。暫くはステップを切りつゝ登りしがニスクオリイ氷河の源をなせる氷壁に行き當るに及び、各自のロープを解き、豫め岩側に堅く結び垂れあるロープに縋り、一人宛猿の如くに氷階を登る、左側には劍の如き氷柱天に向つて亂立し、逆落しにニスクオリイ氷河の本流に落下せんとする勢を示せり。遅々として攀ぢ行く予等の一行は、水晶の結晶叢を爬ひ登る

蟻群に似たり。苦闘すること二時間半にして一行漸く巖頭に達す。正に一二、六七元呎なり。登山も餘す所僅に一分に過ぎざるを以てこゝに小憩す、時に八時半なり。

イングラハム及びニスコオリイの兩氷河は此所にて兩岐し、蜿蜒として數里を流れ、其末端は深林中に没す、恰も日光龍頭の瀧の更に偉大なるものを見るが如し。イングラハム氷河の出發點にはベルグシュルンド (Bergshlund) と稱するクレバス (クレバスの下縁落下せるもの) 恐ろしき巨口を開けり。下より見れば頂上の如き觀ありし南峯は、比所に至りて左方に退き、眞の頂上は右方に間近く平たき圓錐狀をなして其全容を顯はし、僅かに雪なき岩のリツヂを示せり。其距離は一哩ばかり、左程に急ならざる雪路なるも、所々に淺きクレバスの裂目を見る。

日登るに従ひ漸く光度強し、ハンスは一同の顔に白クリームを塗りて日焼を避けしむ。かくて更に色眼鏡を掛け、勇を鼓して再び發足す。空氣の稀薄と睡眠の不足とは、次第に疲勞を増し、歩行甚だ遅々たり、ハンスの勵聲もこゝに至りては其效顯著ならず。クレバスを避け、右に左に休みを重ねて登り行く。其途中一度予は誤りて足を失し、一問程滑りしもロープに助けられ起ち上ることを得たり。ハンスは鏡を以て日光反射信號を發し、バラダイス・インに向つて一同の安全に成功しつゝあるを報ず、インよりも同様の信號を返す、直徑六哩なるも明かに之を觀取し得たり。十時半クレターピーク火口壁の一隅レデスターロック (Register Rock) に着す。

聞く所にすれば、空氣稀薄なる高山上に於て、著しく疲勞を感じるは、中年者よりも若年者なりと。タコマより來りし二十歳位のF君と予が友Y君とは、此所迄來りて終に動く能はず、仍つて囊中に秘し置きたるウキスキーを氣付として割愛し、之に依りて兩人稍元氣を回復す。

御鉢廻り

一行は暫時休息せし後、火口壁を左に廻りてニコロンピヤ・クレストに向ふ。兩人を介抱しつゝあり

し予も瘦我慢を張りて之に追蹤す。南峯(一四、一五〇呎)も既に吾より低く、更に北方二哩の自由帽峯(一四、一二二呎)迄は所謂火口原にして、傾斜緩なる雪田なり。右手火口峯の火口は、正しく二火口の連結せるものにして周圍約一哩、口内全く雪を以て充さる。底面は火口壁より僅かに一二間低きのみ、北側二火口の連絡せる所即ちコロンビヤ・クレストにして實に一四、四〇八呎の最高點なり。此クレストは他より高さと僅かに三十呎計、全く旋風によりて造られたる雪塊と云はるゝもの即ち是なり。無數の小さきスノー、カップ、Snow Cup の穿たれたる側面を登り、十一時一行は愈此クレストに達し、紀念寫眞を撮る。眺望は殘念ながら雲霧に妨げられて遠望十分ならず、シアトル及びタコマは終に見る能はず、唯オリンピク(Olympic)山彙カスケード(Cascade)連山及びアダムス・ヘレン・フッド等の一萬呎前後の諸高山のみを望み、又脚下に擴がる諸氷河が所謂氷の章魚の如く、其白き脚を鬱蒼たる處女林迄延ばし居るを見るのみにして、反て痛切に人寰を離れたる感を抱かしむ。クレストの少し東方火口壁の内側よりは、今猶相當盛なる勢を以て水蒸氣の噴出せるあり、一八七〇年スチブンス氏等が凍死を免れ得たるは此所なりしなり。

一同はクレストの南側日當よき僅ばかりの砂岸に腰掛けて午食を採る、ハンスが薦めし桃の饅頭の味は一生忘れ得ざる所なり。唯遺憾なるは、當時多少山酔の氣味ありし爲か、如何にも動くこと物愛く、充分に隅々迄探検するの熱心を缺きしを遺憾とす。かくて火口の中央を横斷し、レヂスター・ロツクに歸り、F君Y君と合し、再び一同の寫眞を撮り、十一時半下山を始む。

降　　り　　道

ジブラルター・ロツク迄は降路平易なりしがシュート及巖側の降りは、登りに比して一層危険を感じたり、殊に小石塊の落下するもの前よりも多く、氷柱の碎片と共に憂々音をなして飛び来る。但し多くは其音によりて豫め之を避け、幸に事なきに得たり。岩側の途中迄とカウリツツ氷河の上部とにて

再びロープに繋がりをし、其他は自由に降ることを許さる。何と云ふも降りには道歩取り、午後一時半にはキャンブ・ミューアに歸着したり。留置きたる荷物を收め直ちに降路に就く、ニスクオリイ氷河は更に一層の美觀を添へ、幾度か之に見恍たりしが、眼界は次第に低く、フッド・ヘレン・アダムスは漸を追うて烟靄の中に没し、身の下界に近づきたるを知る。

降路には此邊所々に急傾斜の雪坂あり、所謂スノー・シュート Snow chute を試み得べし。即ち尻を雪上に据ゑ、一人々々は連結して二百呎又は三百呎を一氣に滑降するなり、其痛快言語に絶す、予等の穿つズボンには豫め膠様のものを塗り、甚だ滑り易く作りありて、此雪滑に頗る便なり。爲めに道は一層歩取り、ホテルに着せしは午後三時なり。(今少し早かりせば當日午後二時發の自動車にてシアトル迄歸り得しなり。)

一同成功を祝し、クリームを洗ひ落して服を改め、各天幕に退きて休養す。

九月四日は午後二時迄ホテルにて休養す、當日は濃霧にて咫尺を辨ぜず、恰も二日休みに際し、登山客入込み來り、ホテルは人を以て埋まる、日本人も大分見受けたり。僅か一日の差にて眼前咫尺の地に山と相對しながら大觀に接する能はざる人々の不幸に同情しつつ、午後二時の乗合自動車を待ち、Y君と共に永く記憶すべきバラダイス・インを辭し、霧を衝いて歸路に就く。午後八時シアトルに安着す、Y君の成功を祝しつつ相別る。

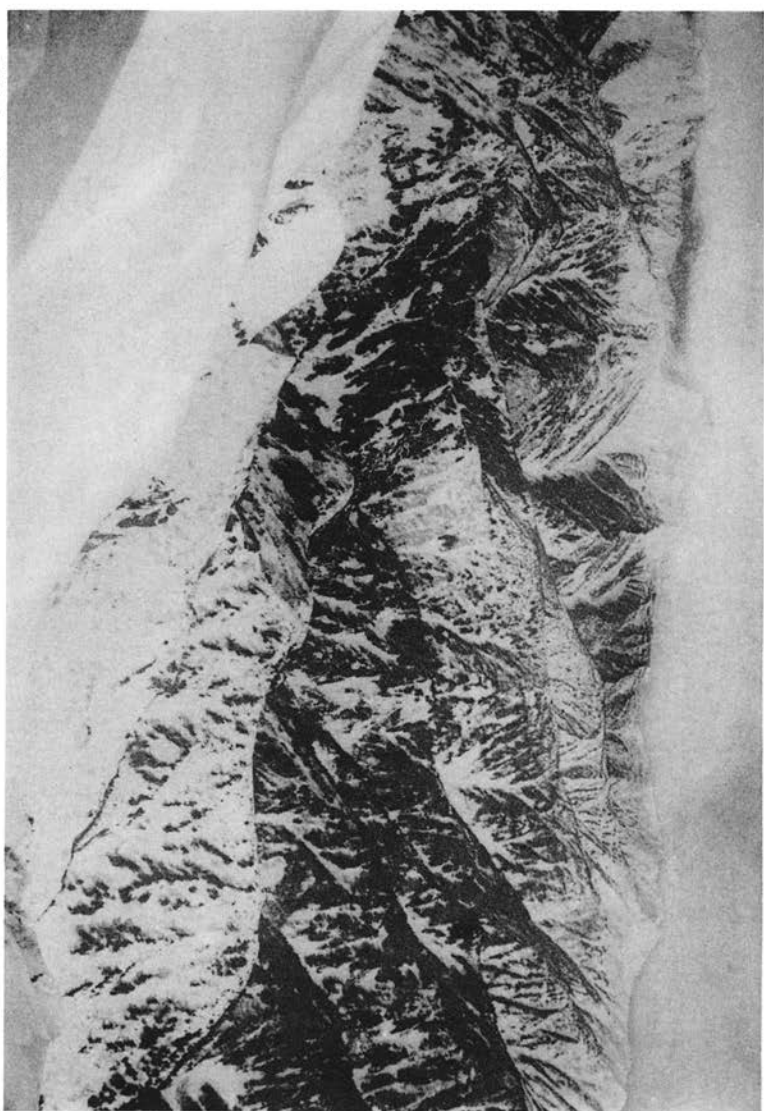
針木岳冬季登山(スキー)

船田 三郎

冬季、籠川谷へ入ると云ふ計畫は大正六年の冬より初つてゐたのであつた。丁度その歳の十二月南アルプスの地蔵、鳳凰山塊の登山を卒へ、後大町へと來つて百瀬慎太郎氏より籠川谷の冬の狀態を伺ひ知つたのである。その當時抱かれてゐた高き山々への憧れは、籠川谷のある一つの谷を溯り、その高みに屹つ氷雪の山稜より、巨きな劔、立山の輝きを望み見ることであつた。然し南アルプスに於ける雪中露營の痛苦なりし経験と、高連山脈に於ける冬季の危険とが再び近づけしめ難き神秘なものにして行つて了つた。當時全く未知であつた氷雪の山稜に於ける登山の技術と、冬季山岳に於ける危険に對する知識が幾分なりとも自分に知り又経験を積みし今日、再び昔の記憶を辿りて籠川谷へと入り、更にその谷を溯りし最奥の頂へと登攀を試みるやうになつたのである。

此處で冬季の飛驒山脈にての登攀が特殊なスポーツを要し、又困難なるものであると云ふことを喋々と明らかに示す程でもないが、我々を圍繞する巨きな雪の山も、嘗ては人々をしてその頂に近づけしめなかつたと云ふ榮譽を保持してゐたのであつたが、今日は最早や鋭く峻しき山頂より漸次、氷の上の足跡は印せられつゝあるのである。それは確かに登山技術の發達にも依ることは否めないのである。

雪の巨きな輝きが有する魅惑は、氷雪上に於ける登山術の練磨と發達とを強要してゐる。殊に積雪期の山岳の絶巔を極むる憧れに必要な登山術が未だ日本の山間の住民に暗きため、我々の冬季登山は



影澤氏一孝露伊

岳龍五、岳ヶ崎島腹、岳ヶ爺りと右 喉山山立後見た見りと上頂山立

必然的に職業的案内者なしの登山團體によつて行はれなければならない。而して我々にも亦、アルピニズムの技術の原理とその奥義を獨り知るに止らず、之を體得することは絶対に必要なこととなつて來たのである。在來の登山家、青年より老年に至る總ての登山家が、限られた一年中の或る時季に於てのみの頂より頂へ、頂へ、谷より谷へ、谷へ、谷への慌しい遊歩を續くることのみを止めて、美しい山への憧れ心によりて堅く結ばれた友達によつて、背囊に多くの露營や吹雪の時に必要な品々を背負つて、谷底の最後の村落より登攀の根據地なる登山小舎へと至つてもよいであらう。共に山頂への楽しい幻想を抱きつゝ、過す數日間の靜かな山小舎の憩ひ、靜かに抱く山の呈する涯しない豊かな惠示、長い時間に亘つての烈しい山稜の争鬭より歸りて、全然職業的案内者を伴はざる心易さと、自分達の力のみを信じ得た互ひの大きな喜びは、山人の胸に言ひ知れぬ陶醉の感覺を以つて充ち溢れさせて呉れるであらう。

飛驒山脈の積雪期登山に必要な登山具として登山杖、金標。登山綱に就いて私の意見を述べたいと思ふ。

アイスピッケルは各人が一本づつ携帯することは絶対に必要であらう。平井左門氏著「山岳スキー」中に於いて、高山岳のスキー登山を試みる四五人の一隊に一本のアイスピッケルを携へれば便利であるといふやうな意味が記されてゐるが四、五、人の一隊にたつた一本の登山杖では、飛驒山脈などの氷雪の山稜上に於ける確保法 (*liaison d'assureur*) には全く不足なのである。又「登山スキー」にその一本のアイスピッケルは雪庇を破壊する爲めに役立つものであると述べられたが、その雪庇を破壊すべき人を確保する爲め第二番目の人が行ふ複確保法 (*double sécurité*) 即ち自身の爲め、又雪庇を破壊する人へと結ばれた登山綱を捲きつくる爲めに是非アイスピッケルを必要とするものである。即ち一

本のアイスピツケルのみにては合理的に雪底の破壊さへ満足に出来ないことが多いのである。まして氷雪の山稜傳ひに於いては益々不都合を來すこととなるものと思はれる。

又或るスキー登山記事などに往々アイスピツケルの下部に輪カンジキを附する便利を述べてゐる。アイスピツケルは氷雪の傾斜面に足場を刻むに役立つものでは勿論あるが、その大部分は確保法の爲めに役立つものである故、その下部に附した輪標は容易に着脱の出来るものでない場合却つて大なる危険を來すものである。登山団隊を形造つて登山なす冬季などの山稜に於ては、隊員の一舉手一投足も全員の上に重大なる意義を齎らすものなる故に、そのうち一人たりとも登山技術の能力劣らざるを可とするものである以上、各自の所持する登山杖も亦確實に役立つアイスピツケルでなくてはならないのである。

金標は夏季の積雪上に使用する場合と、冬季の山稜に使用する場合と大いにその趣を異にしてゐる事が多い。冬季の雪質は夏季の雪質と大いに異なり、金標の齒と齒との間によく雪が堅く挟まりやすいことが往々にしてあるのである。かゝる時には全く金標の效用をなさずして寧ろ危険にさへ導くものである故、成可く金標の齒と齒の間隔は等距離に大きく距り、而かも齒數は八本より十本を要するのである。金標に附されたビューゲルアイゼン及關節が靴底に工合よく密着するものでなくてはならない。

登山綱はその山稜の地形により、又人數により一定することの出来ないものではあるが、我々にとつて困難と思はるゝ登山に於てアルピニズムの技術を確實に、圓滑に行はんとするならば、その隊員の人數は三人を理想とするのである。而して三人の隊員にとつて登山綱は三〇米突のものを携へねばならない。

冬季輝き連る峰々の孰れの頂へ登攀を試むべきか？ 先づ私の北アルプスの地圖が繰り擴げられて様々な記號がその考察に取り入れられる。山容、標高、登山小舎、谷底の最後の村より登山小舎に至る距離、スキートの滑走區域、スキーデボより頂への距離、山頂と登山小舎との高距。夏季、龍川谷より針木峠へと辿る人々には針木岳の山頂はそれ程興味を喚起する程の山容も提示しない。針木岳より續くスバリ、赤澤岳への山稜も。然し一度氷雪と岩角で堅められた槍岳より、巨きな立山の雪庇の涯から黒部の谷々を繞る峰々を見渡す時、いつも特長ある針木岳の山容は心を躍らせる。その見めく鋭さ尖り、黝き巖の斷崖、忘れ難くも形造られた印象は先づ針木岳の岩壁の記號を素早く地圖の上に見出す。標高は二八二〇米突、その麓に冬季も的にすることの出来る畠山と大澤小屋の青い長方形の記號を認める。しかも針木の頂、大澤、畠山の登山小屋、大町とそれ等の標點を一線に辿る時にはスキー旅行に好都合の間隔を以つて連絡せられる。針木峠の雪庇の蔭に横はる長大なスキー滑走區域、そして峠の雪庇がスキーデボと定められる。金標と氷斧と登山綱の全價値を發揮する鋭く峻しき山稜が針木の絶巔へと續く。又その絶巔よりの大きな静かな輝き、*l'esclat de en ski* の豫想は申分なく都合よく運んで、北アルプスに於ける信州側よりのスキーを用ひての登山に、此の上もなく恵まれた谿谷とその峰々が、龍川谷と針木岳のやうにさへ思はれる。キャラバンは三人と定められる。孰れも龍川谷の登路に經驗あり、北アルプスのスキー登山や岩登りにも經驗ある連中である。スキーの出来ないやうな人夫は勿論冬の山には伴はないことにする。(後同行者が一名増してキャラバンは四人となる) 大澤小舎がこの登攀の根據地に定められて、食料は十日分を準備する。白米が五日分、黒パンが五日分、牛肉二貫目其他副食物、それに毛布、防寒具、登山綱、金標で背囊は確實に各自が五貫目を越す。(輪カンジキを穿いた人夫は四貫目までしか背負はない。)
 大正十三年十二月廿八日——十四年一月五日。同行者 小笠原勇八 藤田信道 森田勝彦。

十二月二十八日。大町を出掛けたのが午後三時半を過ぎてゐた。雪の野を辿つて、安曇野から龍川谷へと入りゆく氣持ちは夏の朝の鹿島立ちとは随分かけ離れたものである。大山の寒村を抜けた頃は、星が一杯な夜が擴つて靜かな冷たい夜氣に晃めくランテルンに導かれ、スキーは雜木林を抜け、河原を横切り、龍川谷の小山が群り合つて奥深く抱き込んだ寂寥の裡に進む。四人の相互ひの力のみを信じ合ひ乍らも淋しく滅入り勝ちな心持ちで龍川を溯つて行つた。白澤のドウの前後でスキーを脱し、雪崩のデブリを渡るところもあつた。白澤の雪の原を横切るあたり、見上げた夜の空に星は素晴らしく牙を晃めいて、晃めきは冷たい大空に凍てついてゐた。畠山小舎着十時二十分。小舎附近は積雪二尺位。星の夜、雪に鎖された谷底の歩みは忘れ難い印象を形造つて呉れた。

十二月二十九日。空が白々とする頃から雪が舞ひ初めてゐた。冬季に於ける大澤小舎が雪の下に埋もれて了ふ不安があるので、五日分の食料と登山綱、金標、氷斧、山ランプを携へて朝九時半發する。谷を溯るにつれ雪は靡々として降り、止む時もなく、扇澤で中食を使ふ間も、風は冷たく雪片を顔へ打ち當てる。龍川の澁りは氣温が意外に高く、軟雪が深く積まれて、雪を踏む先頭の健闘が烈しく續けられる。黄昏、大澤小舎が背後に迫り聳つ黝き岩壁と、谷を隔て、峻しく岨つ蓮華岳よりの枝尾根との麓に見出される。扶け合ふキャパンの力が、巨きく壯麗な山麓への終日の苦闘が灰色の雪の上に描きしシュプールは漸やく雪の害の下に安らかな憩ひを求め出す。午後四時三〇分。

其の日から吹雪の執拗な抱擁と寒氣の凍てつく鋭き刺戟とが遅緩なく六日間も續いて、雪の下に埋もれた害の焚火の邊から降り重ねられた雪面へは、雪の階段が幾段か高められた。その吹雪の裡に、食料と防寒具の運搬の爲めに畠山小舎と大澤小舎との往復が二度までも行はれた。大澤から畠山までスキーは緩やかなボーゲンフアールンとアップフアルトシュテルンクとを繼續して一時間もあれば

達する。(大澤、扇澤間三〇分、扇澤、畠山間三〇分) 畠山より大澤への登路は休息なき登高が二時間(深雪の場合)を要する。途中雪崩の虞れある所は扇澤上に一箇所。

十二月三十一日も亦吹雪に暮れた。夜は山小舎の岩かべにザイル、シュタイクアイゼン、アイスビッケル、シーが飾られ、燃え熾る白樺の焚火を圍んで一九二四年の一年を通じて、我々グルッペによつてなされた山への仕事が無想された。スキー登山として一月の槍岳、三月の槍、焼、西穂高岳へ。岩登りとして七月の劔岳八峰、十月の槍岳北鎌尾根。それ等の壮美な山頂への苦闘と憶出が山へ對する態度を益謙讓に、又崇敬になさしめた。一九二五年も亦、針木岳のスキー登山よりそれからそれへと憶れの山を描いて美しい幻想の陶酔へと辿る。

元旦は楽しいさやかな朝餉の後、重苦しい吹雪の底に雪にまみれた氷谷をさ迷ふブロムナードが行はれる。

その後、雪と風と寒さは日一日とその強さを募らせて小舎の裡は吹き捲くる粉雪の亂舞に委せ、雪片は顔を、頸を打ち、堆高い疊積が床の隅に築かれる。夜も亦、毛布の上に厚い雪の褥が重ねられる。

一月四日。雲霧は谷を罩めてゐた。風もなく、気温は高く昇つて不氣味に雪面が眩しい。かゝる日、雲霧は谷を埋め、平原を蔽ふて而かもその雲霧の上に陽に輝く峰々が聳ゆるのであらう。極りなき蒼空が廣がり、その底に漠々たる霧の海が耀く。島々の如く浮べる峯々はその蒼き陰影に沈み、或はその山稜の一端を素晴らしく見めかし、そして限りなく廣く静けさ *La vie de la montagne* がそこに息吐くであらう。我々の氷谷より雪稜への登高の努力がかゝる日こそ續けられたのである。朝九時出發。ルツクザツクにはシュタイクアイゼン、ザイル、ビッケルが入れられたことは勿論である。劇しく飛ぶ雲切れの下に、針木の雪溪には吹雪の鈍い薄明と太陽の眩しい光輝が終日争ひ續けてゐた。吹雪の後の新雪に深いシュプールは描かれてゆく。針木岳とその山稜の氷巒へ迫る登高の歩みは寧ろ遅

々たるものではあるが、撓まざる休みなしの努力が二時間の後、我々のスキーデボへと置いた。(途中二〇分間の中食)十一時半。針木峠は巨大な二つの雪庇が重なり合つた上であつた。無制限な霧の擴りが今登り來た針木の谷を蔽ひ、懷しみ深いシニフルもその重なるの下へかくれて了つた。微風もなく、粉雪の高翔もない、峠には堆高い深雪の疊積が眩しく耀やいてゐる。

龍川谷の最奥の谷には殆んど總てが長大な狹谷を形造つて、三月の初旬から夥しい雪崩が狹谷に起亂するとのことである。正月の狹谷には、ただ深い粉雪の堆積と、風が築き上げた小丘が擴がるのみで、ただ一ヶ所マヤクボの下部で新乾雪雪崩を見出した丈であつた。スキーの登路も電光形登高の距離が案外少く、大澤小舎より峠までの間の三分二位しか占めてはゐない。(積雪状態により異なるであらうが。)

スキーとルックザックが峠の風淀みに置かれ、靴底に十本齒のシュタイクアイゼンを強固に結びつける。三〇米突のザイルが各人を堅く團結させる。黒部谷から吹きつける雲霧が時に山稜に横はる波状凍雪を鉛色に鈍らせる。その後には靜かな山稜の輝きが再び殘され、雪の峰々谷々が亦涯しない霧の泡立つ海に浮ぶ。四つの力がその堅い山稜の氷の上を靜かに渉る。

峠から頂までの山稜の距離を凡そ三等分すると、峠から最初の山稜は廣い雪庇と緩やかな傾斜が續き、最後に黝い岩壁のみの Crest に終る。その Crest の頂には少許の雪が戴かれ、二番目の山稜が針木岳の第二高點に終るまでは全く鋭き直截的な岩壁が針木谷へ、氷壁が龍川谷へ懸つて、四人の力が互ひに堅く信じ合はれ、ザイルとビッケルとアイゼンが全く信じられ、アルピニズムの技術が我々にとつて山岳の災難に對する唯一の防禦の武器となり、四つの力が一つの力に堅く結び合はれることによつてのみ、たゞその通過と征服が果し遂げ得る山稜である。その距離に於いて三百米許りの氷稜の健闘に一時間餘も費やされる。最後の山稜は第二高點より最高點の絶巔へと架け渡された一つの

巨きな雪の *col*、そして絶巔の下に横はるさゝやかな雪庇とである。此の三つの部分の山稜に、私達は峠より頂へ、二〇分、一時間一〇分、三〇分と云ふ時間の割合で登路を辿り、頂より峠へ一五分、一時間、一五分で降路を辿つた。

峠より最初の山稜の部分の終點が一〇米突の岩壁で杜切れ、籠川谷側へ峻しい粉雪の坂となつてゐる。峠より雪の上に重たい足を運んで來たキャラバンにとつて岩壁は強い精神の緊張を促す、岩壁の中央の裂罅を *façon des rameneuse* で登り切ると、今迄とは全く相違した峻しく鋭い山稜が荒い岩肌と見めく氷雪で築かれた數多の峰が横つてゐる。その涯にスバリ岳の黒い岩稜がマヤクボの窪谷を見下ろして高く聳える。針木の主峰がたゞ青白い霧の裡に時に臙げな雪の圓天蓋として窺はれる。

そこから *façon de secourir double* (複確保法) が用ひられて第二高點まで、神經は鋭く緊張し、左右の峻しき岩と氷と雪の傾斜面を絡むことが許されぬ、ただひたすら接空線の上に眞實な登攀が續けらる。そこに冬季の山稜に私達が知らんとし又描かれてゐた鋭き氷の峰と苦闘する精神の高揚と肉體の恢輿が、而して達し得た頂より眺め渡す靜寂な山々の光耀が確かに存在する。私達が有する眞實な自身の體力と意志とが確信される。

第二高點より主峰までは一つの大きな弧を描いた幅廣い氷稜が懸り、最後の絶巔の手前四〇米突附近に高さ三米突程の雪庇が横はる。山稜とは云へ雪庇の風下には深い粉雪が積まれ、吹溜りに腰を沒する登高の努力が拂はれた。確實な確保法と注意の許に雪庇の舌端は打ち碎かれ、打ち碎かれた氷粒の白金のくるめきにまみれ乍ら頂の氷稜へ靜かな足どりを運んだ。二時四〇分。黒部谷から横擲りに吹き當てる風は頂の堆石の上に、岩角に氷の三角稜の泡沫を飾つてゐた。空は高く高く澄んでゐた。スバリ岳の黒い岩稜、そして赤澤岳の黒と白い三角塔の印象、それ等が霧に打ち隠された瞬間、塗湧し亂闘し續くる霧の上に、頂に立つ私達の姿とその周圍に發散する華麗な圓い虹が浮ぶ。雪の下の

害に幾度か曉が重ねられて、益々色濃く彩られし幻想が現實に瞳の底に強く生くる日が來た。雲の上に聳ゆる劔岳の靜かな巨きな輝き。

山頂より再び峠へ鋭く横はる山稜に一筋長く深く刻まれしシュプールのを再び踏んで戻る。劔の輝きは再び振返へることもなく、スバリの岩稜よりマヤクボの窪谷にかけて淋しい陰影を滲ませて來た。三時三〇分、針木峠の雪庇の上に一本のザイルより四つの體が解かれ、シュタイクアイゼン、アイスピックルが背囊に結ばれて、スキーが穿かれる。最早や伸びやかな氣持ちで、粉雪の長大な滑走區域に心を躍らせつゝ峠の雪庇より粉雪の深い吹き溜りへ滑り下る。氷谷の底を縫ふて息もつかせぬ速やかなシュランゲボーゲンが描かれる。十分の後、慌しく辭した粉雪の翩翔する山稜が今更のやうに追憶の一頁に綴込まれてゐた。谷底は薄明の屯する霧の中に沈んで、新しい雪が一寸程も積つてゐた。數日間を過した雪の下の害へ再び戻り來た時、なし果された私達のための大きな仕事が強意識された。

翌日は又吹雪の裡に雪の裾は深く深く重ねられていつた。朝十時大澤小舎を立つて籠川谷の底を滑り下り、籠川谷の谷々の開ける河段丘の上を滑り續け、大出の寒村へ再び來たのはかれこれ二時頃であつたらう。安曇野の涯に連るセビヤ色の山脈とその谷々に陰つた残雪と、その麓に營まれる人々の生活が又懐しいものとなつてゐた。

雜 錄

○「多摩川相摸川の分水山脈」

について

本篇は元來上中下の三回に分つて、本誌第十五
年一、二、三號に連載して、不完全ながらも完結す
る豫定であつたところが、その第一回を脱稿して、
未だ第二回の執筆を始めなかつた大正八年の秋、
記録全部が記入してある手帖を失つてしまつたの
で、當分中絶の止むを得ざるに立ち至つたのであ
る。そんな大切な手帖を紛失するなんて、随分馬
鹿氣て居ると御叱りを蒙ると困るから、烏渡その
顛末の概略を述べさせて頂くことにする。

大正八年の秋十月、私は用事があつて日光に行
くことになつた。その序に、久しぶりで湯本迄上
り、白根に登山して上州側に降りなどし、再び日
光を経て歸京した。上野に着いてから自動車でも
も歸宅すればよかつたのに、附近で夕食を認める

等といふ譯で、登山服や登山具一切と、少し許り
のこはれ物等を入れた鞆を、驛に一時預けとし、翌
朝下男にそれを取りにやつたのである。詳しいこ
とは略すが、要するに、鞆の形の變つて居たこと等
から、テッキリ金目な品が入つて居ると睨まれて、
巧に小荷物係の手ですり替へられてしまつたので
ある。服は勿論、下着から靴下乃至は楊子齒磨に
至る迄、登山用の品を別にして置く癖の私は、帽子
からリュックサックに至る迄、洗ひ浚ひ盜まれて
しまつた。假令鞆や内容品が、主として再び手に
入れ難い英國製品であつたにせよ、金で代用品を
求められるものであるが、其の時寫した數本のフ
イルムと、二ケ年間に亘る山旅の記録は、絶対に
二度と製作し得られない、大なる損失であつた。

斯くして私は、鐵道省の無責任と不親切とのお
蔭で、「分水山脈」の續稿を中絶するの餘儀なきに
至つたのである。其の後折に觸れて、分水山脈の
再探を行つて、今では續稿を筆にする丈けの材料
を蒐集したのみならず、第一回分の誤謬と不足の
部分を訂正増補する必要をも痛感する立場にある

次第である。

斯くてある間に、私は東京附近にある中級以下の山岳を、春夏秋冬に亘つて跋涉すると共に、是等の山々が冬の登山に適當することを認め、その方面への刺戟の爲めにもと、大正十年十二月下旬、『東京日日新聞』紙上に、「冬の登山」といふ題を以て、冬期登山の壯烈なる光景、その注意等と共に、秩父山塊の一部、丹澤、道志、御坂、天子の諸山塊その他に關する地理的概略を掲載することにした。その際山名は其の當時迄に調査して正確と認められるものを使用したのであるから、幾分第一回の誤を訂正し得た點もある。これと前後して、私は日本山岳會だの霧の旅會の集會席上で、大菩薩連嶺に關する講演を試みたり、寫眞や地名記入済の地圖を展覽したこともあるし。又同好の友人と座談の際、私の初の記事の是正を試みたことはあつたが、未だ之を筆にして本誌上に掲げる機會を持たなかつたのである。

然るに世の中は寔に便利なもので、「冬の登山」を骨子とし、その前に私が新聞紙上に掲げた記事

やら、私の説を直接間接にとり込み、それに『山岳』だの『霧の旅』を初め、二三の古書の記事をまぜ合はせて、一廉の書物を巧に拵へ上げた人がある。その中には、私が未だ印刷物に公表しない事情が諸所に掲載されたり、私の撮影した寫眞を引寫して、左もその『著者』が苦心してスケッチしたのでもあるかの様にして挿入されても居る。して見ると、宛も私が物好きにも探究して、同好者に傳へようと思つた事柄は、大抵その内に抱含されて居るのであるから、何の某著となつてこそ居れ、私の集めた材料をその人が手際よく纏めて呉れた様なものと、内心幾分感謝の念を持つて、丁度よい幸に、筆無精をさめ込むで居た次第である。

然し惜しいことに、此の本の『著者』が私に初からそうと明して呉れたなら、もつと多くの材料を進呈出来たのを、それとなくこつそりと爲て退けたので、所々恐ろしく物足りない感じの起る箇所や、あれだけの著作をする人としてはと思はれる様な誤謬や遺漏が見當るのである。

何はともあれ、この書物の出た御蔭で、私の勞力も大に省ける譯と有難く思つて居たところが、事情を知らない某々君から、その本の記事と、私が『山岳』誌上に載せた記事と齟齬する點のある爲め、正否の何れにあるかを質問されたり、又は本誌上の記事と違ふ彼の書物が間違ひだと思はれたりすることが起り、遂に私が公然訂正しないのは、却つて人を誤るものだといふ御叱言を頂戴する様な始末になつたので、遅れ馳せで甚だ申譯がないけれど、此の経緯を開陳すると共に、聊か訂正させて頂くことにする。それと共に、例の『著者』に對しても、書物の眞價を疑はれる様なことのあつたに就いて、御詫びをしなければなるまいと思ふ。それからまた私は、某君の様に『著者』の態度について甚しく憤慨するのも面倒だから、その儘にして置くこと、しよう。どうせ山の名や澤の名位、誰が地元に行つて搜し出して來ようと、元々山人から教つたもので、その先取權等を主張するのも大人氣ない。實際何か纏つたものを書かうとなると、偶には、そして人によつては屢々、

知らない事柄に出會ふものである。それを一々自身確めて居たのでは、中々埒があかないから、私の分水山脈の記事の様に、年數ばかりかゝる。それをチヨコと僅か許りの山を歩いた丈けで、物々しい案内記を書くには、缺と糊の厄介になるは必然である。そして、それが『山岳』に現れる様な研究の報告と違つて、體裁を作つて本屋の店頭に掲げようとするには、一々出所や據所を明記して居たのでは、估券が下つて體裁がよくない。そんな『著者』を捉へて、某氏が『山とスキー』で『山岳スキー』といふ本の批評をした様に、一概に剽窃者と呼ぶのはチト可哀そうな氣もする。唯例の『著者』が、自身何等の知識もない筈の地方に關して説く時、私の説に同意したとして、地圖の誤謬を訂正する如き、如何にも揅つたい氣がする。

閑話休題として、拙文の訂正を試みることに致そう。初めは誤植又はその類似の訂正をする。三頁十二行目下方。兼てとあるのを、これに連續して東に走る分水山脈は、と改めて頂いた方が

意味がよく通ずると思ふ。

同じ頁十六行上方。大室山にオホムロサンと振
り假名のあるは、オホムレサンが正しい。

五頁終りから六行の、醍醐川は勿論醍醐川。

六頁終りから八行、ついでつれての誤。

八頁終りより八行の葛野川はカヅノガハと讀
む。

九頁挿圖説明中、北南とあるは北方の誤。

一九頁十一行括弧内は大正三年二月廿八日と記
入されたし。

二二頁挿圖説明中、中腹とあるを頂上と改む。

二三頁九行目、麻生とあるを麻生山とする。

次には記事中にある重要事項の訂正を試みる。

三頁に、大菩薩岳即ち地圖に大菩薩嶺と記して
あるものが、大黒茂谷のセリに當ると書いて置い
た。この大黒茂といふ文字がチト氣に入らない。

大は形容詞として別に異議はないが、クロモのモ
に茂を宛てたのはどうも當らない様に思ふ。とい
ふのは、このモはシゲル意ではなくて、モミの略
語である様に考へられるからである。甲州寧ろ郡

内のある地方では、バラモミの生へて居る尾根を、
バラモヲネと呼ぶことがある様である。それで、ク
ロモはモミで黒く見えるといふ意から出たのでは
あるまいかと思ふ。或はクロモミとも呼ぶモミ
の一種が生ずるのかと考へて見たが、バラモミや
ウラジロモミはあつても、クロモミといふ名は未
だ耳にしたことがない。それとも亦イラモミにで
もそんな方言があるのかも知れないが、丹波では
イラモミをトラモミと呼ぶから、どうもそれとも
思はれない。大菩薩岳の頂上から北面にかけては、
黒木が茂つて居て、そこから流れ出す谷をオホク
ロモはよい名である。その黒木の種類は、前述ウ
通り手帳を盗まれてしまつたので、今判然と記す
ことが出来ないが、多分コマツガ、イラモミ、の
ラジロモミ位のところであつたらうと考へる。そ
して植物學者がモミと稱する一の種類と限定され
た譯ではあるまいと思ふ。第一常のモミは、も少
し低い所を好むものである。とに角大黒茂といふ
文字は、そんな理由で、大黒嶺とでも改めた方が
よいだらうと考へる次第である。

三頁並びに八頁に、現今の大菩薩峠の直南に續く峯を川入山と記したのは、小菅村役場からの回答によつたものである。『甲斐國志』によると、小菅川の上流を蘆澤と總稱する様に見えるが、現今ではその名は用ひずに、川入と總稱する。その川入の奥に當る峯であるからといふので、之を川入山と呼ぶのは不當ではない様であるが、小菅の獵師等の言ふ處によると、そんな名はないそうで、この峯は熊澤山と呼ぶ可きだと主張する。此の峯の東北面から出て、小菅川の源流をなす澤は、熊澤と呼ばれるし、又西北面から出て、日川の源流をなす澤も、その地方で熊澤と呼ばれるのであるから、熊澤山といふ名は動かすことは出来ないであらう。

九頁に、砥山峠に上日川峠の異稱がある様に記したのも誤で、これは私の聞きそこなひからである。此處に記した峠が砥山峠であることには間違はないが、上日川峠の方は、雲峰寺の南麓を通じて、日川上流の沼ノ澤に下るもので、日川の右岸で砥山峠の路と合するものである。

分水山脈の西部で、一四二九米の三角點のある小隆起を、樫の尾山としたのも、小菅村役場の報知によつたのであるが（一二頁）、此の名もどうも獵師仲間には通用しないらしい。それにあの邊では、吾々が三角點や峯頭に對して妙に引寄せられるのと違ひ、山の尾に名をつける習慣がある。そしてその命名法によつたカヤノヲといふのは、天狗棚山南峯から長峯にかゝらうとする邊から眞東に土室澤の上流に斗出するものである。

牛ノネ山（一二頁）といふ名稱について、異様な名だと記したが、あれは牛ノ寢山と書くべきもので、實際は峯らしくもなく、平坦に近い尾根である。今は故人となつたが、小菅村の古老で、昔あの道を毎日の様に通行した者に訊ねて見た處、その頃信州あたりから荷をつけて來た牛が、峠を越し、神懸、玉蝶の急坂を下り、牛ノ寢山にかゝる頃平坦で輻の廣いあの尾根に、ゴロ／＼臥て休息するならひだつたからで、普通には牛の寢通りと呼ぶとか。それからその位置は、一三六五米の獨立標高點のある所よりも西に寄つた、一四〇〇米

を最高點とした、一三八〇米前後の平坦地にあたる様に思はれる。

一二頁に記した狩場山神祠の位置は、實際狩場澤の源頭よりも、稍東方に寄つて居るらしいのだが、地形圖が少し實際と違ふ様な氣がするので、それを圖上に明示することは困難である。祠は道よりも南によつた、土室澤に面したツガの大木の根元にある。尙狩場と名のつく澤は、小菅川に落ちるものと、土室澤に流入するものと二つある。

十一面觀世音を、狩場山神祠の神體として祀ることは、如何にも變に思はれたが、小菅村で尋ねて見た處を綜合すると、狩場山神は昔から神體がなかつたのを、藤木善兵衛が長峯で掘り出した十一面觀世音の像を、初め自宅に置いた處が、それでは勿體ないといふ譯で、後狩場山神祠に納めたのだといふ話である。それなら別に不思議もない。この神像はその後盜まれて山神祠にはなく、今は七保村の某家にあるといふ事であるが、一度見たいものである。

長峯については、大分増訂する箇所がある。そ

の内でも殊に主要な點は、エーベ小屋と、カネツケ頭の位置とである。私は一三二六米の三角點のある峰を、カネツケ頭としたが、これは大きな誤で、實際は、そのモット東に續く一二六〇米の圈を有する峯である。カネツケ水は、その東麓に當る、約一二〇〇米あたりで、尾根の南面に湧出するのである。

一三二六米の三角點のある峯は何と呼ばれるかといふに、これは白草^{シラクサ}の三角點と稱されるのである。理由は、その西南に當つて、黄金澤^{コガネザウ}の兩岸が斷崖絶壁をなす所を、シラクサといふからで、此處の下手に不動瀑があることになる。シラクサの意味については、明瞭でないが、通過することもある出来ない險阻な崖であるといふ様なことらしい。白草といふ文字は、測量部でも用ひて居るが、無論宛字で、草の名などでは決してない。

エーベ小屋といふのは、丹波の獵師の榮兵衛といふ者が、此處を根據地として、黄金澤奥に獵したものの遺跡で、今でも年々獵師が簡單な小屋掛をして、獵期に使用する様である。私が大正十年

十二月に通過した時には、米梅の枝などで屋根を修理し、二三の食器が散亂して居た。此處は南に面した日溜りで、側に飲用に堪へる水が、可なりの量で湧出して居るから、休憩等には申分がない。地圖上でその位置を示すなら、前記シラクサの崖の記號の西端の眞上あたりに當る一二七〇米許の鞍部で、私が十五年一號の記事中、一一頁最終の行に、其處から右に下らぬ様にせよと注意した箇所である。私は何故斯様な注意を記したかといふに、此處は路が三角形になつて居る所で、天狗棚山から下つて來て、路が二岐する時、左をとつて行けば三角形の一邊を通る丈で、一と筋に白草の三角點の方に行くのであるが、右に急に下ると、彼の榮兵衛小屋に出で、そこから更に黄金澤に下ることも出来るが、東に上れば再び本道に合することになるのを、初めは只黄金澤に下ることの危険を避けようとのみ思つた爲め、左の路を取つたので、榮兵衛小屋其物を見なかつたから、右の路は黄金澤へ下るだけのものと思ひ込み、右に下らない様にと注意した次第なのである。

私が榮兵衛小屋の跡と思ひ違ひした場所は、上記の地よりも更に西の、一三三〇米程の鞍部附近で、天狗棚山から下つて來て最初の鞍部附近の、伐木の趾か何かを誤つたものである。

尙此外長峰等について記す可きことも多いが、それは他日の機會に譲らう。此の邊の比較的新らしい記事は、大正十三年一月末から二月初めにかけて、『東京日々新聞』に「雪の大菩薩峠」として概略を掲げて置いた。(武田久吉)

○朝鮮金剛山の山火事について

予は本年(大正十三年)六月上旬、朝鮮金剛山に入り、其探勝に十二日を費したが、尙ほ日數に於て、頗る不足を感じたのである。それほど山城廣く、峰巒溪谷複雑を極め、雄大莊麗、變幻奇矯、讚歎措く能はざる所であつた。

朝鮮金剛山は、東洋の靈山、否今や實に世界的名山と謳はれつゝある様になつた。然るに本年十月下旬、新聞紙上の報ずる所によれば、同山は山火事を起し、全山殆ど滅亡せんかとまで想はしめ

た。

新聞紙上には、十月十三日午後一時、内金剛山釋迦峰より發火し、二十四日には明鏡臺、望軍臺まで延焼したと報じ、其後山火事は益猖獗を極め、延焼五郡に擴がり、咸鏡南道警察部總動員を行つたなどとの報道を見た。

右記事は、餘りに大袈裟の様でもあり、且又頗る粗雑の點が有る様にも思はれた。最近に於ける親み深き名山の不幸、轉た悼惜に堪へませんので、予が本山探勝に多大の便宜を與へられた、各方面の諸氏に對し、早速見舞を兼ね、其真相を照會した、其返信の概要を左に摘載すれば

△朝鮮總督府社會課係、細川貞之丞氏の返信には、

金剛山山火事の報、一たび天下に傳はり、定めて愛山家を驚かし候儀と存候、該火事は、如何にも廣い區域に互り候へ共、風景を損ずる程の害を被り申さざるは、不幸中の幸にて候、尙詳しい消息は後便に譲り申候。(十一月七日付)

△江原道淮陽警察署巡查、乾供太郎氏の返信

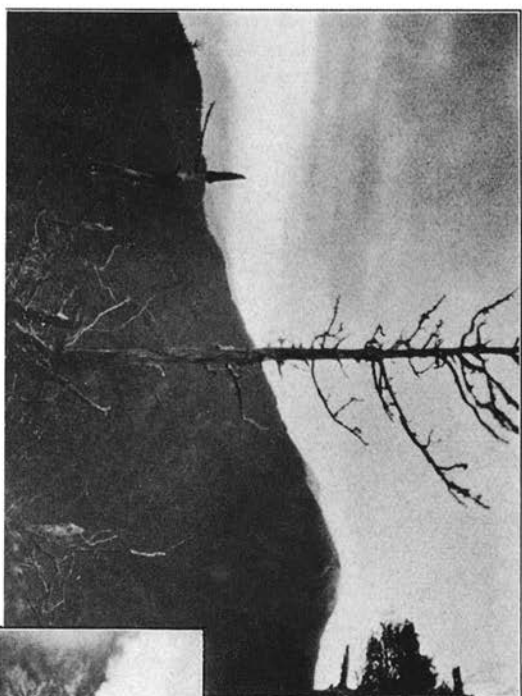
には、

金剛山大火に付、早速御見舞を賜はり、厚く御禮申上候、發火は十月十三日午後で、二十五日漸く鎮火致候、區域、南は表訓寺前より、北は毘盧峰附近まで、西は長安寺前より、東は白馬峰までにて、三方里以上に及び候、山内建築物は、面民の總召集により免れ、僅かに望軍臺下兜率庵のみ鳥有に歸し候、然し單なる地表火に候へば、明來年の風致を害ふが如きは之れ無き事と認め居候。

山内出張は、十一月四日に引揚げ、目下本署に勤め居り候。(十一月十三日付)

右巡查乾氏は、探勝時期(六月初より十月末まで)淮陽警察署より、内金剛の入口長安寺に出張して居られるので、予が宿泊及び案内者雇入や其他に付、非常に懇篤なる世話をせられた人である。(文中「面」とは、内地の町村に當るのである)

△外金剛楡岾寺住職、金一雲氏の返信には、當地山火の御見舞狀、深甚鳴謝候、望軍臺、明鏡臺附近略三千町歩許焼失しました、雖然御承知



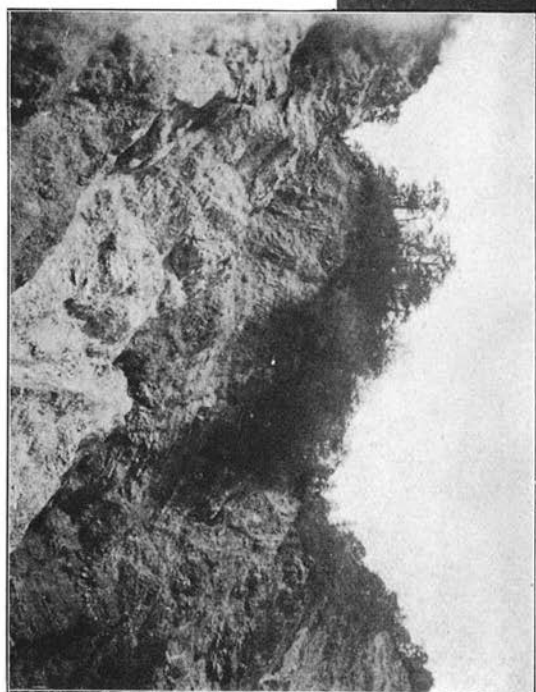
冠松次郎氏撮影

信遠國境青崩峠

右下

加々森山

左上



の通り、金剛山は大抵岩石の峰巒にて、落葉位丁度焼け通り、老柏、高松、巨楓等の樹木は、被害ありませんで、後日風景探勝上には、何等遺憾な事は無いと認められます。(十二月十六日付)

右金氏は金剛大本山楡帖寺住持で、佛教中央教務院理事を勤められ、鮮内有數の高徳禪師である。金剛山探勝には、山中到る處に散在したる寺院の御世話を受けねばならぬ。楡帖寺は内外金剛寺院中の最高寺格で、領地は山中數里に亘り、修行雲水常に百五十人以上寓居する。本山は古來高僧修行の靈場である。

△長箭公醫櫻島友次郎氏の返信には、金剛山は新聞紙上に傳へた程、景致には損害なく、又各建造物も、被害なき由に候、それよりも溫井里部落の戸數約三分一を焼失せるは遺憾に候、小生は九月十五日元山に轉居致候、邸宅は元山第一の位置、庭園五百坪も之あり、趣味の高山植物培養には、稍理想に近き住居に御座候、今後復々御來鮮の節は、必ず御立寄下され度候。(十一月十九日付)

長箭は、金剛山探勝の爲め、元山より汽船便に依るものゝ入口港であつて、金剛山麓溫井里まで約二里ある。櫻島氏は土地の青年團長であり、外金剛の新勝地、奥萬物相裏山越の宣傳に熱中せられた人である。

△溫井里旅館嶺陽館主、沼安太郎氏の返信には、

當地の山火事並に當里の火災に付、遙々御氣に懸けさせられ、早速御見舞下され、御懇情感佩罷在候。内金剛方面の山火事は、約二週間に亘り、次から次へと焼け擴がり、殆ど手の着け様もなく、從て焼失區域の如きも、餘程廣大のものに相成候へ共、専門家の言に依れば、所謂地表火とか申し候ものに之あり、只落葉や枯草を燒き拂へたる位のものにて、風致を害し候様のものには決して之れなき由にて安心致居候、又去月十日夜當地の火災は、郵便局を中心として、其上下の兩側に涉り、二十二戸を烏有に歸し候、郵便局以下即ち内地人側の方は、幸に災厄を免れ、弊館始め内地人旅館は、總て無難に相濟候間、憚ながら御休神

成し下され度候。焼失したる鮮人側も概して資産階級の方に之れあり、來春までには、大概新築出來る模様之にあり候、依て内鮮人側とも、來年よりの探勝客の收容には、何等差支之なきものと存居候に付、當山の爲め御吹聴成下され度希上候。最初誇大に各新聞紙上に報道致され候へ共、十一月二十八日發刊大阪朝日の「絶景を害せず云々」の記事が最も正確の報道に御座候間、御一覽願上候、尙當山景色の最良期節即ち紅葉期に必ず重ねて御光來の程、御待申居候。(十二月五日付)

溫井里は、外金剛探勝の根據地として、絶好の部落であつて、戸數約六十、内内地人約二十戸、内地人鮮人の旅館も多く、嶺陽館は其第一流に屬し、館内に清澄なる溫泉を引き、設備頗る佳良である。又同地には滿鐵會社經營の金剛山ホテルがある。

右各方面の返信を綜合するに、金剛山の山火事は、其而積の割合には、損害の程度深くは無い様である、新聞紙上、延焼五郡に擴がるなどとは、事實誤りである。又咸鏡南道警察部總動員などと

は、是亦事實ではなく、内金剛長安寺方面附近の部落民を召集したのである。本山は咸鏡南道ではなく、江原道に屬してゐる。

溫井里部落の火災は、山火事の延焼からではなく、全く特發のものである。

要するに今後内外金剛山の探勝に、何等殆ど障害の無かつた事は、我々愛山者の大に欣喜措かざる所である、但内金剛に於ける萬瀑洞、黃泉洞方面は、茲數年間灌木焚死の殘骸が、多少目障りともなるであらうかと想はれるのである。

本山灌木林には、天女花、黒船躑躅オオササゲクロフキツツジが甚だ夥しい、天女花は、大和大峰山を除くの外、産地殆ど無く、黒船躑躅は、内地の諸山には、未だ全く見ざる所である。(大正十三年十二月末稿 大平晟)

○遠山附近

遠山と云ふのは、天龍川の支流遠山川の流域、この本流と支流とに跨がつてゐる部落、八重河内村、和田村、南和田村、木澤村、上村の一帶を總稱してゐるので、この五ヶ村を束ねて漠然と呼ぶと

きに、遠山と云ふてゐる。四面全く山岳重疊の中に圍まれてゐるこの地方も、東南に渡つて高聳してゐる、赤石山脈南方の雄峯達と、その支脈が西北に向つて奔下してゐる處に、山岳溪谷の優大と深奥とを見ることが出来る。

北アルプスの峨々たる連嶺と趣を異にした、悠大な、長厚な群巒の天上續きを、下流から望むときは、山上に山を重ね、峯頭又峯を連ねて、盡くる處を知らない程の奥深さを感じしめる。そしてその奥深い十重二十重の山峽溪隘を、悠々として遅く緩く、然も非常の重みを以て流れて來るのが遠山川である。遠山川は本流に於て最も光彩を放つてゐる。そして源流地よりも寧ろ中流、兎洞北侯澤出合附近に於て絶景を形ち造つてゐる。その滔々として流れて行く水の姿態、荒漠たる兩岸の風景は、大天龍に彷彿として、四周の高聳してゐる山岳の景觀は遙かにこれを凌駕してゐる。

青崩峠の方から流れて來る小嵐澤は、流域が廣く壯大であるが美觀に乏しく、之と八重河内で落合ふ梶谷澤も、池口の澤も、甚だ小さく、上村川

も別段私等の好感をそゝる程の景趣を持たない。以下今春（大正十三年）私が見聞した遠山附近のことを少しばかり書かせてもらう。

中 根 下 栗 大 野

和田から約一里、木澤の山村を通り抜けて、右に本流を見、左に青々とした麥畑を眺めながら行く内に、本流が右に彎曲して行くと、知らず／＼その水上を仰ぐ様になる。生憎雨天續きであつたが、朝少しの間は晴れ渡つてゐることが多い。丁度本流の奥まで見通のきく處まで來ると、始めて雪の塊まりの様な奥山の姿を見た。これは私にはだしぬけであつた爲に、その颯爽たる山容を仰いで、私は思はず立ち止まつた。聖の一角、私はそれに相違ないと思つて、早速ピントを合せた。朝早く光線が弱いのと、霧が深い爲、物にならなかつたが、後から來る鶴平に聞くと、聖岳ではなく兎岳だと答へた。標高は稍劣つてゐるが、一番近く遠山の谷に乗り出してゐるこの山は、雪を戴いてゐる爲と、下流から仰ぐ爲に、中々壯麗の感じを與へた。兎の後は密雪の流れが早く、その切れ

目から折々白光がきらめいて、右、聖の大きな姿が頭までは見えなかつたが、左、大澤岳と、その後ろに赤石岳のらしいすばらしい雪溪の條痕が、黒雲の下から光つて見えた。

この旅は、遠州の秋葉山から殆ど毎日降りつゞけられ、目的であつた雪山の觀望は今日まで全く零であつた。青崩峠の上で、木曾駒の一部らしい雪の山をかすかに見たが、御岳でさへその頭は雲に没して見ることが出来なかつた。それ故始めて兎の白いニコ毛の様に美しい、雪の姿を見た時は、私は飛び立つ程嬉しかつた。

上村川と本流との出合の所を、上村川の方へ少し沿つて、粗末な丸木橋を渡り、本流の右岸に出て、それから本流と上村川との間に出てゐる丸い峯續きを登ると、中根の部落が路傍に散見される。見渡す限り栗の新緑林の集團の間に、麥畑や稗豆の畑が耕やされて、その間に玉蜀黍がもう大分のびてゐた。人家のある里だけに險阻ではないが、山側の勾配の急なことは驚くばかりで、そこに付けられてある路をひとしきり上つて行く内

に、汗がにじんで来る。これから下栗まで約一里の間は、尾根そのもの、景色は實に鮮麗であるが、益々上りとなり、大きな藥山の様な隆起の續きを上に見ながら行くので、路はこの尾根の側に三筋程つけられてある。尾根上を行く路、中途を行く路、それから川近くを上る路、その外人家のある處には、幾つも側徑が出来てゐる。

見晴しがよいので一番高い尾根路を通つたが、矢張人家は道について疎らに建られてゐる。「この邊では隣へ行くと汗が出る」と鶴平が笑つて云つたが、成程一町程も離れてゐる上の隣家へ登るのには、汗が出るのも尤だと思つた。

大分曇つて來たのに、雨が時々やつて來るので、下栗の三角點一一四四米突まで上らずに、その横を廻つて行く内、追々遠山川の谷奥が近く覗かれる様になつた。

低い幾つかの尾根の後ろから、北俣澤の出合に突き出てゐる翠緑の大尾根が見える。其脊を越して黒木の森林に蔽はれた高い尾根、それは兎岳から兎洞の出合まで續いてゐる雄大であつた。前

者は闊葉樹が多い爲め鮮翠の色に勝り後者は針葉樹に蔽はれてゐるので、その蒼青の色調は殊に雄峻の感を與へ、その突端に一八二三米の笠松岳が谷近く聳えてゐるので鯨の脊の様に谷に向つて乗り出して見える。

その右手の方から、川を隔て、加々森山の支脈矢筈山一五九二米突の龐大な尾根がのさばり出すと、遠山の谷はもうどこを見ても山の藪つゞきで、私等は腹一杯山の大きさと深さとを味ふことが出来る。

この綜錯してゐる大山脈の壯觀は、やがてその底に渦卷いて行く深谷の雄大を暗示するもので、實際遠山川はそこで最も壯觀な溪趣を形ち造つてゐるのである。

あまり風が強く、雨が降り荒むので、下栗のとある人家で休ませてもらつて中食を認めた。この邊の人家の前には、丸太で組まれた櫓が建てられてある。それはとり入れた作物を干す爲に作られてあるので、氣候の寒いこの邊では、乾燥の悪い爲皆これへ掛けて干すのださうである。悠大な山

又山の間に介在してゐる點々たる山家の前に、この櫓を見出すとき、私等はこの人爲の業くれが、この自然の景に微妙なる光彩を添へつゝあるのを喜ぶであらう。

下栗から大野迄は大した登りはない。川から千米突近くもある山側を迂回して行くと、小野へ出て、それから遠山川最奥の貧村大野へ出る。下栗附近では周圍の山は大分人の營力を被つてゐたが、もう大野まで入ると、ありのまゝの自然、殆ど汚されてゐない山谷の趣を見出すことが出来る。久戀の大野、峻急なる山側に點々として巢喰つてゐる寒村、米も麥も出來ず、豆や稗や馬鈴薯を僅かに採り得らるゝ礪礪の地。その大野附近の景趣が私に與へた印象は、越中の雄渾なる山谷の風景のものにも劣らない程であつた。

先年大井川の谷から、聖澤へ入り聖岳を越えて遠山川へ下り、幾日かを谷底のみに暮して、最後の日の薄暮、疲勞と空腹に苦しみながら、漸く辿り着いたのが大野であつた。最奥の人家に一夜の泊りを頼み、その戸口に立つて暮靄たちこめた遠

山の谷奥を私はなつかしみながら顧みた。夕靄の上から打連なれる國境の連山、南アルプスの王座を仰ぎ見て、自分の過ぎ越し方の山や谷の奥深さに我ながら驚いた。その翌朝も楽しみにして未明に戸外へ出て見ると、朝霧はまだ谷底に沈んでゐたが、丹青を凝したなよやかな、然し雄大な遠山の姿、翠の黛が遠く大きく無數に浮び出てゐるのを見て、私は譯もなく涙ぐましくなつた。

今年も下栗から御池山へ上つて見たいと思つて出かけた處、生憎の雨天で、御池登りを断念したが、時間があるので先年の自然に對する感激が買ひ被つてはしまいか、もう一度たしかめて見やうと思つて、下栗から五十町一里の大野へ入つて見た。空は一面に曇つてゐて、ともすれば風に吹き捲られてバタ／＼と時雨する様な陰鬱な日であつた。私は先年泊つた家を搜したが、それは大野のはづれ八丁坂へかゝろうとする處の崖の上の古い家であつた。私はまたその家の前方に立つて、靜かに遠山の奥を顧みた。

直く谷向ふに大伽藍の様に聳えてゐる、加々森

山の巨大な姿から始まつた、大濤の様な山のうねりは、涯しなく上へ／＼と重なり合ひ、その山々の天上は密密に閉されて、聖、上河内の大岳もその頂を見せなかつたが、高く悠々たる連山の抑揚は、遠く遙かに山峽を繞つてゐる遠山川の深谿は、矢張會遊の時と同じ様な深奥幽遠の境に、私の心を導いた。私は下流を顧みた。加々森から續く池口の尾根の先に、青崩から續いてゐる熊伏山が、大手を擴げて遠山川の流域へその大兵を乗り出してゐる。その先に、まだ／＼、天龍の谷迄幾つもの隆起を連ねて、そして遙かに三河北設樂の山々、美濃境の翠岱まで、遠く遮ぎるものなく、一眸のもとに集まつて来る。遠い山、深い谷、私には遠山の里と云ふこの附近が又なくなつかしい處となつた。

『山が遠いで遠山だ』と和田の小兒達は語つてゐた。

池口から加々森山手前まで

秋葉街道を遠州の最奥の山村奥山村へ出た私は、杉材の多く出る、茶を盛んに栽培してゐる、

そして山奥の割によく開墾されてゐる、遠州水窪ミヤクサから、水窪川を溯つて、辰ノ戸まで登り、それから緩漫な路を青崩峠へ出た。五月雨の雲濃く、振りさけ見るとき雪の山は殆ど眺められなかつた。

山稜から谷底まで、一面に薙ぎ落ちてゐる灰青色の大崩れの右手を、峻急な崩れの上を道は谷に向つて付けられてゐる。然し馬の通ふ程の往還なので、そう悪い筈はない。

あゝもう信州路だなどとは思つた。そして何となく荒寥とした大自然が私の身邊に迫つて來るのを否めなかつた。少し降ると闊葉樹が茂つて、處々に燒畑が見える。この附近では峠一つを境に、茶は殆ど出來ない、氣のせいに行き交ふ人々の身装まで、信州の奥らしい感じを起さしめる。

青崩れを源としてゐる小嵐澤コナシは、水窪川ミヤクサとは似てもつかぬ程廣闊な流域と、幾つかの薙を見させて悠大な熊伏山の裾を、水嵩は少なかつたが、可なりかなりの激湍となつて流れてゐた。

幾度も折れ曲つてゐる、急な峠路を降りきり、一曲りすると、坂路の突當りの人家の前に出た、

梅の木と云ふ、青崩峠から始めての小さな部落である。旅囊を下ろして、上り框に休んで茶を飲んでゐると、爐邊には宿の老人夫婦と土地の者らしいのが一人世間話をしてゐた。私の姿を見て土地のものらしいのが聲をかけた。『旦那今時分どこへ行くのですか』と、私は自分が八重河内から池口岳へ登り、加々森山光岳の方へ行く豫定であることを話すと、それは案内なしではとても行けぬと云ふ、八重河内か和田で人を探して見るつもりであると云ふと、宿の爺が山へ行くならばこの人が和田では一番詳しいので、是非頼んで連れて行くがよいと云ふ、そしてその土地の者に切に同行を勧めてゐた。

和田の高根鶴平（四四）、私は偶然知り合ひになつて、非常に便利を得たのを喜んだ。そして光岳の方までの案内を頼むことにして、山の様子を聞くとき中々詳しい。兎に角山稜通し池口岳から赤石岳までではよく知つてゐる。去年（大正十二年）の夏、遠山川を溯つて、聖岳を極めたと云ふてゐた。私とその前々年、聖岳から遠山川へ始めて下つて

見たと云ふたら、舊知を得た様に喜んでゐた。

私はそれから鶴平と連れ立つて、八重河内の部落を通り、和田へ泊り、雨の爲一日滞在して、その翌日池口へ向つた。初めの豫定では八重河内から梶谷澤を溯つて、池口岳へ上るつもりであつたが、これは谷も長いし道も悪く、甚だ損だと云はれたので、池口の部落から遠山本澤と池口の澤との間に出てゐる尾根を上つて行くことにした。

大正十三年六月十五日。夜來の雨が上つて、天氣がよさそうなので、鶴平を促して、午前七時半此の和田を出た。和田から池口迄は二里弱で、道は中々好い。池口近くになると急な登りになるが、中根や下栗へ登る程ではない。池口は和田村で一番富裕な處だと云ふ丈に何となく整つてゐる。池口の澤がこの部落の直ぐ下手で池になつてゐたのが、何時頃か缺けて川となり、今でもその池の落口らしい處がつゞまつて、池の跡に水田が作られてゐる。池口へ登る時分から満目悉く栗の新緑林で、池口を中心として殆ど栗のみの林と云ふてもよい位である。

最奥の人家で一休みして、午前十時半頃に山道を登る。暫く行くと追々見晴しがよくなる、池口の澤を隔てゝその奥の方に、眞黒な針葉樹に蔽はれてゐる鷄冠山と池口岳が並んでゐる。遠山の谷向ふには下栗の三角點の上に御池山が大きな頭を出してゐる。御池らしい處が一段低く黒きあざの様になつて、その上の大きな頂が御池山の頂上で、遠山川へ乗り出してゐるので展望はさぞよいだらうと思つた。

栗がなくなり檜や山毛櫸、七葉樹などが多くなると、追々深山の色調を帯びて、素的に氣持がよくなつて來た。途中處々檜の木を組んでは椎茸を作つてゐる。朴木に付いてゐる椎茸やキクラゲなどを採りながら登つて行く内、路傍の山毛櫸？の太木の下に形ばかりの山の神の祠がある。丁度午になるのでその清水を掬んで中食を使ふ。これから先には谷へ降らなければ水は得られない。ここまでは村の女等も山仕事に來ると云ふ、池口から約一時間の行程である。

山の神の上から路は狭く急になる。それでもま

だ二時間行程は大して藪はない。なだらかな隆起を上へ上へと行く内、山毛櫨の原木が六七本立つてゐる鞍部へ出た、これから路がかすかになり、藪の中を切り明けを目當に尾根通しに行く。樫を伐り出した道が山側に付いてゐるのを歸途に見出したが、その路をとる方が遙かに樂であつた。又一時間ばかり登ると小さな寂しい鞍部へ出た。

藪は益々酷くなつてくる、白檜や榊の若木に石楠ドウダンのヒネクレ者が交錯してゐるので、それを押し分けて行くのに可なりの努力を要する。どこかで藪の間から、赤石岳の午後の日に輝く壯麗な姿を垣間見たが、藪から藪へと身體を沒して行くのでそれも瞬間の光耀に過ぎなかつた。

午後三時頃に池口の澤の行き詰りに近い所までこぎつけたが、そこは一面の大きな薙になつてゐた。池口の黒薙、その上で私等は腰を下した。薙の向ふに鶏冠山と池口岳が聳えてゐる。私は黒薙を見てゐると鶴平は、こう云ふ處にはニク（羚羊）の一匹や二匹はゐる筈だがと、戯談を云ひながら谷の方を覗いてゐたが、ダシメケに大きな聲を揚

げて先方を指し示した。成程薙の中程の巨岩の上に白檜か何かの矮樹の横から、それらしい頭が見えた。石をとつては幾度も抛げつけると、のそ／＼と歩き出したが、私等を見付けると崩の上を暫くの間走り上り、又岩の上へ立つて、キョトンと此方を眺めてゐた。

東方に聳えてゐる一八三七、五米突の大隆起の左横を搦んで、その後ろの鞍部へ出たのは、まう午後四時であつた。藪の中を行く中バラ／＼と雨が／＼つて來た。北方を顧みると空が大分あやしくなつたので、私は困つたなと思つたが、尙先方の隆起に向つて登つて行く内、もう五里峠（小川路峠）續きの山脈の上へは眞黒な雲が潮の如く押し寄せて來た。それがすばらしい速度で右手の方へ延び、熊伏山の上までかゝると、雷鳴が始まつた。空を劈く電光と共に雷鳴一聲二聲と力を増して來る、大粒の雨が子指大の雹に變る時分には、目もあいてゐられない程強く身體にたゞきつけるので、二人は山稜から少し下つた處の僅かの窪にうづくまつた。全く蔽遮物がないので雹は肩と云は

ず、膝と云はず、少しの間に一寸近くも重なりあつた。先刻から咽喉がかわいてゐたので、私はそれをつまんで口へ入れた。著しく大氣が冷えて來たので、身體の顫えがとまらない、齒が自然にがた鳴る。約一時間の間、遂々夕立に射すくめられて、立つことも出來ず、窪の中で二人は話しながら無駄に過してしまつた。夕立が大井川の方へ去つたので、立ち上つて先方へ向つたが、衣服は大分濡れてゐるので、身體は中々温かにならない。そればかりではない、先刻の雨電で藪一面が濡れてゐるので、前進する氣にはなれない、鶴平も同じ様を考へて、今夜はこの下へ降つて水のある處で泊り、明日早く出かけることにしやうと、谷に向つて約二十分程降り、水のある處へ出た。随分悪い夜營地だが、風があまり當らないのに焚物が多いので、今夜の泊りの仕度をした。こゝは加々森山下の加々良澤の一つ手前のダイリケンと云ふ澤で、この下手にショウリケンと云ふ澤がある。

夕立が歇んでも空はなか／＼晴れさうもない。眞夜中頃樹の間から星が見えたこともあつたが、

概して曇り勝ちで、時々濃い雲が通り過ぎると、雨がばら／＼と寝囊の上へ落ちかゝる。明方までに漸く二三時間まどろんだ、空が面白くないので何となく氣が重い。

二十六日の朝は夜明と共に仕度をして、昨日の尾根に向つた、尾根のつるは一しきり左へ大きく曲つて、又右に走つてゐる。ぬれした／＼つてゐる深叢の中を掻き分けながら、横に一隆起を廻ると、その次のとの鞍部へ出た。もうこの先は二つの隆起を越せば、直ちに池口岳へでも、加々森山へでも取り付ける位置まで來た、遠山の奥の方が自然に開けて、すぐ鼻先に悠大な加々森山が現はれた。その丸い頭が昨日の雹の爲にゴマ鹽に彩られて、右方の池口岳の頂も可なり白くなつてゐた。

今迄私の歩いて來た池口の支尾根は、曾て王子製紙會社の伐採が入つた爲、その跡が一面の榛莽になつてゐるが、赤石の主脈加々森池口の尾根へ入ると、幸ひ御料林の爲、黒木の森林に蔽はれてゐるので、そこへ入りさへすれば非常に歩きよくなると云ふ。

加々森山の大きな山脚が、緩く遠山の谷になびいてゐる、その奥は何處を見ても氷雪の世界で遠山川の王様、聖岳（西立俣山）と上河内岳（東立俣山）が殊に光彩を放つてゐる。肩幅の廣い聖の全山容は、豊饒な残雪の間からも、巨岩の山稜を露出して、谷向きは殆ど雪崖となつて、薙き落ちてゐる様に見える。上河内岳も随分立派で、残雪が縦谷を埋めて、山頂から無數に放射してゐるのが、同じ様に、谷底の方に曳かれて、その大きなピラミダルの山容は、夏ではとても想像が出来ない程美くしい。その右に茶臼岳、仁田河内の連嶺が折れ重なつて、その山頂を重く繞つてゐる黒雲の下から、朝日の閃光が氣味の悪い程樺色の光を谷に向つて投げかけてゐる。聖岳の左に兎岳の小さな頭が白雪に埋められて、可なり大きなその根張を遠山の谷に乗り出してゐる、その後ろから大澤岳と重なつて、赤石岳の胸中だけ雪の崖の様に見える。

何時の間にか四邊が暗くなつて、私等のゐる處へ濃厚な霧風が舞ひ上つて來た。急に身振ひする

程寒くなつたので、枯木を集めて焚火を始める。前方を見るときもう池口岳、加々森山の頂は霧雲に蔽はれてしまつた。今迄赤石の頂きに冠さつてゐた、恐ろしい横雲が、簇々延び上つて、聖兎の頭を抹殺して、重い雲の幕は遠山川の谷に向つて、舒々に垂れ下つて來た。

暫くの間日和を見てゐたが、どうも絶望らしい。それに私等の防寒具は甚だ手薄なので、心許なく、鶴平と相談して先進を諦め、もと來た路を池口の部落へ戻つてしまつた。

私はその日上村に泊り、翌日は強風と驟雨の中を五里峠を越して、飯田へ出て歸京の途についた。伊奈鐵道で木曾駒の雪の多いのに驚いたが、空がよく晴れ渡つて來たので、赤石山脈の方を顧みると、聖も赤石も惡澤も小河内奥仙丈も、さては白峯間の岳に到るまで、岩一つ見せない程純白の姿に變つてゐた。辰野で夕飯を認めたとき女中に聞くと、昨日はこの邊は大雷雨で、随分酷い天氣だつたと云ふ。その爲に奥山が眞白になつたのだなと思ひ合せた。山上で大雪に逢ふを免れたこと

を喜んだ私は、夕日を浴びて心憎い程照り榮えてゐる大山脈の雪の姿を思ひ浮べて、非常に残念に思つた。

餘錄

御池山は、上村からよい道がついてゐると云ふことで、夏旱魃の續いたときには、この山の御池の水を汲んで來ると、上村迄戻らない内に、雨が降つて來ることになつてゐる。下栗からは路は悪いが、下栗峠（下栗から上村へ通ずる峠）の手前の落葉松の森の中を過ぎて、炭焼山とある山稜を経て上れるそうで、下栗路は和田から、上村路は上村から、何れも日歸りの行程だと云ふことである。遠山川に深く乗り出してゐるこの山は、秋冬の候雪山を展望するのに優秀の地位を占めてゐると思ふ。

遠山附近の登山路。和田を中心として、山稜を行くものは、前記私のとつた池口の部落から加々森山の中腹、加々良澤の上で泊り、加々森、易老、仁田河内、茶臼岳などを經て、途中一泊で聖へ出られる。聖の小舎で一泊して、それから赤石岳附

近に一泊すれば、翌日は小澁へ出られる。

谷から行く登山路。遠山本澤を溯り、その源流の西澤、東澤の合に出る尾根にとりつき、聖岳へ登れる。和田から三泊で聖の頂きを極めることが出来る。それから矢張谷を本澤と分れて、北俣を上れば、その大澤から大澤岳へ出られると思ふ。北俣澤の上手の兎洞から、大尾根にとりついて、兎岳まで行くのも、随分な愉快な旅行だと思ふ。これは尾根道を行くので、展望は非常によく、殊に尾根自身が雄大なものだと思ふ。大鹿の方から奥茶臼岳を経て大澤岳に到る道が出来たと云ふことも聞いた。

遠山の谷も、近く王子製紙が又伐採に入ると云ふことである。大井川の景趣を失つた私は、遠山川の悠大な緩衝地を見出して歡喜したが、僅に數年にしてこの立派な深谷もその衣を剥がれて無慘な地肌を露はさなければならぬかと思ふと、實に悲しくなる。文明は進歩か、墮落か、私等は岐路に迷ふ。

鶴平は聖の最高點を西澤岳、三角點のある方を

聖岳と云ふたけれども、先年大野の老人から聞いた、西澤の頭である西立俣岳を聖岳。東澤の頭である東立俣岳を、上河内岳と云ふ方がよい様に、私には思はれる。

遠山には傳説も多い様であるが、それは何れ發表の機會があると思ふ。(完)

○遠山奇談に就いて

赤石嶽から信遠國境に亙る群嶺は今日でこそ山名も略ば明瞭であるが、是等の山名は何時頃出来たものか、昔は單に遠山と呼ばれ、明治以前に刊行された駿遠信諸州の地圖にも、この邊に遠山と記した大きな山を畫けるのみである。従て赤石嶽を初めこの邊の山に關する古い登山記のやうなものは、寡聞な私などは曾て聞いたこともなかつた。種々な事情から察するに頂上を究めることなどは勿論、山中餘り深くまでは獵師達も入らなかつたらしい、私は未だ聖嶽附近をば踏んだことはないが、以前から信州和田村方面から遠山川を溯つて田代へと、又遠州水窪方面から大無間山の南方に

ぬけて千頭方面に達する交通路はあつたらしいが、夫等の山中に關する古い記事の一端をも見たことがない。たゞ茲に私の藏書の内に遠山奇談と題したものがあつた。百三十年ばかり昔の寛政十年に刊行されたもので、紙數十二三枚を一冊に綴じて四卷となつて居る。赤石研究などに資すべき何等の價值もない本ではあるが、乏しい舊籍の一つとして未知の方に紹介する位のものはあらうか。

天明八年一月京都の大火に炎上した大堂再建の用材を求むるために、同年春門末である濱松の齡松寺住職が檀徒の源三郎、岩吉、善七、藤七の四人と共に半七、平五郎といふ樵夫を案内として、遠山に山入りした紀行を華誘居士(如何なる人か不詳)が記述したもので、約十年後の寛政十年四月に京都の書店錢屋利兵衛から出版されて居る。挿畫も數枚入れてあるが頗る奇怪拙劣なるものである。全篇を二十章に分ち最初に遠山略繪圖と題した鳥瞰圖が載せてある。天龍川と水窪、犬居、八重河内、和田など四五の地名の外に二十餘の山名が記してあるが、光明、秋葉、山住などの外は大

概想像に任したものでなく、現今の何山が夫に當るか殆ど比較も出来ない。當時確にさういふ山名はあつたらしく、巨材を伐り出した山としては、青崩山、梶谷山、池口山、滿澤山、上澤山、唐澤山、鹿々原山、中白山、小笠山、押澤山、伊藤山、程野山、日影尾山、利劔山、馬入渡山、西澤山、東澤山、戸中山、鹽代山、神領山、一の澤山、濁澤山、灰の澤山、詰澤山、丸畑山の二十五を挙げ、材としては槻、檜、梅、樅、鹽地、姫小松、栗などが記してある。當時としては地形地質や植物林相などを注意しなかつたらうし、又記載した所で面白く讀む人もなかつたらうから無理もないが、書名から奇談といふ程で内容も専ら山中の奇怪をのみ語つて居る。

一行は四月八日に濱松を發し二俣を経て光明山に參詣し、「はるかむかうに鳥羽湊、大船數々帆あげたるけしき」など書いて居るが、光明山頂からは決して鳥羽湊などは見えないが、今日地方人でも見えるといふて居るものがある。光明山から犬居に下り遠州七不思議で名高い京丸に立ち寄つ

て居る。この幽境は享保頃に初めて發見されたといはれてゐるが、其以前にも下流の村民が知らなかつただけで、京丸のものは時折山を下り里にも來て居たらしい。現今は周智郡氣多村の一字になつてゐる。更に犬居に戻り秋葉山に登り尾根傳ひに、勝阪の不動（秋葉神社から尾根道二里餘の北に在つて俗に秋葉の奥院といふて居る。五六年前に私が登つた時には寺に住僧も居て一宿したことがあつたが、この頃は無住といふことを聞いた。）を経て山住山（頂上に縣社山住神社がある、この山までは東海道の汽車中からも明かに望まれる。）に至り、天龍の一支流水窪川に下つて居る。この尾根道は現今は古木を一度伐り落した後へ植林して居るが、以前は随分深い森林であつたが、信州から秋葉詣の人達がかなり通つたものらしい。奇談には非常な深山の如くいふて山蛭や蛇の襲撃の恐ろしいことを説いて居る。四月十二日水窪北隣の小畑村の名主平左衛門方に宿り、こゝで食糧其他の準備を整へ諸久須（今は兩久頭）を過ぎて麻布前黒法師の山中を分けたらしい。この山中の野

宿で大さ九尺の大藁を鐵砲で撃殺したなどいふて居る。更に一の澤山に登ると檜の大樹があつたが、この木は曾て遠州の川袋伊左衛門といふものが、請負ふて伐りかけると、一天俄に晦くなつて此樹の梢から無數の提灯が飛び出し、つひに役人に上申して伐採を見合せ夫以來提灯木と呼ばれて居るといふので、一行も怖るゝ其根元を過ぎ一先づ小畑に還り、更に今度は信州街道を北進し、古來遠州地方で狼の本場として信ぜられて居た青崩峠を越へ、屏風の如く青岩幾千丈も立ちそびへ云々と誇張して居るが、現今遠州側は道幅も廣く、信州側は幾分青味を帯びたナギが山腹を荒々しく削り取り、道も多くは崩れがちの處が多いが決して險阻といふ程ではなく、昔から秋葉神社へ參詣の爲め信州人の往來するものが多かつた。十五日に島河原に宿したとあるが何處か詳かでない。翌日は梶谷山を跋涉し露宿の夜、全身二尺餘の白毛に被はれた猪大の奇獸を撃殺し、其毛皮は江戸某侯の珍藏に歸したとか。又其夜山上虚空を渡つて天狗の怪火が飛び廻つたとか、次の夜は山

男に巨材のありかを教へられたことが記してある。更に池口山を分け廻り一丈八尺長さ十三間に及ぶ槻の倒木を發見し、後に長さ九間幅四尺五寸、厚さ三尺の角物を挽いたといふ。この邊で澤山の羚羊を捕獲したが、「この獸希有なるものにて暫にても岩の上に立てば四足共に石に吸ひつき離れがたきゆへ、横になりたる岩の腹へもとりつくことあり」などいふて居るが獵師に誑されて居たと見える。茲で一端濱松へ還り、寛政元年の夏下司二人を先の七人が案内者となり小畑村に到り、諸久須より濁澤山に越ゆる間に岩吉が天狗に攫はれたのを漸く捜し當てゝ諸久須に引返し、役人は之に怖れて好加減の山入見分を濟して京都に引きあげた。(山見分などの役人を撃退するため昔はかういふ手段を講じたことが多かつた)改めて令を下し二百十餘人の樵夫人足を部署して、十一月四日から伐り出しに掛つたが、其内の東澤山に入つた組頭小左衛門の小屋場へ、蟒が現はれ、小屋の同勢十六人して漸く退治した。首は四尺程もあつて其頭骨を江戸に送つたと書いて居る。伐り

出した材木は遠山川を十三里下して天龍川に落し三十里を流して掛塚湊に着いたが前後八年を要したといふ。

この連中は實際遠山の奥深く入つた譯ではなく遠信國境の白倉山池口嶽の裾邊の谷を少し分けた位であらうと思はれるが、當時は里近い處にも森林は巨樹を藏し野獸も多かつたから、獵師樵夫も奥深く分け入る必要もなく、深山の奥は天狗魔物の棲家と信じ妄りに窺ふことすら仕なかつたもので、この書も山中の險阻なことや、奇怪極る猛獸大蛇のことを真しやかに記して居るが當時之を聞いたる讀んだりする人達は勿論、旅行した當人達も山中を餘程怖しいものと思つて居たらしいから、谷を究めて雲表の峰頂まで登つて見やうなどいふことは、到底不可能でもあり亦た凡人の爲すべきことでないと思つて居たらしい。稀に修業者などが登山することがあつても、山中の祕事は漏すべきものでないとして、話しても徒に誇張した怪奇を傳へるにすぎなかつたやうである。曾て私が大正四年に惠那山頂で同宿した神戸の兵頭巖と

名乗る老修業者と山話した時にも、羽後の朝日嶽山中の怪を聞かされたことがあつた。深山に唯獨り露宿などして居る時には、風の叫び木ずれの音や、霧の渦卷などを心理的に具體化し眞の怪事と思ひ込むこともあらう。序ながら私も廿年ばかり以前長州の佐々並から萩に通ずる一升阪といふ阪を夜半一人で降る時に怪火に襲はれ度膽をぬかれたことがあつた。(吉岡八二郎)

追記。後になつて、本會第五回大會に、齋藤菊三郎氏が享和版の本書後編なるものを出品されてゐることを知つた。

○三峠山の岩登りに就て

おことはり。本篇を草して後、私達は第二回目の岩壁登攀を大正十三年六月一日に試みた。之によつて本篇を多少補足する必要を生じたが、新たに當直す餘裕が無いので、不體裁ながら後註を附する事とした。

眺望の宏闊、岩壁の大露出、交通の便、其の他種々の特徴を以て數年來名高い三峠山の登山に、多少變つた趣を味はうと云ふには、其昔唯阿上人が一本齒の足駄で登つたと稱する權現尾根の古道、若しくは更に進んで屏風岩尾根又は其峭壁を

登攀するにある。「註二」

私は大正十二年十一月十一日及び十二日の兩日に亘つて、會員別宮貞俊氏、同岩永信雄氏と共に其の權現尾根及び屏風岩尾根（正確に言へば屏風岩東南部及び屏風岩尾根）の登攀を試みて先づ好結果を得た。但、私共は垂直的に百米もロープで珠數つなぎになつたのは始めてなので、何等權威のある記載を提供する事は出来ない。又、私にしても後に至つて種々の誤つた方法や、觀察を發見するかも知れない。然し次に示す其二日間の出来事は一部の人々にとつて有力な參考になり得る事を自信する。

十日午後九時四十分頃飯田町發の夜行で出發、十一日午前一時半大月驛下車、三十分許して電車が動き出す。小沼には三時半頃着。其れから山ランプと提燈のあかりで達磨石に向ふ。野營用具の他にロープ、ピトン、及び享樂的食料品も加つて、一番軽い私のリュックサックが凡四貫、別宮氏のが四貫三百匁、一番重い岩永氏のが大凡五貫もある重荷で、中々飛ばせない。結局達磨石直下の澤

迄二時間餘も費した。其處に荷を下ろした私達は、夜明けの光景にヤーホーを叫び乍ら、別宮氏が評議員近藤氏の店で仕入れたアルコホルのコツヘルを用ひて味噌汁を沸かす。氣温六度半。此澤からの上り口は九月一日の大地震で少しこはれて手を使はずには登れない。「註三」 七時二十分出發、之から頂上迄三十四町とある。八時、大曲、此迄の間で一回三峠山頂の見える場所がある。大曲の前後に地震の爲に道の割れた所が二三あつた。「註三」 九時馬止、すぐ次が縁結び松、九時三十分石割權現。始めて此處で岩に接する。此岩の南面は傾斜八十度。權現の附近には落葉松が一本植はつてゐて下から目標になる。「註四」 五分休憩の後出發、九時四十五分愛染明王の平、それから尾根が細まつて、針葉樹が現れて来る。やがて三峠山の岩峯を殆ど残らず眺められる所に来る。双眼鏡で仔細に檢すると、此方而は岩の層が所謂 *Rickseite* になつてゐる。一番左のフトヲに寄つた所に三角形の岸壁があり、「註五」 次が屏風岩尾根（登山道は上下の崖の間を走つてゐるのだ）

それから權現尾根、此は上の方が恐ろしく急で直線的だが、蔭に針葉樹の林があるので、昔の道は多分其裏を通るのだらうと感ずる。其右に夫婦岩の奇岩峯、此はどうしても登攀不可能に見える。屏風岩尾根は頭に近付く程なるくなつてゐて、リヌックザイテ乍ら棚が少からず見える。(註六) 二十時十分、八十八大師。安定のいゝ石像とて地震も知らぬげである。其の少し先で又、岩峯が見えた。さうして十時四十分、三峠東ノ峯の東方から出る洞穴の様な澤で第一回の中食をする。十一時五分出發、同十三分舊御長屋跡に着、丁度夫婦岩を頭上に仰ぐ所で、三段ばかりの平地に均らしてあり、水は西方權現尾根との間のくぼみ、鎧ノ岩屋の下から湧き出るもの、燃料も豊富、西と北の風は全く當らず、先づ理想的の泊り場だ。で、岩壁に近い點から言へば、屏風岩の下又は權現社の附近で泊ればいゝのだが、其處迄はほんの僅かなので、矢張御長屋跡が宜しい。天幕を張つて居ると、丁度其處に夫婦連れの一組を案内して來た保勝會の前田巖氏が來られて、好都合であつた。同氏の話

によると、第一、御舟石は地震でこはれたといふ。それから御長屋跡は保勝會が借地して小屋を建てて豫定ださうだ。(註七)

今日はトレーニングとして權現尾根に登る事に定め、ロープ其他多少の品をかついで、十二時四十分に出發する。(始めての試み故緊張味を感じる——岩永) 十分に三社權現祠、背後右に外れる道は鎧ノ岩屋の泉の湧く所に通ずる。左は屏風岩の下を通つてフトヲとの接合點から絶頂に到る登山道。私達は中央の道(正確に言へば登山本道と數間の間は同一である)を上り、右に入つて尾根の右側に出たと思ふと直ちに鎖をかけた岩に出る。其登攀が凡三間許で、細い岩尾根の木の間に通つて、一時十分御舟石の跡に達する。下から見上ると、こはれた跡は稍赤白い硬砂岩(?)の斷面を現して、根元からぼつたり折れた様だ。實に惜しい名所を一つ失つてしまつたものだが、眺望は以前とは一寸も變らない。此迄は誰もよく來る所で、道しるべにも「御舟石に到る」としてある程だ。

舊御舟石の背後は東面の傾斜四十五度に及ぶ一枚岩が尾根の線(Choke)を形成してゐる。多少の引懸りがあつて登れないでもないが、古道は岩の西側の木の間をらくに通つて、其岩を過ぎ、十數間進むと稍横に横がつた高さ二間許の岩の下に來る。私達は明日の豫習をするつもりで二十米餘のロープで私、別宮氏、岩永氏の順序で結び合ひ、少し右方の割目(?)——私も?は?です、此處を卷いたのではないかと思ふ——岩永を登つて、次に又其れよりも低い岩の棚に取り付く。だら／＼上ると右手には下からも見えた恐ろしく急な岩稜がある。然し其左手の稍奥には之よりも容易な短い掘れ溝が見えて、其が登路である様に前田氏は言つた。十米足らずの間だが、少しザク／＼してゐるので、登路としては先ず難所だ。然し窪の底には土があり、手がかりとして木も生えてゐるので、純粹の岩登りではない。登り切ると、其處は尾根の西斜面で、其部分丈地盤は崩潰し易く、稍注意を要する。が、兎に角短い間だ。其を上へ斜に抜けると、小さなナギ状の崩れを通つて、直

きに尾根に出られた。二時半。折から霧が立ちこめて、向ふの屏風岩尾根も見えない。十五分許待つてゐると、やつと晴れて方向を確め得たので、もうロープは巻いてしまつて、切開を通つて行く。五分にして三峠中ノ峯に着。なほ五分で絶頂に着。御舟石跡から凡一時間半かゝつたわけだが、休憩が多かつたので、普通なら權現から一時間以内には達する事が出来やう。前田氏の話によると嘗て一醉漢が「酔つたつて上れる」と力んで登つて行つたさうだ。其を理由とするのではないが、私達が避けた急峻な岩の山稜を目懸けるのでなければロープなしで、確かに都會の人間にも安全に歩ける。但、安全とは登山の根本原則たる力の平衡を體得した人に向つて言ふべきである。屏風岩ではなほ更さうであるが、横氏の言はれる「十米落ちても千米落ちても結果は同一である」事を、何時でも念頭に置いて、最も確實な歩みを續けるのが正しい。(註八)

言ひ忘れたが、權現尾根の上りでは、各自に履物が違つて居た。私は Phillips Military Soles と

稱するゴム底靴、別宮氏は Ring Climbers、岩永氏は草鞋を用いたが、此登りでは餘り大差は無かつた。序での事であるが、私は普通の登山道では大抵今述べた靴を使つてゐる。粗面の岩石上では思つたよりよく止る。けれど濡れた土の急斜面、及び急な草地ではリングクリンカーに叶はない。リングクリンカーは我國ではさうした場合非常に有效である。Tricouni と稱する釘は岩登りには最も適してゐるさうであるが、私は使つた事がない。最後に草鞋は確かにすぐれた履物である。谷の徒渉は勿論之に限るし、尾根に行つても、氷雪のない間なら、足の指を使ひ得る便宜から言つて、少くとも我國の岩登りに最も適當である。且、頭抜けて經濟的である。但、草鞋は一時的のものであるだけ、組織の強さ及び底面摩擦の度に最も注意を要する。又泥の多く付いたものを用ふるのは、神聖なる岩壁に對して德義上からも、又自己の安定上から言つてもほめた事ではあるまい。草鞋の缺點として考ふべきは、平常靴ばきに慣れた都會人が屢々指と爪を痛める事と、急な草山などで足

場を食ひこまし難い事とである。然しづれの履物を用ふるにせよ、體のバランスと運動のリズムを根本とする。近頃の惡傾向の一である所謂「道具立式登山」は重々罰せらるべきものである。

十一月十二日。舊御長屋跡の野營は暖かゝつたが（十一日午後八時頃の氣溫四度）、果して其日も霧の日であつた。此日の履物は全然草鞋を用ひる事とし、「註九」ゆつくりと出かけて、十五分の後、屏風岩の上り口に着く。其處は屏風岩尾根を廻つてすぐの所で、道から小高く盛土した様になつて、其際から傾斜八十度の岩壁が突立つて居る所だ。岩面は寧ろ細い丸石を堅くセメントイズしたもので、ビツケルで撃つても缺けない位だ。頭の五六尺上に稍丸い窪が一つあつて、其上二三間の所に可成廣い棚がある。枯木が一本立つてゐるので目標となる。又、道の下には寄生したかの様に一つの小尾根が伸びて、十間許先に行くと、其處も斷崖の頭になつて居る。屏風岩の眞に偉大なのは之よりも西北、不動瀧前後の所であるが、其邊は上にのしかゝつて（überhängend）、割目も大きく、

到底絶望である。只一ヶ所非常な努力を以てすれば登攀出来やうと思ふ箇所があるが、中途から上に分らない。で、私達の取つた出發點は前の登山で豫め決めて置いたものだつたが、此は誰にも氣の付く唯一の點であらう。達磨石からの登る途中屢々見える尾根の東側は、棚が多くあつても、岩層の關係から考へて難しい事であり、又實際其下に立つて見ると、如何にも寄り付けない事が分る。之に反して西面は棚も多くあるが、又コップザイテ (Kopfselte) である事が、全く私達を喜ばした。

〔註十〕

此日は約四十米のロープで私、別宮氏、岩永氏の順に結び合ふ(但、約八米を先頭に殘して其を私が肩に卷いた)。結び方は先頭と殿りは Bowline knot 中央は Bowline on a bight にした。そして別に四十米足らずの補助ロープを卷いて私が肩にかける。先づ偵察の手筈で荷は持たず、十時五分過岩にかゝり始めた。〔註十二〕足場のいゝ所から出發するので、八十度も極めて安心だ。手懸り足場は豊富ではないが、適當に接排されて、四五度

體を動かすと、丸い窪に取り付く。それから傾斜は少し緩く、七十度位となる。少し左へ斜に小さい割目を、一寸背を使つて稍廣い棚に登る。其處で第二の人を確保する。(確保、手懸り、足場等用語は多く槇氏の「山行」(大正十二年七月發行)第七章「岩登りに就て」に従つた。)第二が登り切ると、少し左へ行つて腰を下ろし、殿りを確保してゐる第二を萬一の際安全ならしむべく、綱を引き締める。かうして三人揃ふと右へ切れて、下から犬の齒の樣に見えた岩の上に登る。其岩は來て見ると、決して見上げた感じの様に上向に尖つて居るのではなかつた。然しもう其上は可成廣い奥行のある棚で、緩慢な傾斜を有するに過ぎない。此迄凡十五分かゝる。随分遅いビツチだ。〔註十二〕偕て之から上をどう登つたものか、三人は一緒になつて二三ヶ所試みて見た。棚の奥の一番左手は權現尾根で見たよりも稍短かい岩の稜と窪になつて居て難かしい。〔註十三〕中央の窪はやつて見るとどうも上り口が悪い。其處で稍右手に小藪を越えて第三の極く小さいクラックを上つて見ると、的に

してゐた其中の一尺許の岩が動くので中止し、左へへつて、上り口の悪かつた窪を一二間上つて見ると、一番高みにのしかつた岩がどうも邪魔しさうで之も安全ではない。餘程背の高い人なら割目を傳つて右寄りに上ればいゝ様に丈思はれる、〔註十四〕で、再び廣い棚に下りて、其續きの三尺幅ばかりの棚を尾根の先端に向つて數間歩み、又左手の窪を背と膝とを利用して登つたが、之も其上がよくなかつたので下りた。もう一度先へ進んで見て駄目だつたら、此等のどれかをどうか登つて見やうと相談して、水平の棚を南に進むと直きに尾根を廻つて、棚の間をすり抜けると其處から棚は消失するが左手に大分高く急であるが、針葉樹其他の灌木が多少生えてゐて物になりさうな岩の窪があつた。其下に立つて先づ木の幹に片足を支へつゝ上つて、窪の中に生えた灌木を掴み、所々岩の手懸りを求めつつ靜かに登る。此傾斜は七十六度と測る。中間より稍下、右手に相當に太い針葉樹が一本生えてゐる。其を頼りにして又窪の中を行く。上に行くとき稍急さを増して、最後の所

は狭く少し出張つて居る。さういふ所は例によつて背と膝を利用して、却つて容易に進める。この背と膝とを使ふ所は此山では其開きが六十度位である。終に十米許上の棚に出る。〔註十五〕兎も角上り口と此窪が今度の行で一番難所であつた。三人共上り切つたのが十一時五十分。正しく尾根に到達したのである。そして尾根はいづれの土地でも、より愉快な、より安全な岩登りであると言はれてゐる。此場合もさうであつた。私達は先づ左手の高さ一間許の岩を登り、普通の山の尾根登り風になつた所を右に曲り、次に又背と膝とを使つて岩の割目を上る事二回、尾根は大岩石重疊ながら大分傾斜が鈍くなる。此附近の何處だつたか正確な事は忘れたが、一ヶ所岩の質が柔くなつた所があつた。但、登攀に足場を求める様な所でも無かつたと思ふ。岩の柔くなつて居たのは最後の背と膝の終つた所ではなかつたかと思ふ、その柔い割目の上でN君がまたいで下を見た——別宮。下から見えた筈の尖り岩の右手を越えて、二つ岩とも夫婦岩とも命名しさうな岩の左側を上つて暫く進

むと、俄然尾根が三十坪許の小平地に變つてしまつた。〔註十六〕（石を目分量で水平に投げ、落ちた音の聞える時間をストップウオッチで測つた、此から高さを求めると約百二十米となる——別宮）。十二時三十分。其先は岩はあつても傾斜は益々なるく、樹木の數が急に増して來たので、最早岩登りは終つたも同然である。〔註十七〕其處でロープを卷いて各自肩にかけ、十二時五十分過出發。實は荷無しで途中迄偵察して下るつもりであつたが、案外らくに登つてしまつて絶頂も近いので、其儘行つて本道から歸る事にした。もう何處を行つても岩は安全に登れる。そして切開に入ると、頂上から遊びに下りる人々の捨てた瓶や何かが落ちてゐる。五分にして頂上着。即三峠山最高點である。此日は前日より更に空が暗くて眺望は皆無であつた。午後一時五分下山、本道を通つて一時二十五分先の上り口に着く。晚い中食を済ました後、今度はリュックサックをしょつて同一の道を登る事とする。二時出發。流石軽い乍らも荷があると滑らかには行かない。先づ第一、第二の人は後の

人の肩を失敬して安全策を取り、第三の場合には最も注意して確保する。幸ひ第三の岩永氏が少し長身なので、第二の別宮氏の引締めは此登り口と最後の背と膝の場所で極めて微かに感じた丈で濟んだ。尾根を廻りこんだ窪を上り切つたのが二時五十分、此時岩永氏は殿りである爲と、同君自慢の無類の大型リュックサックとの爲に、狭い急な、手懸り足場の少い窪では登攀の方法を多少變へねばならなかつた。初めの急場は中段から下の木の所で第二の人がしつかり引締め、最後の背と膝とを用ふる箇所では補助ロープを下ろして、リュックサックから先づ引上げたりした。其上の登りにも一度背囊を釣り上げた。組全體の背囊を最後の人の前に引上げ、各自空身で登る事は、難場なる程却つて時間と勞力の經濟となるのが普通である。然るに、此際ずつと荷を持つて背と膝や腕を側に突張る登り方を敢行したのは、導者たる私の無知から來たものであつた。其結果、別宮氏は寫眞機のビントグラスを破壊したりした。私達は更に何層倍の科學的研究を積み、實驗を経なければ

ならない。山——岩壁、氷雪、峽谷、密林等の難場多き所では、運動の敏活に伴ふ確實が第一要件である。話は横道に入つたが、兎に角荷無しの場合とは多少變つた行方をして、三時四十分例の小平地に着。其處でうで玉子、干葡萄、林檎等を食べて四時五分出發。頂上には四時十二分に着いた。此日は案外時間がかつたので、豫定の岩壁下降は中止して、本道から直ちに引返した。〔註十八〕天幕をたゝみ、御長屋跡を出發したのは既に暗い午後五時二十分である。途中三回ばかり五分乃至十分休憩をなしつゝ、七時二十五分達磨石着。此下りの下半から雨に降られる。大山祇神社に一憩、午後九時小沼着。橋本屋で入湯夜食を済まして、十一時四十分發の電車に乗り、十二時十五分大月着、それから三時四十三分の未明の汽車で東京に戻つた。〔註十九〕

終に、三峠山の岩壁は私どもの道に従へば大した危険は無いので、空の澄み切つた一日二日、觀山と共に岩登りを試みたら、確かに三峠山其者を完全に理解し得られる事を斷言して置く。但其場合、

少くとも組の内の一人は本式の岩登りに経験は無くとも、相當豊富に山の経験があり、且所謂「山の感」のすぐれた者である事を必要とする。私どもは此行が非常に愉快であつたと思出ると共に、私ども自らの幸運に幻惑されない事を希望する。

(大正十二年十二月三日 沼井鐵太郎)

〔註一〕 權現尾根、屏風岩尾根は私が便宜上付けた假名である。前者は三社權現の背後、有名な御舟石の在つた尾根で、中峠より派出するもの。後者は西峠即ち最高點の峰から派出し其南西面に屏風岩を有するものである。三峠山保勝會の前田巖氏によれば、屏風岩尾根は偶々植木とりや岩たけとり等が綱を使つて下りるさうであるが、登つた者はないといふ。因に三峠山の岩壁は悉く礫岩から成り、其殆ど全部は登攀に際して堅牢なしかも摩擦の大きいといふ好適の條件を備へて居る。

〔註二〕 然し其後保勝會で手を入れて簡單な橋が出来た。但、其は一時的のものである。

〔註三〕 此も保勝會の盡力によつてすつかりなほつてゐた。

〔註四〕 石割權現から左へ山腹を行くと蝙蝠棚と稱する地點に出る。其處は上人が庵室を結ばれた跡だといふ。行く路は大分惡場てハラバヒなどいふ所もある。又其上の方はアシダゴヤと總稱し、ずつと上ると普通の登山道が八十八大師から一寸下つて過る二つの澤になるが、之も非常に悪いといふ。

〔註五〕 三峠山の岩壁は西はフトナの東面から始まつてゐる。

其内著しいのは此の三角形(?)の岩壁で、之をフトナの見晴しと稱する。此左には又恐しく急な空瀧が見える。又右手屏風岩に最も近い所に一部分崩れを見せた垂直段狀の絶壁があるが、樹がおほつてゐるので餘り立派ではない。

序での事だが東の澤方面に北屏風岩といふのがある、高さは眞物の屏風岩程ないが宛然六曲屏風の様だといふ。

〔註六〕 私どもの取つたコースの一部分は此附近から上に行くに従ひ判然として来る。即ち屏風岩尾根の急峻になる脚部から一段上つた處が西側から水平に廻る棚で、其上は所謂「之」の式に曲線を描いて一つのテーブル狀の岩の棚に達する。此の鼻の東側の窟を私達は登つてテーブル狀の棚から先は尾根通り行つたのである。此等の様子は其直下の道からはうかいふ事は出来ない。

〔註七〕 六月の行ても小屋は未だ出来てゐなかつた。

〔註八〕 此尾根は屢々人の登るものと見えて、六月一日にも、植木取りらしいのが二人ばかり登りつゝあるのを目撃した。

〔註九〕 六月一日の登攀には私は廢物として俗に運動靴と稱して小學校の生徒などがよく履く安物のズツ裂ゴム底靴を用ひて見た。勿論其は私の足にしつくり合つたものであつた。

其結果は三峠山の礫岩に對しては甚だ有效である事を證明した。そして特に底の餘り厚くない事及び指先に隙間の少い事が極く小さな足場を利用するに最も重要である事を感じた。

〔註十〕 最近の經驗によつて、矢張此上り口が屏風岩登攀に許

される唯一の安全な關門である事を知つた。其他の所では二三どうかと思はれる部分がないでもないが、非常に巧妙な手段と最上の努力を要すると思ふ。且所謂「Belaying-pin」が存在しないのでリーダーにとつて極めて危険である。換言すれば屏風岩は垂直的に大體三部分に分ける事が出来る。其内中段と上段の境は往々九十度以上の傾角を以て全く人類の通過を不可能にする。又、下段の最下位は私達のコース及び其他の小部分を除いては、此も九十度に垂とする引懸りのない岩壁なので、絶望である。で、屏風岩登攀の成功の秘訣は、

如何にして此等の境界を切抜けるかの考慮にあるが、それには先づ尾根に最も早く取り付く方法を研究するが便利であらう。即ち私達の尾根廻りのコース、又はずつと西北に行つてフトナから西峠登山道に近い岩壁を撰ぶ事になる。けれど後者は氣分の上に於て岩登りらしい興味を缺くものと認めらる。

なほ本篇には尾根の東側が難しい事を豫想してあるが、第二回目の觀察によれば、全然不可能でないかも知れぬ。といふのは、此側面の傾斜度の平均は西側の其れよりは少いのと *backing* に頼りになりさうな木が多少生えてゐる事によるのである。又、尾根を道から直接登る事も將來に於て或は可能かも知れない。

〔註十一〕 六月一日は私、高畑良材君(會員)大塚泰亮君(會員)安藤蛟一君(帝大學生)、岩永信雄君(會員)の順でロープを結んだロープは英國山岳會證明付の六十呎のものを二

本、同じく八十吹のものを一本共につないで使つた。そして二番目と四番目が必要品を入れた小型のリュックサックを荷ひ、リーダーは補助ロープを肩にかけ、他は荷なしの輕装であつた。但、五人といふ人数が一つの組になる事は事實に於て時間の浪費を免れなかつたが、之を二人及び三人の二組にするには、未だリーダー及び副リーダーの數と質が不足であつた。又、高が百二十米位の岩山では、特に時間を節約する必要も無かつた。無理といへば之よりも夜行列車で睡眠の不足といふ事が最も無理であつた。其は特に未知のルートに對して確實性を一層減殺する。成るべくは私達の此の悪い方法を眞似されない事を希望する。

〔註十二〕 屏風岩登攀の最初の惡場 (Frightful) 即ち登山道から枯木の立つ廣い棚までのコースは多少變更する事が出来る。六月一日の二回目に私達は最初の丸い窪から左へ一間許へつゝて少々左斜に登り、棚の左端に達した。へつりの上はリーダーが二番目の肩を利用して手懸りを求める様な部分がある。正路に比して少々困難であつた。假に前回に登つた尾根廻りのコースを正路と稱する。

〔註十三〕 此のヒツチは登れそうに見えて實際には手懸り足場の配置が極めて悪い場所である。六月一日の試みて私は僅かに十尺を登つた丈で斷念した。但岩の層が明かに (selle) である事に注意を拂つて置いてよいと思ふ。此のヒツチの左隣で、枯木の棚縋きの所に、大きく口を開いた岩の窪がある、割目の角を掴んで登る氣持は好かつたが、上に行

くと足場が全然なくなつて、肩の利用も危険であつたので中止した。

〔註十四〕 此附近は細々してゐるので、詳細に述べ立てるのは愚な話だが、實は六月一日の私どもの焦點は此處にあつた。其日の二回目の試みに私は前の岩の動くクラックに登つて見た。其岩は秋の時とは違つて一寸も動かなくなつたので、其上の横の割目に私が上り、高畑君が其岩を踏んで肩を借す。私は上向になつた岩壁に添うて靜かに伸び上り、上方の丸い突起を握る様に掴み、なほ片手を以て手懸りをさぐりつゝあつた。然しどうも私自らバランスを懸念してゐた矢先である。

高畑君は不安らしい。其時確保してゐた第三以下の人々は「危い、岩が動く」と叫び出した。體重が二重にかかつた高畑君の脚下の岩だ。止むを得ず私は少し體を下ろしクラックの中の縦に挟まつた平石を強く掴みながら、岩永君の補助を要求した。變則ではあつたが、私は高畑君に動く岩を避けさせ、其體を俯つて下りる。そして皆無事に安定した後漸くほつどした。全く不安な幾秒間であつた。屏風岩の恐ろしさが理解された場面であつた。落付いてから南を眺めると大富士の裾野のアウトラインはこの岩壁と直角に交つてゐる。正に此壁は八十二度と測られた。然も私が行きつまつた所は更に角度を増してゐる。私共の肉體並に時刻の條件がよくなくなつた所爲もあるが、此處ではヒトンを打つ適當な場所は見當らなかつた。兎に角私達は屏風岩を西側から直接尾根に取り付く事に再び失敗したのである。

〔註十五〕此のビッチの登りは六月一日の二回目には各人につき一分十五秒乃至一分四十秒を要した。そして其長さは凡三十五尺許である事を認めた。

〔註十六〕尾根に達してからこの平岩の上に到る迄ビッチは三ヶ所ばかりあるが、いづれも短いもので各人の距離十米餘のロープの處理が厄介な位であつた。そして各ビッチの間には手足にからまる藪が多少もあるのは此場合ちと不快だ。然し登るにつれてフトナの原の上に白峯、赤石、駒の大山脈が残雪美々しく現はれる光景は到底普通の登山道では味はれないところのものであつた。

〔註十七〕然し六月一日の第一回の試みては、此の平岩から水平に歩みを續けて、相當に愉快な岩登りを享樂する事が出来た。前にも述べた様に屏風岩には所々長い水平の棚が走つてゐるので、正路上の便宜な點からへつては登り、へつては登りする事によつて、興味深い登攀の modification を行ふ事が出来る。

〔註十八〕屏風岩尾根登攀の正路を下降する事は容易であつた。私達は六月一日の一回目に試みたが、最後の者(私)が補助ロープを利用して下つたのは、尾根東側の三十五尺の窪全部と、最後の枯木の棚と登山道の中間邊から下部のみであつた。前の場所は樹幹に直接引懸けて下り、後の場合は岩の先端(Belastingen)に綱の輪を懸け、之にロープを通して下りた。いづれも右股にダブルロープを一巻してずらし乍ら極めて安全に下降した。但上りよりも時間は却つて多くかつ

てゐるのは當然である。六月一日には正路の上りに一時間十五分、下りに一時間五十分を要してゐる。此のレコードは普通の登山レコードと同じく或は其以上に個人的のものであつて實際優秀な三人又は二人の場合ならば恐らく半減し得るであらう。

〔註十九〕初めに註を入れる事を忘れたが、小沼で電車を下りて下幕地方面の道に入る所に今度新たに三峠山案内圖が揭示された。かういふ事がある丈に、三峠山は近隣からも都會からも登山する人数の増加した事は驚くべき程だ。そして之に對する保摩會の態度は先づ立派なものといつてよい。但、フトナの或地點にバノラマの原などといふ惡名を附したのは、命名者は誰だか知らないが、遺憾の極みだ。此は一時も早く撤回すべきである。なほ三峠山の登山道は本道以外に達磨石の下から大船澤に出て權現尾根を登りつめるものもある。餘りよく踏めてゐないさうだが、釋迦流川からフトナの側尾根道及び白絲瀧道と共に心得て置いてもよいと思ふ。又、道とは云へないが、大船澤の上で、フトナの側尾根の北に當るクワウリンホウといふ荒澤は、其右手を登れば登れるさうである。それから私どもの様な物數奇に問題にされるのは、大船澤の木條を溯つて不動瀧下に出る事、通りガ澤アシダゴヤの澤を上下する事等である。かういふ風に見る時は三峠山は容易に得難い試練の場所でもある。何度行つても飽きない山である。以上氣の付いたまゝ、三峠山の補遺として掲げた。

(大正十三年六月五日)

○雨雪の生成を何んと見る

近代人は好んで高きに登る。晴天の時は平凡だと云ふので、殊更荒れる日に登らうとする傾向がある。奇を好むではなく、自然の猛威に直面して見たいと云ふ一種自然に對するあこがれである。人間界を超越した天空から降つてくると思つてゐた雪や雨も、眼の前で其生成を見る様になつた。高山の氣象の觀測も漸次備つて來た。それに付いても人は雨雪の生成に就て一かどの注意を拂つてもよいやうなもの、まだ矢張り、大氣中の水蒸氣、凝結して水球となり、其れが空中に泛ぶことが出來ないで下降するのが雨又は雪と云ふ様を解釋で満足してゐる様であるが、雨や雪の出來るのは左様に簡單に言ひ得ないものがあるではなからまいか。雲の生成に就てはかなり研究もされ、實際上にも目撃さるゝ様であるが、雨、雪に就ては餘り簡單に片付けて、微妙な處に觸れてゐず、觸れやうともしない様に思はれてならぬ。

從來の説明は、空氣に含まるゝ無形の水蒸氣も

飽和量以上に達すれば、凝結して水球となり、有形のものとなる。之れが雲である。其の水球が空氣中に浮ぶことが出來ないで、下降する。其の時下層が氣溫高く、水蒸氣も少く、飽和に遠かつてゐる様であれば、再び蒸發して上層指して昇るが、水滴が相當大いかに又下層に至るまで飽和に近い状態であれば、下まで落ちる。之れが雨となる。即ち雨の生成には、空氣冷却して水蒸氣で飽和せられ、それが凝結し雲霧の形の小水滴となり、此の小水滴相結合して大滴となつて落下すると云ふ様に三段の順序に説明し、大粒の雨は上昇氣流などのために、動搖せらるる時は最初は大きさに大差のなかつたものも、少し大粒は小粒のものよりも氣流に運ばれにくく、同一の運動を取らぬから、水滴互に衝突し、又水滴が氣流に沿ふて、互に摩り合ひ撞合つて相結合して大滴となり、落下する。此の水滴は生成箇所よりも濕潤な氣層を通ふてくると、水球の表面へ次第に水蒸氣の凝結を來し、次第に大となり、互に衝突益々其の度を加へ大滴となり、遂に雲を離れ、遠くからは雨脚を垂れた

様に下降する。然も雨滴が充分飽和しない氣層を通る時は水滴の表面から蒸發を開始し、粒が小さくなり、地上に來ずに水蒸氣に化することがある。之れが普通の雨の説明で、彼の雷雨の大豪雨は過飽和の状態を以て説明してゐる。次に雪であるが空氣中の水蒸氣が零度以下の時徐ろに凝結し、直ちに固體の形となり、落ちて來たのは雪である。

以上は現今雨雪の生成に關する説明の概要であるが、之れだけでは如何にも物足らぬ。

零度以下に冷えきつた冬の朝に、霧のたなびくところがあるが、水も凍るやえきつた温度の時であれば水滴として浮遊せんでも早速、雪になつたらよさうなもんだがさうでもない、冬の寒い空に水滴の集りである雲として、浮んで居るものもおかしい。高層雲だけでなく、下層でも雪片、雪粉として存在しさうなものが、矢張水滴な雲として存在する。之等も常に疑問とする處である。

雲からは雨が降る。霧からは霧雨がふる。霧は、地表の附近で凝結し微細の小球を爲して、空氣中に浮遊するもので、雲と異なる所は高さの高低の

みだと説明されて居る。それでは霧からも雨らしき雨が降つてもよさうなものだが、普通雲より濃密でないせいか霧雨を降らすだけで、雨を起さない。雨を降らす様な雲は上空のみにあつて、地上近くにないことは人間生活上都合なもの、地上近くでも、温度濕氣の關係上、上空と異ならない時もあると思ふが、濃霧は生じて、層雲、亂雲は生ぜず、雲の傾分は上空に限られてる様になつて居る氣象的原因に就ては充分なる説明を與へられない様である。雲から雨が離れる間降の微妙なる處を靜穩な雨天に、高山の、地上から上がつた霧で出來た白雲帯でなく、ホントウの雨滴生成の根元である亂雲帯に突入して、雨滴生成の實況を見たいものである。單なる學說的説明だけでは、物淋しい。雨の日亂雲帯に突出せる高山に登り、亂雲の上で雨や雪の生成の順序を客觀的に眺めたものである。雨雪の生成問題に對しても、何人も會得し、安心する解決の一助としたいものである。之等は山岳會の事業としてふさはしいものはあるまいか。(山本徳三郎)

雜報

○富士登山鐵道

【甲府發電】神戸の阿部善次、山梨縣の田中董策堀内啓次其他數氏發起の富士登山鐵道敷設は、山梨靜岡兩縣に於ても實地踏査の結果、風致を害せぬ限り之を認むることに決定した。該鐵道は山梨縣五合目茶屋と靜岡縣の須走り口五合目とを連絡し、御中道を基點とし北に鳥居右側を終點とする延長一哩のケーブル鐵道で、五合目口に發動機を以て動力を起し、勾配二分の一の急勾配で、駐車場軌道共鐵筋コンクリートで覆ひを爲す筈、明年度勿々着工し、登山期迄には開通の豫定である。

○高山植物採取取締

【福島電話】最近登山者増加し、高山植物を採取する者多く、慘憺たる状態を呈して居るので、今回本會御料局上松出張所では、熟議の結果胸ヶ嶽御料地に於ける高山植物採取を嚴重に取締ることに決定し、来る二十五日から係官を派遣して之等濫採を禁じ、猶要所／＼に宣傳ビラを配附して取締に努めることゝなつた。

高山植物採取に關しては登山期前から屢々各林區署其の他に於いて警告を發し其の愛護に努めたが、割合に利目がなかつたらしく、表面處罰された者はないが、十人中八九人迄は違反して居るらしい。右につき松本小林區署は懸る。

『採集許可書を持つて居るからとて同一植物に付き三株以上採ることは嚴禁してあるが、却々それが守れないで困る、現に何しろ日本アルプス四萬町歩といふ廣大な地域の警戒などは、到底完全にすることは出来ないことであるから、登山者が登山道徳を守つて注意して呉れないければ困る。今年一番困つたのは各學校の團體登山で、引率した教師のノートの端から植物の根や葉があるのが好く見受けられたが、生徒の手前餘り小言も言はれず、教師が此やうだから生徒が濫採するのは當然の事である。斯る有様で高山の美が殺がれて行き、國立公園にもしやうとする矢先き嘆かばしい次第である云々』と。(以上二項大正十三年八月信濃毎日新聞)

○淺間山活動を始め

【小諸電話】昨年震災當時から煙りが少しも出ないとして爆發の前兆ではないかと不安に思はれて居た淺間山が茲兩三日俄に噴煙の量が増して來たが、實際を知らぬ一部世間では淺間山の火爆發などを傳へてゐる程である。淺間山登山者は年々増加の一方で、本年の如きは各宮殿下を始め毎日數百名の登山者を見、猶昨今冷氣甚だしき折柄でも登山する者を見てゐる。同山の噴火口は最近著しく底が高くなり、深さは六百五十尺乃至七百五十尺位で、火口底一帯が有り／＼見えるやうになつた、斯くの如くして此の儘休火山となつてしまふものか、それとも其堆積物が火口出するものか、何れにしても最近噴煙量の増したことは一般に警戒的注意を

拂はれてゐる。(大正十三年九月十二日)

○淺間山の大噴煙

『前橋電話』群馬縣警察部への報告に依れば、十三日午前四時より六時迄の間に淺間山噴煙甚だしく、山麓なる碓氷峠及び吾妻郡長野原町地方に降灰あり、其の量は一坪當り約二合位にて被害は少い見込みであるが、目下調査中である。(九月十四日)

『小諸電話』淺間山は最近に至り甚だしく噴煙を増し、尙夜に至れば物凄く火焰が立ちのぼるのさへ觀眺されるので、山麓の住民は又々大爆發の前兆ではあるまいかと不安にかられて居る。火口底は近年淺く埋まり噴煙さへ礫々立ちのぼらず、本年八月中各宮殿下御登山遊ばされた當時は、只小里の火口底一切が一目に眺められ、望遠鏡にて見る時は熔岩のボロ／＼したのが見へたが火は見へず、至極穩かてあつたのが最近火焰の立ちのぼるところを見れば、同山も大いに活動して來たものと思はれる。(九月十九日)

八月下旬より時々噴煙を見九月に到つて急に活動し始めた淺間山を技手市川徳一同行にて實地調査を行つて、二十二日歸長した西澤長野測候所長は次の如く報告した。

『鳴響は九合目のあたりから微かに聞へた。十二、十三日の降灰は九合目の三分の一以上から見え頂上には三寸乃至五寸大の溶岩が所々に轉がつて居た。火口内は今回の噴煙で從來の二個所の小さな窪所を中心として底内の三分の一の面積は圓形の大窪所を作つて居た。平坦であつた砂原も中央の窪所を中心に溶岩塊と灰砂で急傾斜して四方の斷崖迄達して居た。又北西方に

溶岩が重なり合つて半圓を作つて居た。それから中央には灼熱した溶岩が二十ヶ所も露出して居るので、夜間などは赤光が空へ映るので麓で見ると丁度火の柱が立つた様に見える。小諸あたりで火の柱を見たといふのもつまりそれを見たのである。一體に今回の噴煙噴火は活火山の常態で活動の中心地は山の淺い所に殘したガスが爆發した爲である。大爆發の前兆としては又活動期に入る前提としては觀測所の微動計に十二日十三日の噴煙にも更に感じない筈がない。然しまだ露出溶岩がある以上今後も噴火はあるかも知れぬ』と。(九月二十六日。以上信濃毎日新聞)

○第三回エヴェレスト山探檢概畧

千九百二十一年に初めて探檢を試みられた世界の最高峰エヴェレスト山は、同年に於ける踏査の結果、比較的樂に登攀し得る見込がついたので、翌二十二年には選抜したクライミング・パーティーを送つて、二度に亘つて登攀を決定せしめたが、終に絶嶺に達することは出来なかつた。それで昨二十四年更に第三次の登攀隊が送られたのであつた。

一行は第二回の時と同じくブルース將軍が總指揮官となつて、三月二十六日にダーズリンを出發した。そして途中ブルース將軍は古いマラリヤ熱の再發した爲に、ノートン大佐に指揮權を譲つて歸英するの止むなきに至るなどのことが起つたにも拘らず、二年間に亘る貴重な經驗の賜で非常に周到な準備と注意とを怠らなかつたお蔭からして、ロンパ氷河のベース・キャンプに到着したの

は、四月の廿九日であつた。即ち二十二年の時と出發の日取りは同じであつたが、ベースキャンプに着いたのは一日早かつたのである。これで天候と雪や氷河面の状態さへよければ、矢張り前年と同じやうに五月中旬には、エヴェレスト山の登りに取り懸れたのである。然るに此年は氣候が餘り順調とは申し難く、寒氣が殊に甚しい。それで先年と同じ様に大體

ベースキャンプ 一六、五〇〇呎

第一キャンプ

一七、八〇〇呎（ロンプ氷河と東ロンプ氷

河との合流點）

第二キャンプ

一九、八〇〇呎（東ロンプ氷河に湧りたる

半途の地點）

第三キャンプ

二一、〇〇〇呎（東ロンプ氷河の源頭でチ

ャンツエ直下の雪田）

を作り、同時に糧食其他の必需品を搬入して、五月十七日に頂上に向つて第一回の登攀を行ふ計畫を立て、四月三十日から行動を起したのであつたが、ベースキャンプで七十五人の人夫が夜中逃走してしまつたり、寒さが華氏の氷點下二十度から三十九度までも下つたり、吹雪が幾日も續いたりして、其結果人夫に病人や怪我人が出来、好天氣の日が其間にないてもなかつたけれども、五月中旬の初めに漸く第三キャンプを作つたのみで、一旦ベースキャンプに引揚ぐることを餘儀なくされた。

五日十五日に人夫達はロンプ寺院に詣で、病氣の快癒した住持の聖僧から祝福を受けた。これが非常に効を奏して、人夫の氣を引き立て、此時のベースキャンプの光景は、野洞の羊の群が草

を喰みながら天幕に來たやうであつたといふ。斯くて十九日には再び第三キャンプを占め、翌二十日にはノートン、マロリー、ソマーヴェル及オーデルの四人がチャン・ラの道を踏査する爲に第三キャンプを出發した。この二千呎に近き氷壁を登つてチャン・ラに達することがエヴェレスト登攀の道程中最も危険なる仕事であつて、一たびチャン・ラ（ノース・シル）に達した以上は、ロープの必要はないといはれてゐるのである。丁度スロープの直下でソマーヴェルは工合が悪いので引返した。前夜熟を計つたら華氏の百四度であつたといふ。マロリーも悪い咳に苦しめられたが我慢して通した。それでも一行は第四キャンプに通ずる新しい路を作ることに成功した。選ばれたキャンプの位置は雪崩から安全であり、高さ百五十呎の氷のチムニーを除けば、路も満足であるといふてよろしい。

これで翌日に第四キャンプは作られたが、どうも天候が思はしくなく、非常に好晴な時であつて、人夫などが立ち休みしながら、何一つ隠れる隙もなく露れた山の肌を眺めて、造作なく登れさうではないかなどと話し合ふやうなことがあつても、直ぐ吹雪が起るので、必需品の運搬に骨の折れること甚しい。又或夜（五月廿二日）などは寒さが華氏の氷點下五十六度に下つたことさへある。これはエヴェレストの探検が始まつて以來の寒さの記録であるさうな。其外にも不慮の出来事があつた。それは五月二十三日の午後チャン・ラから下る際、鞍部の頂上の急斜面を横斷中、四人の人夫が俄に恐怖にとらはれて、其場に立ちすくんでしまつたことである。小止みなく雪はふるし、暗くはなるし、どうにも手の付けや

うがないので仕方なく其儘残し置き、翌日辛くも無事に救ふことを得たが、一人は兩手に甚しき凍傷を受け、他の二人も足や手の指に多少の凍傷を起してゐた。後になつて人夫達のいふには、其夜彼等は女神の住居(エヴェレスト山)を守る番犬の鋭い吠聲を明瞭に聴取したとのことである。かく迷信深い彼等が危険な位置で一夜を明したのであるから、いつ心が顫動して真逆さまに墜落しないものでもない。救助隊の心配と骨折とは容易でなかつたことが推察される。斯様な有様だつたので復もや退却と決し、クライマースは第一キャンプと第二キャンプとへ分宿し、二十七日に第一キャンプに集つて今後の方針を議した。そして二日の後にそれが決定した。

最初の計畫を一言にしていふと、二人から成る二組の登山者を、一組は酸素を持つて二萬六千五百呎のキャンプから、一組は持たずに二萬七千三百呎のキャンプから、同日に頂上に向つて出發させる。この二組は各自獨立して行動するものであるが、必要に應じて互に援助することは勿論である。そして失敗した場合は、残りの役に立つ登山者によりて適宜に同じ行程を繰返すことであつた、然し強健な、可なり高い所まで荷を背負ひ上げやうと想はれる人夫が僅に十五人しか残つて居ないことになつて見れば、これに何等かの修正を加へなければならぬ。それで新計畫では、滿場一致で、酸素に手頼らずに、引續く好晴の日にチャン・ラを出発點として、連れて幾度も山に當つて見る、そして一度の登山者は、支度と人夫とを必要の最小限度に止めた二人とすることを決議した。

酸素を見限つたり、一組を二人として登山せしむることにした理由は、次のやうな考へからである。

酸素に關しては、第一に必要な數だけを運び上げる人夫も時(何時)モン・スーンが来るかも知れないので、も充分でなかつたこと、第二にオーデルとブルース(酸素吸入の試験に關しては唯一の二人者)の意見が、其效果に就て悲觀してゐたからである。

一組を二人としたのは、第一に役に立つ登山者は七人しか残つてゐないから、三人を一組とする山にぶつかるのは二組に減じてしまふ上に、之を相當に補助する準備は殆ど不可能である。第二に三人とすると、支度や食料品の外に餘分の天幕を携へなければならぬ。第三に二人ならば三人の場合よりも行動が敏活に出来る。尚ほこれと同時にチャン・ラから上は、エヴェレスト全山も樂な岩山であることを考慮に入れることを忘れてはならぬ。

斯くて決定した組合せは、第一にマロリーとブルース、第二にノートンとソマーヴェルの四氏で、オーデルとアーヴィンは第四キャンプ、ハザードは第三キャンプに在りて補助を與ふることになつた。但し後の三者は第三の登山組を作る豫備たることは言ふ迄もない。

六月一日にマロリーとブルースは、既にオーデルとアーヴィンが造つたチャン・ラの第四キャンプを出發した。ノートンとソマーヴェルは代つて第四キャンプに一夜を明した。六月二日も上天氣なので、ノートンとソマーヴェルは二十封度弱の荷物を持つた六人の人夫を従へて、六時三十分にチャン・ラを出發した。遮蔽物のない尾根に出た時の西風の寒さは非常なもので、初霜に遭つたやう

リヤのやうに體がいぢけてしまつたさうである。途は扁平な石灰石の岩の上を通じ、凍て付いた岩層の堆積などもあり、可なり急傾斜でもあるが、全く困難も危険もない。何時間か登るとマロリーとブルースの二人が人夫を連れて下つて来るのに遇つた。譯を聞いて見ると極めて簡單だ、つまり前日の風が恐ろしく寒かつたので、人夫は皆懐ひ上つてしまつて、如何しても其日の登高を背じないのであるといふ。其上ブルースは途中で弱つた人夫の荷を自身背負つたりした爲心臓をいためて、第三の試みに加はることが出来ず、それでマロリーはアーヴィンを伴ふことになつたのである。

第一の組が失敗したので、第二の組では人夫を四人に減じなければならなくなつた、そして一人は豫備として荷を持たずに登らせた。其夜は二萬五千三百呎の第五キャンプに、翌三日の夜は二萬六千七百呎の第六キャンプに過したが、兩夜とも可なりよく眠られたさうである。四日の日も天氣は理想的ではあつたが、酸素の稀薄といふことはこんな好天氣にも拘らず充分妨げとなつて、歩行は極めて遅々たるものであつた。出發は午前六時四十分、人夫はそこから直に下山させた。二萬八千餘呎の地點に達したのは正午十二時。前から喉をいためてゐたソマーウエルは、此處で前進不可能を申し出したので、ノートン一人更に登攀を續けたが、一時間懸つて漸く八十呎を上つたのみので、登行を中止し、午後二時ソマーウエルと一緒に、下山の途に就き、午後九時三十分、チャン・ラの上まで出迎へに來たオーデルとマロリーの二人にまもられて第四キャンプに歸着した。其時到達した高さは約二萬八千三百三十呎であつたといふ。然し其處から瞰下した眺めは、

まるで飛行機の上から下界を見るやうで、山はいづれも輪廓の美を失ひ、甚だしく失望したとノートンはいふてゐる。

六月六日に第三の試みがマロリーとアーヴィンとに依りて行はれた。この度はマロリーの考で酸素を携帯することになつた。二人は午前八時四十分五人の人夫を連れてチャン・ラを出立した。翌七日二人を補助する爲にオーデルは一人の人夫を連れて第五キャンプへと向つたが、其處に着くと間もなくマロリーの連れて行つた四人の人夫が第六キャンプから下つて來て、マロリーの傳言を齎らした。夫に據ると、二萬七千呎までは少ししか酸素を用ゐなかつた、明日の天氣も登高にとつて有望である、唯氣の毒なことは料理ストーヴを第五キャンプを出るとすぐ山の斜面から落してしまつた（このことはオーデルが晩も翌朝も冷い食事をとらなければならぬことを示してゐる。）といふのである。オーデルの連れた人夫は山僻ひに苦しんでゐるので、四人の人夫に同行させてチャン・ラに下らせてしまつた。八日の朝は晴れてゐて、ひどく寒いといふこともなかつたが、間もなく霧が卷いて來て、時々突や小雪の襲來を蒙つた、尤も頭の上は明るいので、高い所にゐる筈のマロリーとアーヴィンは、オーデルよりも良好な狀態の下にあつたに相違ないと思はれた。

丁度二萬五千五百呎の附近でオーデルは化石を含む石灰岩の帯に行き當つて喜んだ。エヴェレスト山の下部は數種の片麻岩から成つてゐるが、上部の大半は石灰岩で構成せられ、こゝやかしこに花崗岩の進入を見るが其量は比較的に少ない。二萬六千呎の附近で百呎許りの崩崖を攀ちて其頂上に達した時である。頭上の霧

が不意に破れて、エヴェレストの峯頭と之に續く東北の山稜とが露れた、そして最後のヒラミッドの下に當る山稜上の一階段に動いてゐる小さなものがオーデルの目に映じた。第二のものが後から跟いて行く、第一のものは階段の頂上に攀ち登つた。其處は約二萬八千二百三十呎の高さである。オーデルが瞬もせず之に見入つてゐると、雲は再び閉ぢて第二のものが第一のものと一緒になつたことを實地に確められなかつた。時は午後十二時五十分で、マロリーの豫定では遅くも午前十時には其邊に登つてゐる筈なのであつた。二人はその遅れた時を取り返さうとして足早に行動してゐるやうに見えた。網を用ゐてゐたか否かは明かでない、寧ろ用ゐてゐなかつたらしい、兎に角二人の豫定より遅れたことに就ては、新雪の深かつたことや、酸素吸入器の入手など、種々の原因があつたのであらう。

午後二時オーデルが第六キャンプに着くと、まづ激しい方の吹雪が起つて風力も加はつて來た。少憩して後オーデルは、マロリーが天候に妨げられて途中より引返した場合、此キャンプの位置は隠れた所にあるので見付けにくいから、頂上の方へ二百呎許登つて、オーホーを叫んだり口笛を吹いたりした。一時間許待つても音沙汰がないので天幕に引返した。此時二時間程続いた暴風雪は歇み、山の北面は日光に浴したが、然し二人の姿は見えない。第六キャンプの天幕は二人しか泊れない小さなもので、若しマロリーとアーヴィンの歸つた時に困るから、四時三十分に出發して下山し、第五キャンプからは附近の雪の上を滑り下つた、六時四十五分チャン・ラの幕營に歸着した。

其夜は一同でマロリーとアーヴィンが或は歸ることあるかと注意し、翌九日の朝双眼鏡にて第五第六キャンプの小天幕を窺ひしも、動いて居るものとは見られなかつた。それで正午にオーデルは二人の入夫を伴つて第五キャンプに至り、翌日獨りて酸素を吸入しながら登高を續け、最早第六キャンプまで一時間程の所まで登つた時、一本のシリンドラーから程よき量を用ゐつゝあつた酸素も、餘りお蔭を蒙らぬやうに思つたので、スウツチを止めたが、その爲に何の影響をも受けなかつたといふ。第六キャンプに達して見ると、二日前に残した時と何の變りもない。吸入器を投げ出して搜索に出懸けて見たものゝ、この廣い山の上では見付るものも少ないので、力なくも下山の途に着き、チャン・ラに歸つて見ると、ノートンから早く引揚げよといふ注意があつたので、翌日一同を纏めて第二キャンプに歸り、六月十二日盡くベース・キャンプに引揚げた。

斯様にして第三次の登攀は終つた。マロリーとアーヴィンの二人は、絶頂に達したのだらうか、これは誰れにも永久に解き難き謎であるが、オーデル氏は種々推論して山頂に達したに相違ないと言ふてゐる、そしてマロリー程のものが萬一にも足を失つて滑り落ちるなどいふことは無い筈だし、アーヴィンとても經驗こそマロリーより少ないが、氷にも岩にも適應して安全に行動し得ることを各所で示してゐる。酸素吸入器は勿論邪魔には相違ないが、然し斯様な一對が滑り落ちる―特別な技術を要するでもない樂な登りて―だらうか。又酸素吸入器に故障が起つたとしても、それが爲に歸れなくなるとは信じられない。斯く論じ來つて見ると、

マロリーとアーヴィンが山上不歸の客となつたのは、下山の途中日が暮れて寒さの爲にさめざる眠に陥つたものと思はれる。勿論マロリーは決して冒險はしないと云ふてゐたが、斯くも大きな山と取組つて、素派らしい勝利が手の内にある場合、嵐が吹かうが又は暗と競走しやうが、誰が空しく退却されやうか。とはオールド氏の言ふ所である。

エヴェレストは成程比較的樂に登れる山であるが、高さの點でさう容易くは頂上を明け渡さない。聞く所に依れば来る千九百二十六年に第四次の探險隊を送るさうである。其時オールド氏が再び一行に加はるものとすれば、或は同氏によりてエヴェレストの絶巔は踏まれるのではあるまいか。(木暮)

〇山岳圖書紹介

〇山のしづく

別所梅之助著

「霧の王國」以後の紀行文を集めて、此の小冊子を編みました。あれに收めた山の旅も、むづかしからぬ旅でしたが、これは更に樂な旅の日記に過ぎません。と著者の斷はられてゐる通り、本書から峻しい山や深い谷の記事を探し出さうとする人は失望するであらう。されど自然に對する著者の率直な飾りのない主観は、著者のいはれる如く「作者のおもはぬにも關らず、心にひびく」人が多いに相違ないと信ずる。私はしかし世に既に定評がある著者の文に就て、蛇足を加へることは止め、其目次の一斑を紹介することにします。

相模の大山―明神岳の北面―裾野の雨に―冬の筑紫路―山陰紀行―筑波嶺―武蔵の御嶽山―甲斐路―霧積川のもとへ―月夜の淺間―輕井澤より―中房川から梓川へ―秋の那須―那須の粉雪―冬の車窓―登山について―富士のつたへと富士行者と―山の聲。以上は四十餘項の目次中から、山に關係の深いものを選び出したに過ぎないもので、尙ほ他に面白い紀行の多くが残されてゐることは言ふ迄もない。これ等の中へ私は殊に「山の聲」を飽かず讀んだ。

「いな、人すらしばし林を燒き、木を伐りて、山の一部に山崩を起させる。或は水力電氣を起すとして、或は道をつくるとして、山の裾に、山の腰に、山の胸に、山の肩に、いさゝかの傷をおはせる。そして自然を征服したと誇る。

蚤はその劍をもて、蚊はその鋒をもて、よく人をさす。蚤や、蚊や、よく人を征服したりといへようか。自然もし靈あらば、人の蚊になやむが如く、人になやまう、されど人が自然を制すとは、やゝ口廣い口上ではなからうか」

誠に小さな人間は、小さきが故にのみ大木の梢に攀ち上つた猿のやうに威張りたがるのであらう。尙ほ山田應水氏の撮影に係る九葉の寫眞と大武山の寫眞とが巻頭を飾つてゐる。四六判二百九十二頁。布製。定價二圓參拾錢。榮隆社發行。

〇登高行 第五年 慶應義塾山岳部

菊列假綴にて本文三百六十三頁、挿畫十二枚。十週年記念號であるが、この充實した内容を見ては、編輯者の勞を想はずにはゐ

られない。三田君の潤澤の岩小舎を中心としての穂高連峰、大島及青木二君の穂高スキー登山、大島君の北海道の夏の山、四川君の冬の蔵王、漆山君の磐梯山から吾妻へのスキーの旅、中條君の銀岳尾根傳ひ、佐藤君の小槍などは、私の息もつかず讀了したものであるが、其他楨(弘)田畑二君の春の燕と大天井、今岡君の五月の駒ヶ岳、大島君の潤澤の岩小屋のある夜のこと、相内君の白峯三山より隠見を経て赤石・石室まで、田中君の赤石岳より遠山川へ、横君の冬季登山の或る危険に就て、杉田君の平ヶ岳より日光へ、大島君の雪崩の智識についての一奇典及單獨登山について一言、大賀君の前穂高北尾根、青木君の屏風岩登攀、波木井君の銀山平から尾瀬へ、岡本君の五月の飯豊山等がある。其等の中の幾つかは内容に就て記したいと思ふたのであるが、今は單に項目を紹介するだけに止めて置かなければならぬのは遺憾である。挿畫は寫眞としては立派なものであるが、山の説明としては稍所謂藝術寫眞の域に立ち入つた感があるのは、私の好む所に偏する僻目であると寛恕されたい。終りに四十數頁の年報と挿畫の説明が添えてある。實價二圓五十錢。(以上二項未暮)

○會員通信

△本月七日また／＼三峠山に行き、今度は大船澤を溯り、三度屏風岩に登りて白絲瀧に下り候。此様子は近日岩永君が大船澤の支流を探るを待つて報告仕るべく候。

御坂山塊の文中二〇頁十二行目繼續的は斷續的の誤り、三十四頁一行目待つては持つての誤りに付御訂正願上候。尚、末尾に最

近に至り、三峠山より巢鷹山、八丁峠、御坂峠、黒岳、大石峠、節刀ヶ岳、十二ヶ岳、鬼ヶ岳を連る尾根上に通路開かれ候」ことを附記下され度候。(大正十三年九月十日沼井鐵太郎)

△拜啓廿二日夜行にて山口成一氏と同行三瀬へ参り、將監峠に上り候。この邊一帶無數に林道ひらかれ勢からず面喰ひ申候。當初は唐松尾より井戸澤小舎へ泊る豫定の處、道を發見せず止むなく峠へ出てしも井戸澤の小舎なく、牛王院より水呑場の小屋ありしも色々の都合有之また三瀬へ下り、翌朝快晴に乗じ再び峠に上り候。三瀬より峠へは三道ある様子にて普通は最も東側を登り龍喰岳近く鞍部へいづる林道を上るらしく、舊道は(七ツ石を經るもの)途中より左へ折れ居り候。第一日は更に西側の尾根傳ひの上り候も之も中々よろしく一時間半なれば十分に候。要するにどの道を行くもよろしく途中標木も有之候。龍喰へは細徑らしきものあり、秩父側は霧の爲め眺望なく、南の方は相當見え候。豫定は大洞から大菩薩へ出るつもりなりしも、小生のみ即日歸京致し候、東京市の植林と共にこの邊の山々は大部分様子變りたる様子に候。山は既に秋色を帯びて龍バミより峠の疎林を下りて山口氏と歡喜致候。(九月廿五日 戸澤英一)

△小生三日間の小閑を得、秩父東澤魚止よりホラ貝を見んと天科の雨宮磯一を伴ひ入り込みましたが、東澤も魚止ホラ貝間は最も惡場にて、魚止の上にて重箱淵、箱淵などいふ所あり、ロープの必要がありません。ホラ貝は思つてゐたよりも惡く、全く一枚岩ですから如何することも出来ませんでした、ロープを用ゐて横へつりをして中に下つて見、又右岸をまいてはロープで谷に下

つて、四五回斯ることを繰り返し、ホラ貝を通るに一日を要し、翌日は鷲冠山に登らうと思ひましたが、雨の爲に阻まれ、鷲冠谷を少し歩いて歸つて來ました。此邊の紅葉は月末頃が見頃かと思はれます。(十月廿日 岩永信雄)

△拜啓する十月廿日夜行にて東京出發、鹽山にて藤島敏男君と落合同行四人にて釜澤より甲武信岳へ参り申候。廣瀬に十二時半。五時近くに東澤小舎へ泊り候。焚火の加減が大へん淺きよく、翌日は薄陽のさす位の天氣にして川の石は薄氷をはり落葉が積つて滑つて閉口いたし候。別に困難する事もなく兩門瀧の處も簡單に、更に溯つて木賊山の密林を丁度三角點にいて候。展望よろしく大いに感謝いたし、甲武信へは其日三組の登山客有之候。梓山着八時。翌十一月二日は信州峠をやめて野邊山原を日野春へ抜け候。

この日天氣變幻極まりなく、變まで降り候も結局上天氣で、月夜に北岳駒を眺め、九時過ぎ驟に到着、東西に別れ申候。紅葉殊に落葉松は奇麗にて、八ヶ岳裾野は春とは様異りて仲々面白く覺え申候。(十一月六日 戸澤英一)

△先月廿八日信州大町より龍川谷へ入りスキーにて針木岳を極めました。龍川谷へ入るには幸ひ畠山小舎、大澤小舎に泊りて吹雪の日を過し、本月四日、雲霧が終日深く谷を罩め、雪の山稜頂のみ雲表に輝く日、針木岳の頂に立つことを得ました。大澤小舎より針木峠まで登り二時間半、降り十分。峠より針木岳への山稜はシュタイクアイゼン、ピッケル、ザイルを用ひて堅き氷雪の上に三時間半の苦闘を續けました。頂より雲霧の澄湧する黒部谷を隔てゝ立山、劍岳の巨きな、静かな輝きは又素晴らしいものでし

た。五日の日は吹雪でしたが龍川を下つて半日で大町へ出ました。同行者三人でした。東京のある新聞紙は私達が里に出ない前に私達の登山の失敗を誤報してゐましたのには一寸驚かされました。

(大正十四年一月十日 船田三郎)

△寂しき元日の夜を船中に明し、二日早朝大島岡田村に上陸、元村を経て三原山に登高仕候。天氣晴朗海を隔て、天城は眼前に伊豆七島は南方遙に展望し得申候。外輪山の中は廣大なる砂漠をなし案内人の荷を頭に載せ行く様は一寸異國的な感と興へ、噴火口の噴烟の壯大さに驚異を感じ申候。南端の港、波浮港に下り、四日、二十噸級の發動機船を雇ひ可なりの危険を冒し伊東に渡り温泉に浴し六日夜、歸京仕候。(一月二十四日 三輪勲、野口末延)

會

報

○第二十六回小集會記事

大正十三年十一月十六日午後一時半より、麴町區清水谷皆香園にて開催、司會者冠松次郎氏の開會の辭及乾徳山と黒金山との登山路に就て概況報告あり、次で左の講演に移る。

一、秋の尾瀬沼

本暮理太郎氏

昨年の十月中旬、同氏が會員松本善二氏と日光湯元から金精峠を踰えて戸倉に出で、夫から尾瀬沼に行かれた時の旅行談である。此行は尾瀬の紅葉を觀賞することが目的であつたそうであるが、時期少しく遅れて、沼の畔では小部分の白樺を除く外は、闊葉樹といふ闊葉樹は皆葉を振ひ落してしまつたし、又池の周囲の濕原を彩どる草も枯れてゐたので、秋の光景に接することは出来なかつたけれども、思ひ懸なく三四寸も雪が降り積つた

爲に、冬の有様の一斑を窺ひ得たさうである。しかし雪の晴れた日に燧岳の頂上から展望した只見川の溪谷と檜枝岐方面の霜葉の大觀は、會て氏が二三年前の秋鬼怒沼南方の山稜から尾瀬方面を瞰下して、其の絶大の美觀に吃驚した以上のものであつたといふことである。尙ほ尾瀬に關する傳説や又古書に現れたる尾瀬に就て說かれる所があつた。

二、鳥海山及月山

武田 久吉氏

此夏氏が跋涉された登山談で、七月下旬上野發午後八時奥羽廻り青森急行の汽車で翌朝羽後遊佐に下車、それから徒歩巖岡に向ひ、その日は里宮を経て箸王子俗稱横道の宮に泊り、翌朝籠山、八丁坂、河原宿、大雪路、小雪路、薊坂を過り頂上奥宮泊り、翌日午前中は新山及七五三東嶺を探究し、中食後千蛇谷を下り、注連懸、鳥の海、賽の磧、佛石坂を通つて吹浦に下り鳥海登山を了り、汽車にて酒田に走り、同市今町の今咲屋と云ふ心地よき旅舎に泊り、翌朝酒田より汽車にて狩川に下車、自働車に乗り手向に到り、三山神社々務所

を訪問して、十一時發羽黒山に上り、午後峯中堂を過ぎ大満原を横ぎり、月山境内に入り、楠の大森林を穿ちて、皇子石強清水を経て狩籠に泊り、翌朝平清水、今清水を通り御田ヶ原に上りて灌木帯に出で、雪田や御花畑をあさり、夕刻頂上鍛冶屋敷に泊り、翌日は大霧、神社に參拜の後姥を下り湯殿山に出て、同所で中食をとり、仙人澤を経て六十里越街道に出て、ブナの密林を貫ける縣道を辿りて夕刻志津に着し、翌朝弓張平及森林を下り本道寺に出て、海味より自働車にて羽後高松に到り夜山形に着、歸京された。

鳥海山より月山の方が人氣がある爲に、月山行の人は多かつたが鳥海の方へ行く人は甚だ少なく、參詣人が不足なので神社は甚だ不景氣であつたが、その爲に待遇もよく神境の寂寥を増して却つて感じがよかつたとのことである。河原宿附近から上は高山の風趣を呈して山草も可なり饒で、残雪もあり假松などが茂り、ヒナ櫻、エーデルワイズなどが見られた。

月山は羽黒山湯殿山と共に一つの登山路に沿ふ

て行かれる。然し羽黒山一つ登つても月山湯殿山へ上つたのと同じことになり、月山へ登れば羽黒山湯殿山へ登つたものと同じことで、湯殿山へ行つたとすれば矢張月山羽黒山を併て上つた丈の御利益があると言ふ風習になつてゐる。月山は鳥海山より幅が甚だ廣く、鳥海山を乾燥した火山とすれば月山を濕潤なる火山と云ふことが出来る。そうして同氏は鳥海山よりも月山の方が複雑で風趣に富んでゐると述べられた。

當日の出席者は岩瀬勝治、小松喜一、瀬戸強三郎、濱田千三郎、飯塚篤之助、高畑棟材、前川満壽雄、神谷恭、青木軍二郎、松井幹雄、吉田直吉、岩井三郎、鳥谷幡山、酒井忠一、野口末延、磯貝藤太郎、村越匡次、岡野徳之助、本多友司、大熊保夫、辻莊一、辻達治、書上喜太郎、加藤留五郎、山邊仁夫、松本善二、伊藤朝太郎、武田久吉、高頭仁兵衛、植有恒、梅澤親光、鳥山悌成、冠松次郎、木暮理太郎の三十四氏にして、他に數名の會員外出席者ありたり。午後五時閉會す。

○交換及寄贈圖書目

山とスキー 第四十二、四十三號

關西時報 第三十二、三十三、三十四號

山岳時報 第七、八號

アルカウ趣味 第十一年第六、七、八、九號

山嶺 No.16

嶺々岳を中心として

福澤桃介著

Alpine Journal Vol. XXXVI No. 228, 229

L'Echo des Alpes 59^{me} Année No. 11, 12. 60^{me}

Année No. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 11

Geographical Journal Vol. LXIII No. 6 Vol.

LXIV No. 1, 4, 5, 6.

La Montagne 19^{me} Année No. 166, 167, 20^{me} Année

No. 163, 170, 171, 172, 173, 175.

La Montagne; Mémoires du Cinquantenaire du

Club Alpin Français 1874-1924 No. 174.

Bulletti del Centre Excursionista de Catalunya

Any XXXIV No. 351, 352, 353, 354, 355.

The Bulletin of the Geographical Society of Philadelphia,

Vol. XXI No. 4. Vol. XXII No. 1, 2, 3, 4.

Bulletin Appalachian Mountain Club, Vol. XVII No. 8.

The Prairie Club, Bulletin No. 138, 139, 140, 141, 142.

Field and Forest Club, April, June, September 1924.

Herons of the United States, No. 5.
Trail and Timberline, No. 72, 73, 74, 75, 76.

The Mountaineer, Vol. XVI No. 11, 12, 13. Vol. XVII No. 1.

Bird-Lore, Vol. XXVI No. 5.
Natural History, Vol. XXIV No. 2, 5.

Alpin, 31 Jahrgang, No. 11, 12. 32 Jahrgang No. 3, 4, 6, 9, 11, 12.

The Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. 16, No. 96. Vol. 17, No. 97, 98.

Year-book of the Field and Forest Club, 1924.

Hrvatski Planinar, Broj. 4-5, 7, 8-9, 10.

Revue Alpine, Vol. 25 No. 3.

Mazama, Vol. VI No. 4. Vol. II No. 8.

Sierra Club Bulletin, Vol. XII No. 1.

Sierra Club Circular No. 11.

The Chautauque Bulletin Vol. XIV No. 1.

Rivista del Club Alpino Italiano Vol. XLIII 1924.

Nededeelingen der Nederl. Alpen-Vereeniging

Twec en Twintigste Jaargang (1924²)

○ 本會規則拔萃 (大正十三年九月改正)

第二條 本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的ヲス

第三條 本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、

又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアル

第五條 本會ハ會長ヲ裁カス幹事若干名ヲ設キ一切ノ會務ヲ處理
セシム

第十條 本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ
幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラルモノトス

第十一條 正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所

姓名、年齢及び職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スヘシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス（入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ）

第十二條 入會ノ許可ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス

第十三條 入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マルヘシ

第十四條 正會員ハ會費年金參圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス（以下略）

現任幹事（八名）

藤島 敏男 冠松 次郎 木暮 理太郎 横 有恒

六 鷗 保 高田 達也 高頭 仁兵衛 鳥山 梯成

評議員（十八名）

小島 久太（在桑港） 武田 久吉 梅澤 親光 高野 鸞藏

近藤 茂吉 中村 清太郎 三枝 守博 辻本 滿丸

田部 重治 山川 默

及び現任幹事八名

○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと。

一、用紙は半紙又は牛紙半枚大、天地左右をあけ、毎紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行数のこと。

一、ハ、ニ、等（等）等は各一字畫宛とし、行を更むる時は一字下げのこと。

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして宛字をなす時は其旨を括弧内に明記す可きこと。

一、原稿は必ず左記宛て送附のこと

東京市本郷區駒込蓬萊町三十一番地「山岳」編輯所

尙ほ編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと、殊に挿圖寫眞等のある原稿は其調製方印刷方につき一應御相談あらば幸なり。

スケッチは複製の際誤記脱漏等の虞あるを以て豫め本誌面に適當せる大さに調製あらんことを望む。

第十八回大會豫告

日時 大正十四年五月三十一日午後六時

場所 芝區高輪南町三十番地調和道協會

開會之辭

諸報告

講演者

演題

日本に知られざる國々

（幻燈二百餘枚使用）

閉會

「幹事

志賀重昂氏

大正十四年四月二十日印刷
大正十四年四月廿三日發行

【定價金壹圓貳拾錢】

新潟縣三島郡深才村深澤

高頭仁兵衛

東京市神田區美土代町二丁目一番地

島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地

三秀舍

新潟縣三島郡深才村深澤

日本山岳會

東京市芝區高輪南町三十番地

日本山岳會會計取扱所

振替口座東京四八二九番

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂



印刷者

印刷所

發行所

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XVIII

1925

No. 3